

## 第IV章 遺 物

### 1 瓦 塼 類

今回の調査区は左京七条一坊十五坪・十六坪、東一坊大路、六条大路、七条条間北小路、東一坊坊間東小路に及ぶが、本項では瓦塼類の出土地点にかかわり無く、軒丸瓦・軒平瓦を型式番号順に、他の瓦を種類ごとに記述する。なお、型式番号は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧(以下、『型式一覧』と略す)』(奈文研・奈良市教委 1996)に準拠する。軒丸瓦の外縁形態、軒平瓦の顎形態は『平城宮報告XIII』に準拠するが、軒丸瓦の外区内縁を外区、外区外縁を外縁と略す。

#### A 軒 丸 瓦 (Pl. 21・22, Ph. 25)

奈良時代の軒丸瓦は、型式判明が10型式11種12点、型式不明が8点出土した。そのほか中世の巴文軒丸瓦が1点ある。

**6012B** 6012は中央に珠点がある三重圈軒丸瓦で、A～K・Mの12種がある。東一坊大路西側溝・暗灰砂層からBが1点出土した。Bは、圈線を内側から数えて第1・2圈線の間隔が、第2・3圈線の間隔より広い2種(A・B)のうち、やや大振りなものである。接合式である。

**6143A** 6143は単弁蓮華文軒丸瓦で、A種のみがある。東一坊坊間東小路上から1点出土した。内区が短い菊花状重弁＋連続する間弁、外区が珠文縁、外縁が低い傾斜縁Iで粗い鋸歯文をもつ。間弁が高く突出するのが特徴である。丸瓦の接合位置が低く、凸面側の接合粘土が多く、接合線は低い台形状を呈する。

**6272B** 6272は複弁蓮華文軒丸瓦で、外縁に面違鋸歯文をもつ2種(6271・6272)のうち、8弁のもの。中房に1＋4＋8の蓮子を配す。弁には照りむくりがなく子葉が長く高く突出する。外縁を外区より一段高くする。成形は接合式である。A・B2種があり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からBの外縁のみの小片が1点出土した。BはAより中房と外縁の突出度が小さい。

**藤原宮式型式不明** 外区珠文が密な藤原宮式の小片1点が東一坊大路西側溝・暗灰砂層から出土した。

**6282Bb** 6282は弁を取り巻くB系統の間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦の一種。蓮子が1重で、弁は照りむくりがなく線的に表現する。A～E・G～I・Lがあり、A以外は中心蓮子が他の蓮子より大きく、外区・外縁間の界線が太い。東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からBbの小片が1点出土した。Bは蓮弁が短く、子葉を囲む輪郭線どうしが離れる。Ba・Bbがあり、Bbは中房と弁区の境に界線がなくなり、子葉を囲む輪郭線と間弁が接したり、輪郭線どうしが接する箇所がある。接合式である。

**6282Ca** 6282には小型品が2種(C・D)あり、両者酷似するが、Cの方が、中房中央の蓮子が大きく、弁を取り巻く間弁が細い。Ca・Cbがあり、Cbは弁を粗雑に掘り直す。接合式である。本例はCaで、東一坊大路西側溝・暗灰砂層から小片1点が出土した。

**6285A** 6285はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦で、中房が小さく、弁が細長く中高に盛り上がる。A・Bの2種があり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAが1点出土した。Aの方が弁の盛り上がり強く、中房が凸レンズ状に高まる。接合式である。

**6291Ab** 6291はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦であるが、弁の形態は、間弁A系統の6308・6311と類似する。A～Cがあり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAbが1点出土した。Aは内区が中高で、中房が突出し、間弁端に小さな三角形がある。外縁は傾斜縁Ⅲで頂部に1条の凸線がある。Aa・Abがあり、Abは対角線的位置にある2箇所の間弁と三角形とを繋げ、弁を取り巻く間弁の弁央湾入部を掘り直して直線状とする。丸瓦の接合痕跡がなく、一本造りと考えられている。

**6304L** 6304はB系統間弁をもつ複弁蓮華文軒丸瓦で、中房が突出し、弁が長く先端が尖り気味で中高に盛り上がる。A～E・G・L・N・Oがあり、東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からLが1点出土した。Lは大型品で、中房が凸レンズ状に膨らみ、子葉を囲む輪郭線が太い。接合式である。

**6308C** 6308は外区に珠文、外縁に線鋸歯文をもち、間弁がA系統で、小さい中房に蓮子を一重に巡らす複弁蓮華文軒丸瓦のうち、中房が外区と同高ないしやや高く、弁区と同高ないしやや高いもの。A～D・H～N・Rがあり、HT13区の遺物包含層からCの小片が1点出土した。Cは内区が盛り上がり、中房が突出せず、間弁端と弁端湾入部に三角形を置く。一本造りと考えられている。

**6314A** 6314は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦(6313・6314)のうち、B系統間弁で中房に1+5～6の蓮子を配すもの。A～Fがあり、東一坊大路西側溝・暗灰粘土層からAの小片が1点出土した。Aは面径が最大で、弁が中高に盛り上がり、弁端が尖る。外縁は傾斜縁Ⅲで頂部に1条の凸線がある。一本造りと考えられている。

新 型 式 **6346Aa・Ab** 当調査地で初出の新型式である。外区に珠文、外縁に唐草文があり、中房に蓮子が2重にめぐる複弁8弁蓮華文軒丸瓦(6345・6346)のうち、6345は外縁が平坦であるのに対し、6346は傾斜縁である。弁区が中房に向かってやや盛り上がり、中房は弁区より少し突出する。中房には1+5+12の蓮子を配す。Aa・Abがあり、東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点ずつ出土した。Aaは中房の外周に凸線がめぐる。AbはAaの中房外周凸線の頂部の高さまで中房全体を高くし、さらに低く幅広い中房外周凸線をめぐらす。蓮弁・間弁は線的に表現され、Abは弁の基部を中房に向かってわずかに高く彫り直す。間弁は先端がM字形で蓮弁と接続し、弁区全体が一見細弁の集合のように見える。外区の内外の界線が太く、珠文は密で配置が不整である。珠文の数は不明だが40ほどと推定できる。外縁は傾斜縁Ⅰだが途中で傾斜角が変わり、下半が約45°、上半が約70°で、頂部をヘラケズリで面取りする。外縁下半の傾斜面に、第一角が短く第二角が長い「八」字形の唐草文を疎に配す。唐草文の数は不明だが11単位ほどと推定できる。整形は接合式で、丸瓦の取付位置は蓮弁の端部に当たり、丸瓦端は外区面から1.8 cmの位置まで入る。丸瓦の内外の接合粘土は比較的多く、接合線は円弧を描く。瓦当裏面はやや中窪みで、ナデののちヘラケズリする。瓦当下半側面はヘラケズリし、現状の外縁頂部から0.8 cmほどの位置に、範型と枷型の合わせ目の痕跡が残る。焼成良く硬質で、Aaは灰白色、Abは燻し焼き風で暗灰色を呈する。

## B 軒 平 瓦 (Pl. 23・24, Ph. 26)

奈良時代の軒平瓦は、型式判明が9型式14種20点、型式不明が2点出土した。そのほか中世の軒平瓦が1点ある。

**6641J** 6641は支葉が2～3個の偏行唐草文軒平瓦のうち、上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を置き、右偏行のものである。A・C・E～Pがある。当調査区で東一坊大路西側溝・暗灰砂層から出土した個体は小片1点であるがJと推定する。Jの標式資料は薬師寺出土の1点のみで、瓦当の左3分の1であり、唐草は第3単位の左半までしか残らない。当個体は唐草の2単位分のみが残るが、平瓦部の側面が一部残り、現存部が唐草の第4・5単位であることが判明する。もっとも当個体は標式資料と文様の重複部分を持たないので、厳密にはJと確定できない。しかし両者ともに、瓦当面に範の木目が顕著に浮き出ており、その木目の特徴や方向が酷似することから、当個体もJと推定し、標式資料と当個体とでJの特徴を記述する。茎の始点が反転せず、唐草第3単位と第5単位の茎が、内区と外区の界線に並行して走るのが特徴である。脇区は内区との界線沿いまでヘラケズリされており、鋸齒文の有無は不明である。粘土板桶巻作りで、凸面は縦縄タタキのあとナデでタタキ目を消す。凹面はナデで布目を消し、瓦当沿いを横にヘラケズリする。貼りつけ段顎で、顎面にはナデをほどこし、顎幅は8cmである。焼成良く硬質で標識資料は淡灰色、当個体は燻し焼き風で暗灰色を呈する。

**藤原宮式型式不明** 偏行唐草文軒平瓦の小片で、6641の可能性が高いが、二次的に焼損して文様が膨れ上がり不鮮明であるため、確定できない。IC13区の遺物包含層から出土した。

**6663F** 6663は外区が圈線文で3回反転の均整唐草文軒平瓦のうち、上に巻き込むC字形中心葉で花頭形を囲む中心飾りを持つもので、A～F・H～Mがある。F・H～Jは唐草第3単位の主葉と第1支葉が界線に接さず巻き込む。東一坊大路西側溝・褐色粗砂層からFの小片が1点出土した。Fは中心飾りが大振りである。段顎と曲線顎があり、本例は曲線顎である。

**6663J** Jも東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から1点出土した。Jは内区の幅が狭く中心飾りが横長で、文様が太い。顎は曲線顎IIで、顎面の幅が2～3cmと広く、当個体は2.2cmである。凸面は縦縄タタキ、凹面はナデで布目を消し、顎面はヨコナデ調整する。焼成良く暗灰色を呈する。

**6668C** 6668は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込むC字形中心葉で花頭形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草が3回反転の7型式のうち、花頭の左右端が尖るものである。A～Cがあり、Cが東一坊大路西側溝から1点出土した。Cは当調査地で初出の新型式で、花頭形の基部がA・Bと異なり平行し、外区の珠文が密である。段顎Iで顎幅は5.5cm。顎端で欠損し平瓦部を欠く。顎面と凹面は横にヘラケズリののちナデを施す。上外縁側面に範端痕があり、範端は縁頂部から5mm。焼成良く暗灰色を呈する。 新 型 式

**6681A** 6681は外区が圈線文で3回反転の均整唐草文軒平瓦のうち、上に巻き込むC字形中心葉で有軸三葉形を囲む中心飾りを持つもので、A～G・Sがある。Aが第251次調査区のSX6402から1点出土した。Aは唐草第3単位主葉と第1支葉が脇区との界線に接する3種(A・B・E)のうち、もっとも小振りで、曲線顎である。当個体は外区の左端のみ残り、焼成甘く燻し焼き風である。

**6681C** 6681C は東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から 1 点が出土した。C は唐草第 3 単位主葉と第 1 支葉が脇区との界線に接さず、中心飾りが逆 T 字形で中心葉とつながっている。曲率の緩い曲線顎Ⅱである。当個体の顎幅は 1.7 cm であるが、面取り部とそれ以下との境界線が不明瞭で、一見曲線顎Ⅰのように見える。凹面はナデで布目を消し、瓦当沿いを横にヘラケズリする。凸面は縦にヘラケズリする。焼成良く、淡灰色を呈する。

**6691A** 6691 は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込む C 字形中心葉で有軸三葉形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草が 4 回反転の 3 型式のうち、花頭が獅子鼻形のものである。A・B・D・F があり、A が東一坊大路西側溝の褐色粗砂層から 1 点、暗灰砂層から 2 点、暗灰粘土層から 1 点出土した。A は唐草の巻き込みが小さく、中心飾りの軸部上端が小さく二股に分かれており、界線に接しない。直線顎と曲線顎Ⅱがあり、当地の出土品はすべて曲線顎Ⅱで、顎幅は 1.3、1.5、1.8、1.8 cm である。平瓦部はもっとも良く残るものでも瓦当面から 15 cm までしか残らないが、4 点とも、凹面はナデで布目を消し、凸面にもナデを施す。すべて焼成良く、灰色を呈する。

平安時代から  
奈良時代に  
変更

**6703A** この型式はかつて平安中期とする説<sup>1)</sup>もあったが、飛鳥・山田寺で 6143A と組む奈良時代の瓦であることが明らかとなり<sup>2)</sup>、『型式一覧』では 6703A と名付けた。東一坊大路西側溝・暗灰粘土層から 1 点出土した。通常を中心飾りと向きが逆転し、下に巻き込む C 字形中心葉で、左右端の尖った上向き花頭形を囲む中心飾りを持つ。唐草は 3 回反転で、第 1 単位が中心飾りの上部から発し、各第 1 支葉が大きく巻き込みも強い。主葉と第 1 支葉の間に、M 字形に Λ 字形を重ねた蕾状の飾りを置くが、左第 3 単位では蕾の表現に省略が見られる。顎は曲線顎Ⅱで、顎幅は 2.2 cm である。顎面を横にヘラケズリし、斜面は当個体では横にヘラケズリし、薬師寺出土品では縦に板でナデを施す。平瓦部凸面には縦縄タタキ目を残し、凹面は布目を残し瓦当寄りを横にヘラケズリする。焼成良く、灰色を呈する。

**6710A** 6710 は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込む C 字形中心葉で Λ 形を囲む中心飾りを持ち、外区が珠文で、唐草は巻きが弱く 3 回反転である。A・C・D があり、A が東一坊大路西側溝・褐色粗砂層から 1 点、十六坪南西隅の土坑 SK6607 から 1 点出土した。A は上下外区の珠文間に各 4 個の×文を入れる。直線顎で、凸面は縦のヘラケズリで縦縄タタキ目を消し、凹面は瓦当寄りを横にヘラケズリする。1 点は焼成良く、燻し焼き風で暗灰色を呈し、他は焼成やや甘く、灰白色を呈する。

**6710C** 6710C は七条条間北小路北側溝から 1 点、同側溝北側の遺物包含層から 2 点出土した。A に比して中心飾りが大きく、唐草が太く、外区に×文がない。直線顎である。当地の出土品はいずれも焼成甘く、灰白色を呈し、表面の残りが悪い。

**6716C** 6716 は均整唐草文軒平瓦で、下に巻き込む C 字形中心葉で小字形三葉形を囲む中心飾りを持ち、唐草主葉が連結し、支葉は主葉から派生する。A から F があり、C が東一坊大路西側溝から 1 点出土した。C は外区に杏仁形珠文を密に配す 3 種(A～C)のうち、唐草の巻き込みが最も小さい。段顎Ⅰで顎幅は 5.2 cm、焼成甘く、灰白色を呈する。

**6721A** 6721 は均整唐草文軒平瓦で、上に巻き込む C 字形中心葉で小字形を囲む中心飾りを持ち、唐草が 5 回反転で、外区に密に珠文を配す。A・C～K があり、A が東一坊大路西側溝・暗灰砂層から 1 点出土した。A は中心飾りの両支葉が杏仁形でほぼ水平である。中心飾りの中軸



に珠文を置かない。唐草の巻きが弱い。曲線顎IIで、顎幅は1 cm。顎斜面は縦ヘラケズリののち、縦にナデを施す。上外縁側面に範端痕があり、範端は縁頂部から3 mm。凹面は瓦当際までナデる。

**6721C** 6721C は東一坊大路西側溝・青灰細砂層から小片が1点出土した。Cは中心飾りの両支葉が逆八字形である。中心飾りの中軸に珠文を置かない。唐草の巻きが弱い。曲線顎IIで、顎幅は1.1 cm。外縁側面に範端痕があり、範端は縁頂部から3 mm。焼成やや甘く、燻し焼き風で暗灰色を呈する。

**6721Gb** 6721Gb は東一坊大路西側溝・暗灰砂層から1点出土した。Gは中心飾りの両支葉が三日月形でほぼ水平。中心飾りの中軸に珠文を置く。唐草は繊細で抑揚がある。唐草右第5単位第2支葉を欠く。Ga・Gbがあり、Gaは外区の珠文の外側にも界線を置き、外区より一段高い外縁を持たない。Gbでは外側界線の所から立ち上がる外縁をつくる。Gaは直線顎、Gbには直線顎と曲線顎IIがあるが、当个体は顎を欠き不明である。焼成良く、灰白色を呈する。

## C 丸瓦・平瓦(Ph. 27)

遺構や遺物包含層から出土した丸瓦は412.1 kg(5,196点)、平瓦は1410.2 kg(13,484点)に達するが、丸・平瓦の多くは破片であって、資料的に十分な検討を行うにいたっていない。しかし、全形を知りうる資料があるので、それについて記す。

**丸瓦** 井戸 SE6657堆積土最上層から出土した。粘土板巻き付け技法によるもの。広端部の一隅を欠くが、全長36.0 cm、玉縁長4.4 cm、径は広端部で16.7 cm(復原)、玉縁端部で10.9 cm。厚さは広端部で1.8 cm、玉縁端部で1.5 cm。凸面には縦位の縄叩きを施した後、横方向にナデて叩き目を消すが、わずかに残る。玉縁部の凸面と端面及び丸瓦部の玉縁側端部には、横方向のナデを施す。丸瓦部の広端面はヘラケズリする。側面は広端部から玉縁までを一連にヘラケズリする。胎土に小礫と長石類を少し含み、焼成は硬質で、淡赤褐色を呈する。

**平瓦 1** 井戸 SE6657の裏込めから出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。全長33.3 cm、幅は広端部で25.4 cm、狭端部で20.6 cm、厚さは1.6~2.0 cmと一定でない。凸面には糸切り痕と縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には糸切り痕と布目がよく残り、ナデは施していない。凹凸両面の広端寄りにも狭端寄りにも、手で持った際の指頭圧痕があり、いずれも親指は凸面に当てられている。側面と両端面にはヘラケズリを施す。凹面の狭端寄りと片方の側縁を面取り風にヘラケズリする。胎土に小礫と砂粒を含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

**平瓦 2** 井戸 SE6657井戸枠内埋土から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。狭端部の一隅を欠くが、全長31.6 cm、幅は広端部で25.2 cm、狭端部で20.8 cm(復原)、厚さは1.5~2.1 cmと一定でない。凸面には縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には布目がよく残り、ナデは施していない。広端寄りの凹凸両面には、手で持った際の指頭圧痕があり、親指は凹面に当てられている。側面と両端面にはヘラケズリの後ナデを施す。凹面の狭端寄りを面取り風にヘラケズリする。胎土に砂粒を含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

**平瓦 3** 遺物包含層から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。広端部の一隅を欠くが、全長34.5 cm、幅は狭端部で20.0 cm、厚さは1.5~2.1 cmと一定でない。

凸面には縦位の縄叩き目がよく残り、ナデは施していない。凹面には布目がよく残り、ナデは施していない。側面と両端面の調整は、表面の遺存状態が悪く不明である。凹面の狭端寄りを面取り風にヘラケズリする。胎土に砂粒を含み、焼成はきわめて硬質で灰白色を呈する。

**平瓦 4** 掘立柱建物 SB6651西側柱列の南から1間目の柱穴から出土した。側縁近くに布端が残り、一枚作りによるものである。広端部の一隅を欠くが、全長33.5 cm、幅は狭端部で22.2 cm、厚さは1.7~2.2 cmと一定でない。凸面には縦位の縄叩き目が残り、ナデは施していない。凹面・側面・端面は表面の遺存状態が悪く観察不能である。凹面の狭端寄りと同側縁を面取り風にヘラケズリする。胎土に小礫と砂粒を含み、焼成はきわめて硬質で淡赤褐色を呈する。

## D その他の瓦埴類(Pl. 22, Ph. 26・27)

**隅平瓦** 小片が東一坊大路西側溝から2点出土した。隅平瓦は寄棟や入母屋などの隅棟に葺かれたもので、焼成前に広端の一方の隅を裁断している。1点は広端面と裁断面のなす角度が140°で、厚さは28 mm。他は裁断面と側面を残し、厚さは16 mmである。

**埴** 223点出土したが、小片がほとんどであり、全形が復原できる5点と特異な1点について記述する。方約1尺の方形に復原できる個体が4点ある。28.3×24.3以上×6.2 cm、27.8×24.2以上×5.4 cm以上の2点は、井戸 SE6561の井戸枠裏込めから、29.2×28.9×6.7 cm、29.0×26.5以上×6.5 cmの2点は、東一坊坊間東小路路面上の土坑から出土した。1尺×0.5尺の長方形に復原できる個体が1点ある。29.4×15.3×6.7 cmで東一坊大路西側溝から出土した。これらはいずれも型枠に粘土を充填して作る規格品である。辺の長さが不明だが稜が丸く厚さ8.5 cmの特殊埴が東一坊大路西側溝から1点出土した。これは型枠を用いずに粘土塊を積み上げて成形した可能性がある。

特 異 な  
文 様 埴

**文様埴** 筧による凸線の文様を有す埴が、七条条間北小路北側溝から1点出土した。現状で8.5×8.1×4.5 cmの小片で、本来の形が方形か長方形か不明である。側面は1面だけ残り、その面に文様がある。厚さは文様がある側でもっとも厚く4.5 cm、他端は4.2 cmである。文様は幾何学文様で他に類例がない。 $\phi$ 形と串団子形を一部重複させて文様面主軸に直交するように配し、団子状部から4本の緩曲線が主軸に沿って出る。型枠に粘土を充填して成形し、上下面は側面に平行して粗くヘラケズリする。上下面に筧端痕は無く、筧が文様面の幅より広がったか、筧端痕がケズリで除去されたかであろう。焼成良く灰色を呈する。

**土管** 東一坊大路西側溝・青灰細砂層から1点出土した。直径13.4 cmで、玉縁側は欠けており、現存長22.5 cm。粘土紐巻き付けで成形され、外面は横方向にヘラケズリしたのち、縦方向にナデを施す。内面には布目を残すが、広端面から5.5 cmの所まで深さ2~3 mmでヘラケズリして布目を削り落とし、内径を大きくしている。玉縁の直径が丸瓦部広端面側の内径より大きくなって、接続に難を生じるのを防ぐためであろう。焼成甘く、淡灰褐色を呈する。

1) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』1980

2) 花谷 浩「山田寺軒平瓦の概要と主要堂塔の造営・修理」『山田寺学報検討会記録I』1995

## 2 土器・土製品

左京七条一坊十六坪とその周辺の調査では、多量の土器が出土した。土器を出土したのは主に東一坊大路西側溝 SD6400であり、他には六条大路と七条条間北小路の側溝や井戸、土坑、土器埋納遺構、建物の柱穴をはじめとする遺構や包含層などである。出土土器には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、製塩土器や、硯・土製円板などの特殊土製品、祭祀用土器・土製品、および縄文、弥生、古墳時代の土器、埴輪があるが、土師器、須恵器が多数を占める。SD6400からは祭祀用土器・土製品が大量に出土し、注目される。ここでは、SD6400出土土器を中心に、井戸、土坑、土器埋納遺構、柱穴の出土土器、奈良時代以外の土器、施釉陶器、特殊土製品、祭祀用土器・土製品、墨書土器の順に記述する。

土器の器形、調整手法、年代などに関しては、既刊の『平城宮発掘報告』<sup>1)</sup>に従うこととする。現在、8世紀から9世紀初頭の土器の編年に関しては、平城宮土器Ⅰ～Ⅶまで細分しており、そのうち平城宮土器Ⅲは古・中・新の3段階を設定している。平城宮土器Ⅵは長岡京時代、平城宮土器Ⅶは9世紀初頭のものである。恭仁宮への遷都(739・天平12年)は平城宮土器Ⅲ古段階の終末、平城宮への還都(745年)は平城宮土器Ⅲ中段階の頃と考えている。

平城宮土器  
の 編 年

土師器の調整手法は、記述の煩雑を避けるために記号化している。a手法と呼ぶのは、土器の口縁部外面をヨコナデし、底部を調整せずに残すもの。b手法は口縁部をヨコナデ、底部をヘラ削りで調整するもの。c手法は口縁部と底部の全面にヘラ削りを施すもの。e手法は口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しないものである。また、土器の外面にはヘラ磨きを施す場合があるが、施す場所の違いによって区別を行なっている。1手法と呼ぶのは口縁部だけを磨くもの、2手法は底部を磨くもの、3手法は口縁部と底部の両方を磨くものを示す。また、口縁部も底部も磨かないものがあるが、それは0手法と呼んでいる。この様に、a～e手法と0～3手法の組合せによって、a1手法などと、調整を表現できることになる。

土 師 器 の  
調 整 手 法

また、胎土により、土師器を2群、須恵器を6群に分けている。土師器のⅠ群土器は胎土に砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈するもの。Ⅱ群土器は砂粒を多く含むもので、灰褐～赤褐色になるものである。今回の調査では、Ⅰ群土器はほとんど出土していない。須恵器のⅠ群土器は、青灰色を呈し、黒色、白色の粒子を含み、Ⅱ群土器は黒色粒子がナデや削りで墨を流したように延びるものである。Ⅲ群土器は、花崗岩の母岩に近い粘土を用い、磁器質に焼き上がるもの。Ⅳ群土器は粗大な長石類の他、白色微砂を含むもの。Ⅴ群土器はやや砂っぽい胎土で、微細な黒色粒子を含み、赤みを帯びた黒褐色を呈するもの。Ⅵ群土器は、砂っぽい胎土で、焼き締まりが悪く、表面がざらざらした感となり、明灰色～淡暗灰色に発色するものである。以上の須恵器の群別は、産地の差を反映しているもので、Ⅰ・Ⅱ群土器は和泉陶邑窯、Ⅳ群土器は生駒東麓窯、Ⅴ群土器は尾張猿投窯、Ⅵ群土器は美濃須衛窯の製品に比定でき、Ⅲ群土器は播磨の製品であると推定している。

土器の群別

須 恵 器 の  
産 地

土器に付した番号は、実測図、写真図版、表ともに共通している。なお、1～100番台は土師器、200～400番台は須恵器、500番台はそれ以外の土器、施釉陶器、特殊土製品、600～900番台は祭祀用土器・土製品を示す。

## A 東一坊大路西側溝出土土器

奈良時代のものとしては、土師器、須恵器、製塩土器と奈良三彩などの施釉陶器、特殊土製品、および祭祀用土器・土製品が出土した。奈良時代以外のものは縄文、弥生、古墳時代の土器と平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、瓦器がある。このうち、祭祀用土器・土製品、施釉陶器、特殊土製品と、平城宮土器Ⅶに属するものを除いた奈良時代以外の土器については後述することとし、ここでは奈良時代の土師器、須恵器と9世紀初頭の土器について述べる。

層位的傾向 土器は大きく上下4層に分けて取り上げたが、そのうち奈良時代の堆積層は下から褐粗砂層、木屑層、暗灰砂層の3層で、最上層の暗灰粘土層は平安時代の堆積層である。また、褐粗砂層の土器はほぼ平城宮土器Ⅱ～Ⅳの範囲で収まるが、木屑層、暗灰砂層出土の土器は各型式が混在しており、西側溝の掘り直しによる再堆積であると考えられる。そのため、層位ごとに記述する方法は採らず、器種ごとに説明していくこととする。なお、SD6400出土土器の地区、層位に関しては、平安時代の土器、祭祀用土器・土製品を含めて別表3に挙げたので、合わせて参照されたい。

### i 土師器 (Pl. 25・26, Ph. 29～31)

土師器の  
器種

杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、椀A、椀C、盤A、盤B、高杯の食器、壺A、壺B、壺Cの貯蔵器、甕A、甕B、甕C、甕X、鍋、竈の煮炊具がある。このなかで主体を占めるのは食器であり、甕の出土量はやや少なく、壺は小破片のものしかない。土器の出土量に比して完形に復せるものは少ない。以下、器種ごとに記述を行なう。

杯A (Pl. 25-1～12) 広く平らな底部と斜め上に開く口縁部を持ち、口縁端部は肥厚する。杯AI (1～7)・AII (8～10)・AIII (11・12)がある。1・2は平城宮土器Ⅱのもので、内面に連弧暗文を持つ。1はa<sub>1</sub>手法、2はb<sub>0</sub>手法で調整する。8・9は平城宮土器Ⅲ新段階のもので、ともにb<sub>0</sub>手法で調整し、8は内面に放射暗文がある。3・4～6・10・11は平城宮土器Ⅴに属する。4～6・10はc<sub>3</sub>手法、3・11はc<sub>0</sub>手法で調整する。7・12は平城宮土器Ⅶで、e手法で調整したものを削ったc<sub>0</sub>手法で調整する。

平城宮土器  
Ⅶの杯A

杯B蓋 (26・27) 27は杯BI、26は杯BIIに対応する。26は完形で、外面には4方向の丁寧な磨きがあり、縁部にはさらに4方向の磨きを施す。内面には螺旋暗文を施すが、つまみ頂部には螺旋暗文を持たず、平城宮土器Ⅲ古段階頃と思われる。

杯C (13) 底部は小さな平底で、口縁端部は内傾する。杯CI (13)・CIIがある。13はc<sub>0</sub>手法で調整するが、削りの範囲は口縁部直下までは達しない。平城宮土器Ⅴに属する。

皿A (28～42) 広く平らな底部に短い口縁部がつく器形。皿AI (28～32・40～42)・AII (33～39)がある。28・33・34はa<sub>0</sub>手法で調整し、放射一段暗文を持つ。29～31・38～42はc<sub>0</sub>手法で調整する。29～31・38は平城宮土器Ⅴ、39～42は平城宮土器Ⅶに属するものであろう。

灯火器

皿C (14～25) e<sub>0</sub>手法で調整した小型粗製の皿。15・18・19は灯火器として使用している。口径はほぼ12 cm前後であるが、23・24は約9 cmと小さい。

椀A (43～50) 口縁部は内湾しながら開き、底部は小さな平底となる。椀AI (48～50)・AII (43～46)・AIII (47)がある。ほとんどがc<sub>3</sub>手法で調整するが、46・50はc<sub>0</sub>手法で調整する。50

は平城宮土器Ⅶのものであろう。44は漆のパレットとして用いており、内面全体に黒漆が付着する。

**椀 C** (51~56) e手法で調整した粗製の椀で、外面に粘土紐の継ぎ目を残すものもある。口縁端部は面を持って内傾する。深い器形と浅い器形がある。55は灯火器として使用している。

**高杯** (57~62) 口縁部が大きく外に開く杯部に、脚部と裾部を付けた器形。大小の二者がある。完形に復元できるものは57のみである。57はⅡ群土器で、杯部内面に螺旋暗文、放射暗文と連弧暗文を持つ平城宮土器Ⅱのもの。58は螺旋暗文と左上がりの放射暗文、59は螺旋暗文を全面に持つ杯部で、ともに平城宮土器Ⅲに属する。外面は、縦方向に削った後、四方向の磨きを施す。59の暗文は、長屋王邸北の二条大路上に掘られた溝状土坑 SD5100出土土器に類例<sup>2)</sup>がある。60・61はⅠ群土器の脚部で、60は外面にハケ目を施す。61の裾部は磨かない。62は平城宮土器Ⅴに属するものの脚部で、裾部に磨きがある。

**壺 E** (63) 外反する体部が肩部で屈曲し、短い口縁部が立ち上がる器形で、高台を持つ。外面には密な磨きを施す。

**壺 B** (Pl. 26-69~72) 広口で、球形に近い体部に外反する短い口縁部を付す器形。口縁部のみを幅狭くヨコナデし、体部は不調整のままである。そのため、体部には粘土紐の巻き上げ痕跡や、指頭痕が残ることが多い。壺Bと壺Cは墨書人面土器として用いることが多いが、ほぼ完形品で出土し、墨書が認められないものはここで扱うこととする。71の胴部には小孔があるが、これは意識的な穿孔かは不明。72は完形品で、胴部の2ヶ所に把手を持つ。外面と口縁部内面にハケ目があり、胴部内面にナデの工具の痕跡が残る。

墨書人面  
土器用

**壺 C** (64~68) 壺Bを小型にしたもの。器形は頸部がくびれるもの(65)と、くびれずに口縁部のみが外反するもの(64・66~68)がある。65は胴部内面にナデの工具痕を残す。68は完形品で、底部に1ヶ所、焼成後の穿孔がある。64の内面には漆が付着しており、漆液を小出しにする容器として使用している。

**鉢** (73) 口縁部が内湾しながら立ち上がる半球形の器形で、内傾する口縁端部はやや凹んだ面を持つ。底部は、同一個体の破片から丸底となると思われる。内外面ともに口縁部直下をヨコナデし、胴部の外面は斜め方向の削り、内面はハケ目で調整する。外面に煤が付着しており、煮炊きに使用している。

煮炊用の鉢

**甕 A** (77~85) 球形の体部に外反する短い口縁部を付ける。口径はおよそ32 cm、28 cm (84・85)、20 cm (82・83)、17 cm (77・79)、14 cm (78・80・81)の5種に分かれる。口縁部は、外面は縦方向、内面は横方向のハケ目を施した後ヨコナデを加える。外面のハケ目はほとんどナデ消されている。81・82・84・85は内面のハケ目が顕著に残る。体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整を加える土器が主体を占めるが、77・79・80・85は内面にもハケ目が残る。79は体部外面下半に削り調整を加え、内面全体にハケ目を施す河内型の甕である。内外面に煤や炭化物の付着したものが多い。なお、図示はできなかったが、胴部内面に叩きの当て具痕を残す叩き成形の中型の甕も出土した。甕Aは完形に復せるものが少ないため、甕Bをも含む可能性がある。

**甕 B** (74~76・86・87) 甕Aに把手を付けた器形。口径約32 cmの大型品(86・87)と約12 cmの小型品(74~76)がある。大型のものは胴部の2ヶ所に把手が付くが、小型品は1ヶ所のみに把手を持つ。74・75・86は胴部外面にハケ目を施し、口縁部と胴部内面はヨコナデで調整する。87は

把手の数

口縁部内外面と胴部内面にハケ目が残る。86の把手は外方に張り出すが、87の把手は胴部に近接しており、退化した様相を示す。75はロクロ整形の甕で、胴部外面下半にロクロ削り、胴部外面上半と口縁部内外面にロクロナデを施す。口縁部から胴部にかけて、黒斑がある。

## ii 須恵器 (Pl. 27～31, Ph. 32～35)

杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯E、杯L、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、皿D、椀A、椀B、鉢A、鉢F、盤、高杯の食器、壺A、壺A蓋、壺B、壺E、壺G、壺K、壺L、壺M、壺Q、水瓶、平瓶、横瓶、甕の貯蔵器がある。先にも述べたように、再堆積層から出土したものが多く、型式認定が困難なものもある。I群、II群土器が主体で、V群、VI群土器も見られるが、I～VI群に属さないものもある。

**杯A** (Pl. 27・237～248) 平底で、口縁部が直線的に開く器形。杯 AI (237～240)・AII (241)・AIII (242～246)・AIV (247・248)がある。そのうち、237は杯 AI1、240は杯 AII1、242は杯 AIII1、247は杯 AIV1の深い器形であり、各口径に深いものと浅いものが認められる。

**I 群土器** 240・247はII群土器で、240は外面をロクロ削りする。243は群外の土器で、内面は硯として使用したためか、平滑に磨滅している。それ以外は全てI群土器で、237・241は底部外面をロクロ削りするが、他はヘラ切り不調整。237・245・246には重ね焼きの痕跡があり、238・242は灯火器として使用する。241は底部外面を硯に用いる。

**杯B** (217～236) 杯Aに高台を付した器形。杯 BI (217～220)・BII (221～224)・BIII (225～231)・BIV (232～234)・BV (235・236)がある。杯A同様、深い器形と浅い器形があるが、杯 BII1～BV1は少ない。

杯BもI群土器が多数を占め、図示したものでは、218・229がIII群土器、231・233が群外の土器である以外は、I群土器である。217～219・221・228は胴部下半をロクロ削りする。220は外面に布状のものでナデを施したらしく、細かい擦痕が残る。227は堅く焼き締まり、外面に降着した灰が釉化している。229は焼成の堅緻なIII群土器で、灰白色を呈する。231・233は群外の土器で、胎土に黒色粒子を多く含む。231の底部外面にはロクロ削りを施し、333は灯火器として使用する。222は内面を硯に使用している。217・228は平城宮土器II、219・224は平城宮土器Vに属すると思われる。

**杯B蓋** (201～216) 201・202は杯 BI、203・204は杯 BII、205～209は杯 BIII、215・216は杯 BIV、210～214は杯 BV に対応する。なお、210は壺の蓋の可能性もある。

杯B蓋はI群土器の比率が杯A・Bに比べて低く、図示したものでは201～203・208・211・212がI群土器である。203は頂部外面をロクロ削りし、211の外面には降灰が見られる。208のつまみ部には沈線状の圧痕があり、212は灯火器として使用している。207はII群土器で、頂部外面をロクロ削りする。204・216はV群土器で、愛知県猿投窯の製品である。204は同一個体と思われる2片から図上復原した。頂部外面をロクロ削りする。216は外面に自然釉が降着する。その他は群外の土器で、205・215は頂部外面をロクロ削りする。209は胎土に黒色粒子を多く含む、内面全体に煤状の付着物が見られ、灯火器として使用したものか。214は内面を転用硯として使用する。206・211の外面には緑色の自然釉が厚く降着している。201・215は平城宮土器II、208・212は平城宮土器III、203は平城宮土器IV、207は平城宮土器Vに属するものであろう。

杯 C(249・250) 土師器杯Aを模した形態で、口縁端部が肥厚する。250はI群土器で、底部はヘラ切り不調整。249は金雲母を含み、淡褐色を呈する胎土の群外の土器で、底部をロクロ削りする。

杯 E(251~253) 杯Aに似た形態だが、口縁端部が内傾する面を持つ。金属器の模倣形態である。杯 EI(252・253)・EII(251)がある。251はI群土器で底部はヘラ切り不調整。252・253はII群土器で、底部外面と体部下半をロクロ削りする。252は外面を丁寧に磨く。

金属器模倣

杯 L(254) 佐波理稜碗を模した器形で、口縁部が外反しながら開き、体部に稜を持つ。I群土器で、口縁部内面に浅い凹線を入れ、端部が肥厚した様な形態を表す。焼成は堅緻で、外面全体に降灰が見られる。

皿 A(261) II群土器の皿 AII で、底部外面をロクロ削りする。他に皿 AI も出土している。

皿 B(257~260・266) 皿 BI(257~260)・BII(266)がある。258・259はI群土器で、外面に降灰が見られる。257は群外の土器で、体部外面下半と底部をロクロ削りし、体部内外面と底部内面を磨く。底部外面を硯として使用している。260は口縁部が彎曲しながら開く土師器皿Bの器形を模したもので、極めて珍しい器形である。灰白色を呈する群外の土器で、全面をロクロナデで調整する。京都市東寺から同様の器形の奈良三彩が出土<sup>3)</sup>しているが、260は胎土から見て奈良三彩の素地というわけではない。266はV群土器で、底部外面をロクロ削りする。

土師器形の皿 B

皿 C(262~264) 口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦に面取りをする。皿 CI(263・264)・CII(262・264)がある。図示したものは全てI群土器で、262は灯火器、263は内面を硯として使用している。

皿 D(267) 皿Cに高台を付したものの。I群土器で、口縁部外面に降灰が見られる。

皿 E(255・256) 小型の皿で、口縁端部は外反する。灯火器として使用することが多い。ともにI群土器で、内面に煤が付着する。

皿 X(265) 土師器皿Aの器形を模したもので、類例は少ない。胎土に金雲母を含む群外の土器で、底部外面はヘラ切り不調整。

鉢 A(Pl. 28・268・269) 口縁部が内弯し、丸底に近い底部を持つ鉄鉢形の器形。完形に復せるものはない。ともにII群土器で、外面にロクロ削りを施し、上半部にヘラ磨きを施す。

鉢 D(272) 平底で肩部が膨らむ胴部に、外反する短い口縁部を付す器形。胴部外面をロクロ削りする。

鉢 F(270) 口縁部が直線的に外反して開く器形で、円盤状の底部を持つ。口縁部を欠失する。焼成の堅緻なI群土器で、内面に降灰が見られる。底部外面には植物繊維の圧痕がある。底部には、外面から内面に向かって焼成後に一孔を穿つ。

底部の圧痕

盤(271) 大きな平底に直線的に外反する口縁部を付したものの。口縁端部はやや肥厚し、上端に面を持つ。群外の土器で、底部から体部下半にかけてロクロ削りする。

高杯(273) 脚部から杯部の一部にかけての破片で、脚部中ほどに2条の沈線を入れ、透しはない。I群土器で、杯部、脚部とも外面にロクロ削りを施し、その後にナデ調整を加える。

壺 A(276~280) 肩が胴の上部で強く屈曲し、口縁部は内傾して立ち上がる。276・278はI群土器で、278の肩部には自然釉が降着し、ともに蓋をかぶせて焼成した痕跡がある。279はV群土器で、猿投窯の製品。内外面ともに自然釉が厚く降着する。277は口縁部の立ち上がりが高く、



肩部もやや稜を持って屈曲する器形で、一般の壺Aとは異なる。体部にはロクロ削りを施し、外面の一部に自然釉が降着する。280は底部を欠失し、全形は不明であるが、口縁部、体部の形態から壺Aに含めた。肩部の屈曲がやや強く、体部にはロクロ削りを加える。2条単位の沈線を肩部の1ヶ所、胴部の2ヶ所に施す。灰褐色の緻密な胎土で、硬質に焼き締まり、一部に降灰が見られる。富山県小杉流通団地内遺跡群2号窯<sup>4)</sup>、新潟県山崎窯<sup>5)</sup>などに類例があり、北陸地方の製品であろう。

**壺 A 蓋**(274・275) とともにI群土器で、外面に降灰が見られる。端部は、275は下方に鋭く突出するが、274は殆ど突出しない。275は内面を硯として使用する。

**壺蓋**(281・Pl. 29-294) 280は口縁部から頂部の一部の破片で、口縁部の立ち上がりが高い器形。口縁部外面に軽いロクロ削りを施し、頂部にはロクロ削りにより段を表出する。宝珠形のつまみを持つものであろう。灰褐色の胎土で、黒色粒子を含み、頂部には降灰がある。岐阜県老洞2号窯に類例<sup>6)</sup>がある。294は円筒形の器形で、頂部と体部の境には鋭い稜を持ち、端部は平坦な面をなす。胎土は緻密、焼成が堅緻なI群土器で、外面に自然釉が降着する。双耳瓶の蓋であらう。

**壺 D**(282・283) 偏平な体部に直線的に立ち上がる短い口縁部を付した器形。283は口縁端部を欠失する。ともにI群土器。

**壺 E**(284) 短い口縁部で、肩に稜をもつ器形。体部下端をロクロ削りし、その後全面にロクロナデを施す。I群土器で、肩部と底部内面に降灰がある。

壺Gの産地 **壺 G**(286~290) 口縁部の長い徳利形の器形で、静岡県内の窯<sup>7)</sup>で焼かれたことが最近判明した。奈良時代後半から出現し、長岡京期の遺跡で多く出土する。286は口縁部を欠くが、体部は完形。丸みのある肩部を持ち、口縁部と体部との接合は一段構成。底部に回転糸切り痕を残す。黒色粒子を多く含む灰白色の胎土で、外面に自然釉が降着する。底部に容量を記したと思われる墨書がある。287・288は口縁部の破片。287は内面に顕著なロクロ目を残し、降灰が見られ、灰黒色に堅く焼き締まる。288は灰褐色の胎土で、一部に降灰がある。289・290は体部の破片。289は肩部ににぶい稜を持ち、底部に回転糸切り痕を残す。肩部には降灰が見られ、胎土、焼成から287と同一個体の可能性がある。290の底部はやや上げ底気味で、不調整であるが、糸切り痕はない。黒色粒子を含む灰褐色のやや粗大な胎土であるが、堅く焼き締まる。

**壺 H**(285) 外反する口縁部で、肩部に稜を持つ器形の小型の壺。口縁端部の全周を意識的に打ち割っている。I群土器で、肩部の一部に降灰がある。

**壺 Q**(293) 肩部が稜を持って屈曲し、外反する口縁部を付す器形。口縁端部を欠失する。I群土器で、肩部に降灰が見られる。体部下半をロクロ削りする。

**水瓶**(291) 卵形の体部に細く長い口縁部を付す器形で、金属器をまねたもの。口縁部から肩部の一部にかけての破片。I群土器で、外面に降灰が見られ、口縁部と体部の接合は二段構成と思われる。

**壺 K**(292・Pl. 29-304~307) 肩に稜を持つ長頸の壺。I群、II群土器以外のものが多く、完形に復せるものはない。292は壺Kに含めたが、肩部以下の外反が弱く、他の壺Kとは趣を異にする。

糸切り痕 胴部下半をロクロ削りし、底部には回転糸切り痕を残す。305は口縁部の破片で、内面に顕著なロクロ目を残す。灰褐色の胎土で黒色粒子を含み、それが焼成によって火ぶくれとなる。304は



口縁部を欠くが、体部は完形。黒色粒子を含む灰褐色の粗放な胎土で、焼成もやや軟質。肩部と体部の境には1条の沈線を入れ、肩部上面に焼成前に施した「×」のヘラ書きがある。306は内面や断面に漆が付着しており、漆液の運搬具として使用したもの。肩部は稜を持って屈曲し、高台端部は鋭く外方に突出する。体部下半にはロクロ削りを施すが、部分的に叩きの痕跡が残る。少量の黒色粒子を含む胎土で、堅く焼き締まり、外面の一部に降灰が見られる。307は肩部から体部下半の破片で、やや焼けひずみが見られる。少量の黒色粒子を含む胎土で、暗褐色に堅く焼き締まり、底部内面と肩部に降灰が見られる。底部外面には砂が融着する。

**壺 L** (295~299) 球形に近い体部に細い口頸部を付す器形。壺K同様、群外の土器が多い。297は口頸部の破片。口縁部に降灰が見られる。295・296は口縁の一部を欠く他は完形。395は肩部の張りが著しく、偏平な高台を付す。胴部下半はロクロ削りで調整する。胎土には大量の黒色粒子を含み、色調は基本的に灰褐色を呈するが、原料の粘土の質が場所によって異なるため、水平方向に黒灰色の帯状の部分が見られる。非常に堅く焼き締まり、全面に自然釉が降着する。猿投窯の製品か。296は灰褐色の胎土で焼成は堅緻、全面に降灰が見られる。298・299は口頸部を欠くが、胴部は完形。298は暗灰色の胎土で堅く焼き締まり、肩部に降灰が見られる。随所に火ぶくれがある。299は胴部下半をロクロ削りする。胎土は青灰色で黒色粒子を含み、それが墨を流した様ににじむ。胴部上半のナデ調整の部分と下半の削りを施した部分では黒色粒子の流れが逆方向で、まず上半部にナデを施してから倒立させて下半部を削り、高台を取り付けたものであることがわかる。

調整方向  
の逆転

**壺 M** (300~303) 壺Lを小型にした器形。いずれも口縁部を欠くが、胴部は完形。300・301はI群土器で、302・303は群外の土器である。304は黒灰色の胎土で、肩部に降灰が見られる。303は肩部に1個の穿孔がある。これは外側から中へ向けてあけたもので、外面の孔の両端には粘土を貼り付けている。内面には灰白色の付着物が残る。

肩部穿孔の  
壺 M

**四耳壺** (308) 肩部が稜を持って屈曲し、短い口縁部を付す。肩部の4ヶ所に穿孔のある耳を付けるが、これは2個のみ残存する。体部はロクロナデを施すが、一部に叩き目が残る。肩部には自然釉が降着し、蓋と共に焼成した痕跡がある。

**壺 X** (309・310) その他にも、多種多様な壺が出土した。ここでは、底部2個体を報告する。310は灰褐色の緻密な胎土で、焼成は堅緻。内面にはロクロナデを施すが、粘土紐の輪積みの痕跡が残る。胴部外面はロクロ調整を行った後、下から上へ削り上げる。底部外面は不調整で、底に敷いていた柏と思われる葉の圧痕がある。この柏の葉を敷くという手法は、愛知県猿投山古窯址群の鳴海32号窯出土の甕<sup>8)</sup>に見られ、310も胎土、焼成から見て、猿投窯の製品である可能性は高い。309は暗赤褐色の胎土で、外面の一部に降灰が見られる。内外面ともにロクロナデで調整するが、底部外周を中心に外面に格子目叩きがあり、内面に当て具痕を残す。

柏の葉の  
底部圧痕

**平瓶** (312~319) 偏平な胴部の端に直立する口頸部を付す器形。他の器形に比べ、完形に近い形で出土したものが多い。大きさは、胴径約20 cm、17 cm、12 cmの3種に分かれる。316を除き、上面に降灰が見られる。315・318は小型のもので、把手、高台ともに付かない。底部は315はヘラ切り不調整、318は胴部下半を含めてロクロ削りする。312・313・316は中型品で全て把手を持つが、把手は欠失する。313は高台を持たないが、高台が付く312・316とともに、胴部下半と底部をロクロ削りする。313は内面に茶褐色の付着物が見られる。314・317・319は大型のもの

で、全て把手が付き、317のみ高台を持たない。314は底部はヘラ切り不調整で、胴部にはロクロナデを施す。319は胴部外面、底部をロクロ削りで調整する。314・319ともに胎土は少量の黒色粒子を含み、降灰は釉化している。317は口頸部を欠く他は完形。底部は不調整であるがヘラ切り痕は認められず、部分的に藁状の植物繊維の圧痕がある。胴部外面にはロクロ削りを施す。**横瓶**(311・Pl. 30-320) 俵型の胴部に直立する短い口縁部を付す器形。311は口縁部から胴部の一部に欠けての破片。外面の叩き目はほとんどナデ消している。内面は当て具痕が残り、漆が付着する。320は口縁部と胴部の破片で、胴部両端を欠く。

**甕の器種** **甕**(Pl. 30・31-321~346) 大量に出土したが、完形に復せるものは少ない。形態、産地に多くの種がある。321・323~326・331は甕A、322・327~330は甕B、332は甕Cにあたる。外面に格子目や平行叩き目、内面に当て具痕を持つものが多いが、325・334・335は内面の当て具痕をほとんどナデ消している。

321は黒色粒子を含む胎土で、硬質に堅く焼き締まる。322・325・327はやや粗放な胎土で、焼き締りも悪い。325の表面は薄く剝離している。323の胴部外面には擦痕があり、325・334の内面には黒色の付着物が見られる。332は甕Cの口縁部で、復原口径が120 cm にもなる大型品である。甕A・Bの底部は343~346の様な丸底で、底部が小さな平坦面になる。343・344・346には焼台とした須恵器片が融着する。324・329・330・345は陶邑窯の製品と思われる。333は灰白色の胎土で器壁が薄く、硬質に堅く焼き締り、外面には緑色の自然釉が降着する。VI群土器で、美濃の製品であろう。337~342はV群土器で、猿投窯の製品。337~337は口縁部、340は口縁部から胴部上半、341・342は底部の破片。胎土に黒色粒子を含むものがあり、口縁部から胴部にかけてと底部内面には降灰が見られる。337・338は外面に酸化鉄を塗布しており、337はそれが黒色の鉄釉の様な観を呈する。341は灰褐色を呈し、それほど焼き締まらない。底部外周にロクロを用いないヘラ削りを加え、底部に成形の際に敷いたワラの痕跡が残る。

## B 道路側溝出土土器(Fig. 19, Ph. 36)

### i 東一坊大路東側溝 SD6411出土土器(88)

東側溝 SD6411は長さおよそ5 m にわたって検出したのみで、出土した土器は多くはなく、図示できるものはほとんどない。出土土器には平城宮土器II~Vに属するものがあり、奈良時代全期にわたって東側溝は存続していたことが知られる。図示したものは土師器Ⅲ AI で、a0 手法で調整し、内面に放射暗文がある。平城宮土器Ⅲと思われる。

### ii 六条大路南側溝 SD6449出土土器(347)

六条大路は検出長が約8 m ときわめて短く、北側溝 SD6451、南側溝 SD6449から土器はほとんど出土していない。ここでは、南側溝 SD6449出土の須恵器杯 AIV(347)を報告する。これは灰白色を呈するI群土器で、焼成は不良。底部はヘラ切りの後、軽いナデ調整を加える。奈良時代前半のものであろう。先述したように、SD6449・6451出土土器はきわめて少量であり、時期判定の可能な資料も少ないが、断片的な資料から判断すると、両側溝ともに奈良時代のある時期に廃絶したとする積極的な証拠はない。

iii 七条条間北小路側溝 SD6471・6472出土土器

SD6471・6472はほぼ全長にあたる約124 m を完掘したため、多くの土器が出土した。しかし、完形に復せるもの、図示できるものは少ない。側溝の堆積はSD6471が上下2層、SD6472が3層に大きく分かれ、SD6471・SD6472ともに下層出土土器は平城宮土器Ⅱ・Ⅲ、SD6471の上層とSD6472の中・上層出土土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅴにほぼ属する。一部には掘り直しがあり、下層として取り上げた土器にも新しい土器が混在している。出土した土器には、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器があるが、土師器、須恵器が主体を占める。土師器は保存状態が不良で、手法等の観察が困難なものが多い。

a 南側溝 SD6471出土土器 (89～94・348～359)

**土師器** 89～94とともに全て下層出土。89・90は杯 AI。89は a0 手法で調整し、内面に密な放射 平城宮土器  
Ⅲ・Ⅳ

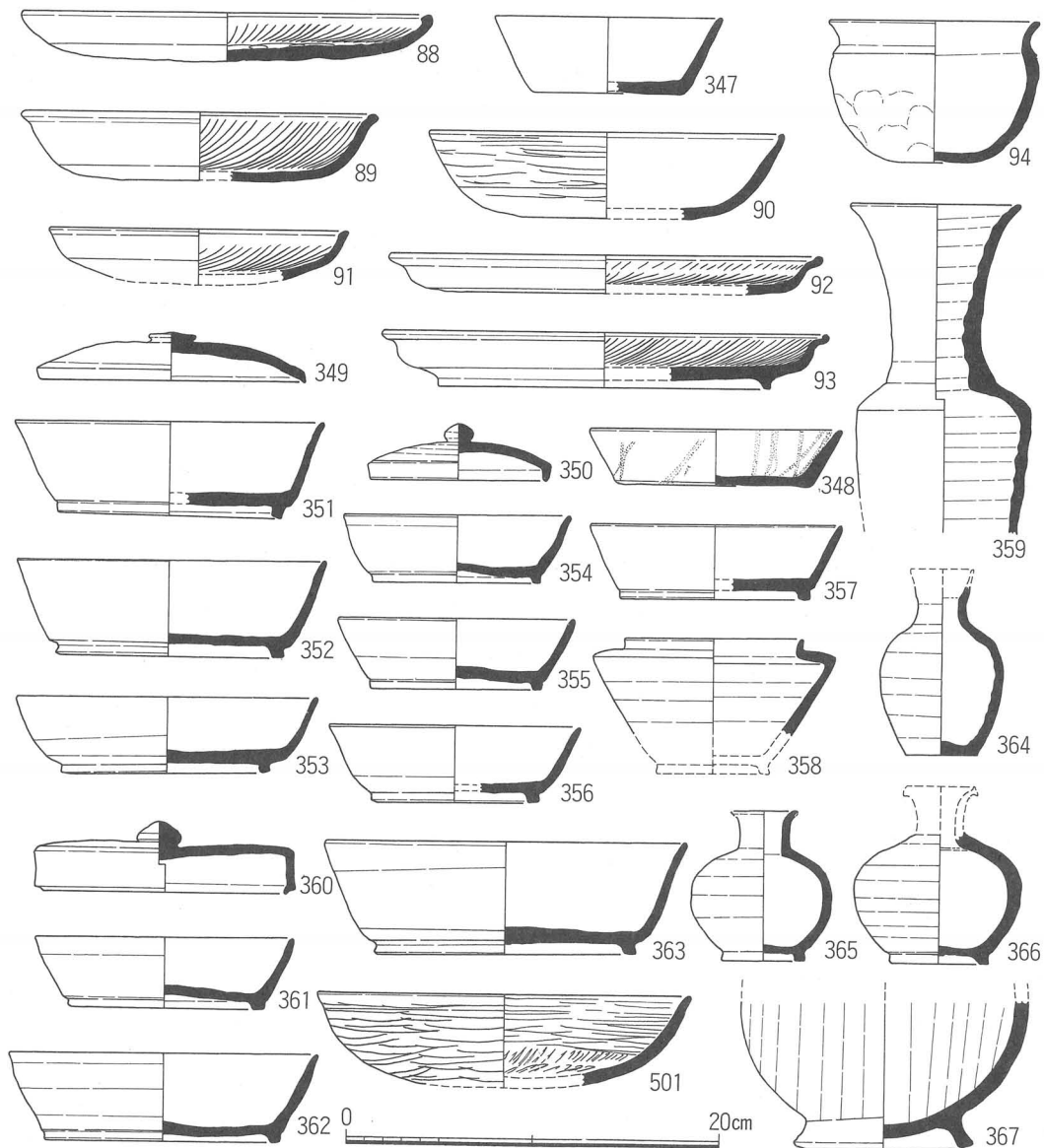


Fig. 19 SD6411・6449・6471・6472 出土土器 1 : 4

暗文がある。平城宮土器Ⅲ古段階か。90は b<sub>1</sub> 手法で調整する I 群土器で、平城宮土器Ⅳに属する。91は a<sub>0</sub> 手法で調整する杯 CII。底部は小さな平底になると思われる。内外面ともに風化しているが、内面に放射暗文があり、連弧暗文は認められない。平城宮土器Ⅲ。92は皿 AI、93は皿 BI。ともに b<sub>0</sub> 手法で調整し、口縁端部は強く外反する。93は風化が著しいが、ともに内面に放射暗文を持ち、平城宮土器Ⅲ新段階のものと思われる。94は壺 B。内外面に粘土紐の継目が残る。風化しているが、人面は描いていない。

**須恵器** 349～353・356・359は下層、348・357は上層出土。348は I 群土器の杯 AII。底部はヘラ切り不調整で、内外面に火轡がある。348は杯 AIII で、底部をロクロ削りする。351～353は杯 BII、357は杯 BIII、354～356は杯 BIV。352が II 群、354・356が群外の他は I 群土器。351～353・356は平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、354・355は平城宮土器Ⅴのものであろう。354の胎土には黒色粒子が

朱 硯 目立ち、口縁部外面には降灰が見られる。底部外面を朱の硯として使用している。349は平城宮土器Ⅱの杯 BIII 蓋、350は杯 BV 蓋。349は II 群土器、350は群外の土器で、ともに頂部外面をロクロ削りする。349は漆のパレットとして使用したもので、内面に漆が付着しており、漆刷毛の痕跡も見られる。358は壺 E。I 群土器で、底部を欠失する。359は壺 G。底部を欠くが、それ以外はほぼ完形で出土した。内面にロクロ目が顕著に残る。口縁部の焼成は堅緻で、降灰が見られる。

#### b 北側溝 SD6472出土土器(360～367・501)

北側溝 SD6472は南側溝 SD6471に比べて土器の出土量が少なく、特に土師器は小片で、風化黒色土器も著しい。そのため、ここでは須恵器(360～367)と黒色土器(501)を図示する。

360・361・501は下層、362は中層、364～367は上層出土。363は杯 BI、362は杯 BII、361は杯 BIV。361は群外の土器で、胎土に黒色粒子を含み、外面に降灰が見られる。362・363は I 群土器で、363は底部外面をロクロ削りする。363は平城宮土器Ⅲ、361・362は平城宮土器Ⅳ～Ⅴであらう。360は I 群土器の壺 A 蓋で、頂部外面をロクロ削りし、自然釉が降着する。364～366は壺 M。ともに胴部は完形で、364・365は口縁部、366は口頸部を欠失する。365・366は胴部下半をロクロ削りし、降灰が見られる。365は長胴の器形で、平安時代まで降るものであろう。底部には糸切り痕が残り、焼成後の「×」形の線刻がある。367は壺 X。高台を持つ胴部下半の破片で、全形は不明。底部内面の小範囲に降灰が見られるので、細い頸部を付していたものと思われる。胎土は灰白色で黒色粒子を含み、焼成は堅緻で外面に降灰が見られ、それが釉化している。胴部のロクロ目は垂直方向に走っており、提瓶の様に成形した後、高台を付していることがわかる(Ph. 36)。静岡県の浜名湖周辺の窯<sup>9)</sup>の製品と考えられ、平城京での出土は、極めて珍しい例である。501は内面のみが黒い黒色土器 A 類の杯。e<sub>3</sub> 手法で調整し、内面にも密な磨きを施す。9 世紀前半のもの。SD6472出土土器は、下層が平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、中・上層が平城宮土器Ⅳ～Ⅴ・Ⅶにほぼ対応する。下層から型式的に新しい土器が出土している場合もあるが、部分的な掘り直し、土坑が重複していたものであろう。また、平安時代初頭の土器も出土していることから、その時期まで凹みとして残っていたものと思われる。

その他、東一坊坊間東小路 SF6535の両側溝 SD6534・6536も約10 m にわたって検出したが、土器は殆ど出土していない。

## C 井戸出土土器 (Pl. 32・33, Ph. 37～40)

## i SE6653出土土器 (Pl. 32—95～103・368～373)

十六坪西北部にある井戸で、井戸枠は全て抜き取られている。主に抜き取りから大量の土器が出土した。95・96・101・368・369が掘形出土、それ以外が抜き取り出土のものである。これらの土器は平城宮土器IIに属する。

**土師器** 杯A、皿A、皿C、高杯、壺A、甕A、甕Cがある。

95～98は杯AI。97はa<sub>1</sub>手法、98はb<sub>1</sub>手法で調整する。95・96は風化のため調整は不明。内面には連弧暗文を持つものが多いが、96は風化のため暗文の有無は不明。99はa<sub>0</sub>手法で調整する皿C。100は壺Aで、両肩に把手が付く。胴部外面は横方向に密な磨きを施し、口縁部外面に放射暗文を持つ。胴部内面には細かいハケ目がある。把手の先端を欠失するだけで、ほぼ完形で出土した。101・102は甕A。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。外面に煤が付着する。103は甕C。長胴の器形で、口縁部は外反しながら開く。胴部外面に縦方向のハケ目を施し、口縁部外面にもナデ調整の下にハケ目が残る。内面はナデで調整するが、胴部には凹凸がある。

**須恵器** 杯A、杯B、杯B蓋、鉢A、壺、平瓶、甕がある。

368・369は杯BIII。ともにI群土器。370は鉢A。胴部下半を欠失する。内外面をロクロナデする。371は胴部下半から底部にかけての破片で、壺と思われるが全形は不明。胴部外面はロクロ削りを施した後にロクロナデを加え、内面はロクロナデで調整する。内面に白色物が帯状に付着する。372は平瓶で、胴部下半をロクロ削りする。口縁部の一部と把手を欠失する。373は甕C。口縁部から肩部にかけての破片で、外面の叩き目はほとんどナデ消している。口縁部外面に降灰が見られる。

平城宮土器  
II

壺 A

白 色 物  
付 着 土 器

## ii SE6432出土土器 (104～109・374・375)

十六坪東辺の中央やや北にある井戸。縦板組の方形の井戸枠が残る。土器は主に井戸枠内から出土したが、掘形からも少量出土した。105・107・374が掘形、それ以外が枠内のものである。これらの土器は平城宮土器II～IIIに属する。

**土師器** 杯A、皿A、碗C、碗X、甕Aが出土した。

107・108は杯A。107はb<sub>0</sub>手法、108はb<sub>1</sub>手法で調整し、108は放射暗文を持つ。104は皿A。a<sub>0</sub>手法で調整し、内面には放射暗文がある。106は碗C。a<sub>0</sub>手法で調整し、灯火器として使用している。105は碗Xで、碗Cを小型にした器形。109は甕A。胴部外面に縦方向、口縁部内面には横方向のハケ目を施す。胴部内面下半にはヘラ削りがある。

**須恵器** 杯A、杯B蓋、皿B蓋、横瓶、甕が出土した。

374は皿B蓋。つまみ部を欠失する。外面にロクロ削りを施し、内面に重ね焼きの痕跡がある。375は横瓶。口縁先端を欠失する以外は、ほぼ完形。内外面にロクロナデを施すが、外面の一部に不定方向のハケ目が残る。外面の一端には焼き台とした杯の痕跡があり、全面に自然釉が降着する。

平城宮土器  
II ・ III

横 瓶

iii SE6657出土土器(Pl. 33—110～133・376～386・502)

井戸 SE6653のやや東北にある井戸。曲物、木櫃の転用品と縦板を方形に組み合わせた井戸枠が残存する。枠内、掘形ともに多量の土器が出土した。110・111・376～378が掘形、それ以外が枠内から出土した。これらの土器は平城宮土器IV・Vに属する。

平城宮土器  
IV・V

**土師器** 杯A、杯B、杯C、皿A、皿B、皿C、椀A、壺A蓋、壺B、甕Aがある。

墨書土器

112・113は杯 AI、114は杯 AII。112は a<sub>0</sub> 手法、113は b<sub>3</sub> 手法、114は b<sub>0</sub> 手法で調整する。いずれも内面に暗文は持たない。112の底部外面には「×」を針書きする。120は杯 BII。内外面ともに風化のため、調整は不明。110・115～118は杯 CI。深い器形と浅い器形のものがある。115は b<sub>0</sub> 手法で調整し、他は a<sub>0</sub> 手法で調整する。115は「言」、116は「大」を底部外面に墨書する。116・117は灯火器として使用する。121～124は皿 AI。121・122・124は a<sub>0</sub> 手法、123は b<sub>0</sub> 手法で調整する。124の底部外面には墨書があるが、判読できない。125は皿 BI。内外面ともに風化のため、調整は不明。130は皿 C。a<sub>0</sub> 手法で調整し、底部は小さな平底となる。126は椀 AI、127～129は椀 AII。126・129は c<sub>3</sub> 手法、127・128は e<sub>3</sub> 手法で調整する。119は壺 A 蓋で、外面を丁寧へラ磨きする。板状のつまみが付いていた痕跡がある。口縁部に煤が付着し、倒立させて灯火器として使用したのであろう。131は壺 B。外面は口縁部のみをヨコナデし、内面は全面にナデ調整を行なう。口径に比して高さが低い。口縁部内面には浅い沈線がある。111・132・133は甕 A。いずれも口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。111は内面に板状工具の痕跡がある。132の外面のハケ目は、口縁部付近が粗いものの、胴部はやや細かいものの2種の原体を使い分けている。内面には横方向のハケ目がかすかに残る。133の外面のハケ目は、ほとんどがナデ消されている。133の外面全体には煤が付着している。

2種類の  
ハケ目

**須恵器** 杯A、杯B、杯B蓋、皿C、鉢D、壺A蓋、壺K、平瓶、提瓶、甕がある。

376は杯 BIII1、383・384は杯 BIII2。383・384は底部外面をロクロ削りする。379～381は杯 B 蓋。完形に復せるものはない。379・381は口縁部が屈曲するA形態である。381は外面に降灰が見られる。385は皿 C。底部はへラ切り不調整で、外面に重ね焼きの痕跡がある。386は椀 A。焼成の堅緻な I 群土器で、外面の一部に降灰がある。382は壺 A 蓋。口縁端部は下方に鈍く突出する。外面には降灰が見られる。377・378は鉢 D。胴部下半を欠失する。胴部はロクロ削りし、その後肩部のみにロクロナデを加える。

製塩土器

502は製塩土器。逆円錐形の器形で、外面は不調整、内面にはナデ調整を加える。形態から見て、筑後地方のものか、底部に棒状の突起を持つ、東海地方のものであろう。

iv SE6561出土土器(134・135・387・388)

十六坪の南辺中央やや西にある井戸。ヒノキの大木をくり抜いた井戸枠が残る。出土した土器は、枠内、掘形ともに少量である。掘形の土器は平城宮土器V、枠内の土器は平城宮土器V・VIIであり、平安時代まで存続していた。

平城宮土器  
V・VII

388は掘形出土の須恵器皿 CI で、底部はへラ切り不調整。134・135・387は枠内出土。134は土師器椀 A で、e 手法で調整したものを削った c<sub>3</sub> 手法で調整する。135は土師器杯 B。c<sub>0</sub> 手法

で調整する。133・134ともに平城宮土器Ⅶに属する。387は須恵器皿C。焼成は堅緻で、底部はヘラ切り不調整。

## D 土坑出土土器 (Pl. 34, Ph. 40)

十六坪内では多くの土坑を検出し、多量の土器が出土した。それらには注目すべき資料を含むが、ここでは20個体以上の漆運搬具を出土した土坑 SK6423出土土器について述べる。漆 運 搬 具 SK6423は十六坪の東北隅にある南北に細長い土坑で、南北約5.1 m、東西約1.5 m、深さ約0.8 mを測る。堆積層は2層に分かれるが、出土土器は層を越えて接合し、一括して廃棄したものである。

**土師器** 杯A、杯C、皿A、鉢B、盤、甕が出土した。風化がかなり進み、食器では暗文の観察が困難なものが多い。

137・138は杯 AII、139は杯 AI。ともに a0 手法で調整し、内面に放射暗文を持つ。136は杯 CII。浅い器形で、底部は大きな平底になる。a0 手法で調整し、内面に放射暗文を施す。140は甕。風化が著しいが、口縁部外面に縦方向、内面に横方向のハケ目が残る。

**須恵器** 杯A、杯B、杯B蓋、杯L蓋、鉢A、壺K、甕がある。食器類は397がⅡ群土器、476が群外である以外は、全てⅠ群土器である。

391は杯 AII2、392は杯 AIII1。391は焼成が不良で風化も著しいため、細部の調整は不明な点が多いが、底部にロクロ削りを施すと思われる。392の底部はヘラ切り不調整。393は杯 BII、394～396は杯 BI。全て底部外面をロクロ削りし、394のみ削りが体部下半まで及ぶ。390は杯 BI 蓋。黒色粒子を多く含む群外の土器で、外面に降灰が見られ、重ね焼きの痕跡がある。焼けひずみ大きい。内面を硯として使用する。389は杯 L 蓋。環状のつまみを持つが、つまみはほとんど欠失する。肩部に2条の鋭い沈線を入れる。外面に降灰が見られ、内面を硯として使用する。397は鉢A。外面をロクロ削りし、内面には細かいハケ目状の痕跡がある。

398～409は壺K。398～408は内面、および断面に漆が付着し、漆の運搬具として用いたもの。壺 K 409は漆が付着していない。ほとんどの個体が口頸部の付け根や肩部と体部の境などで意識的に打ち割られており、398のみ完形に復原できる。これらは特記したものを除いて、形態、胎土の面で非常に類似した点が多い。口縁端部は大きくラップ状に開き、高台は断面三角形で下端が鋭く突出する。体部外面にはロクロ削りを施し、口頸部の中ほどに2条、肩部に1条の凹線を施すものが多い。胎土は黒色粒子を多く含み、灰褐色～青灰褐色を呈する。焼成は堅緻で、降灰が見られ、一部は釉化している。403は胎土に黒色粒子を含まず、やや粗い長石粒が目立つ。頸部の径は他に比べて太く、凹線はごく浅い。404の胎土も403と同様の特徴を持ち、同一個体の可能性がある。409は灰褐色の胎土で、少量の黒色粒子を含む。胴部下半をロクロ削りする。

SK6423出土土器は、土師器食器類の調整が a0 手法を主体とし、放射暗文の間隔が密で、かつ明確な連弧暗文が見られないこと、および須恵器杯Bの法量から、長屋王邸北の溝状土坑 SD5100出土土器に類似したもので、平城宮土器Ⅲ古段階の年代が与えられる。出土土器には、およそ20個体に及ぶ漆運搬具を含むことから、この時期に坪内で漆工を行っていた可能性が高く、漆工関係の遺物は SD6400からも出土している。しかし、その量は官営工房と考えられている右京八条一坊十三・十四坪<sup>10)</sup> やその周辺の西一坊坊間路西側溝 SD920<sup>11)</sup> に比べると少な

平城宮土器  
Ⅲ 古 段 階

く、大規模な工房であったとは考えにくい。運搬具として用いた須恵器壺Kが器形、胎土の面で画一的な様相を示すことから、ある特定の産地から漆を持ってきたと考えられ、そこには国家権力の直接的な介在は認め難い。また、漆運搬具の構成を見ると、須恵器壺Kに限られ、右京八条一坊十四坪のSK2001では須恵器壺L、壺Pを含むのに対し、一段階古い様相を示すものとして興味深い。

## E 埋納遺構・木棺墓出土土器 (Pl. 35・36, Ph. 41・42)

十六坪とその周囲の条坊遺構からは、祭祀土坑や多くの土器埋納遺構、および平安時代前半の木棺墓を検出し、当調査地の著しい特徴となっている。特に、条坊側溝内に掘った祭祀土坑や、側溝に近接した位置にある土器埋納遺構は平城京の調査では初めて発見したものであり、注目される。

### i SX6530出土土器 (141~143・410~413)

七条条間北小路南側溝 SD6472内に掘られた細長い土坑で、長さ約6.4 m、幅約1.2 m、深さは検出面から約0.5 mを測る。土師器の杯B、皿A、甕A、甕C、須恵器では杯A、杯E、壺Q、壺Xが出土した。土器は埋納された原位置を保ち、ほぼ完形で出土したものも多い。

**土師器** 141は杯Bで、a<sub>1</sub>手法で調整する。風化が著しいが、内面に密な放射暗文を施し、出土時には連弧暗文も確認できた。この土器は平城宮土器IIに属する。142は甕A。口縁部の約四分の三と底部を欠失する。球形の胴部の外面に不定方向のハケ目を施し、内面には細かい凹凸が残る。外面の2ヶ所に黒斑がある。143は長胴の器形となる甕C。底部と胴部の一部を欠くが、ほぼ完形。口縁部内外面にナデ調整を施し、内面にハケ目が一部残る。胴部外面上半には縦方向のハケ目、底部付近は横方向のハケ目を施す。胴部内面はナデ調整を行なうが、凹凸が残る。外面に黒斑があるが、二次的な加熱の痕跡はない。胎土には長石、石英粒と少量のくさり礫を含む。この土器は墨書人面土器であり、出土時には墨痕を確認できたが、墨の残存状況が悪く、図示することはできない。

**須恵器** 411は杯AIII。やや離れた位置から出土した3点が接合した。I群土器で底部はヘラ切り不調整。底部外面に「元」の墨書がある。灯火器として使用する。410は杯E。I群土器で、口縁端部を鋭く面取りする。内外面にロクロナデを施す。412は壺Q。口縁部を欠く以外は完形。I群土器で体部下半にロクロ削りを施し、肩部に降灰が見られる。413は壺X。長胴になる器形で、体部外面はロクロ削りする。内面と断面に漆が付着し、漆の運搬具として用いたもの。灰褐色のやや粗放な胎土で、焼成もややあまい。

**土器の年代** 以上、SX6530出土土器の年代であるが、土師器杯B (140)の形態や甕C (142)と同様の土器がSE6653から出土していることなどから、奈良時代初頭、平城宮土器IIであると考えられる。ただし、須恵器杯A (411)の墨書銘「元」は、後述するSK6608、SB6510からも出土しており、SB6510出土土器の年代は奈良時代末の平城宮土器Vに置ける。この3点の「元」銘墨書土器が一連の関連を持っていたのであるならば、SX6530出土土器の年代も奈良時代末まで下がり、土師器杯Bは七条条間北小路南側溝SD6472に既に堆積していた土器が混入したものと見ることもできる。しかし、土器群全体の構成を見ると、やはり平城宮土器IIであるとするのが妥当であろう。



## ii SX6448・6485・6460・6461・6533出土土器(144～152)

条坊遺構に接して設けられた土器埋納遺構を5基検出した。SX6448・6485・6460・6461は2個の甕を合わせ口にし、SX6533は1個の甕を単独で埋納したもので、いずれも主軸は南北方向にとる。図では、合わせ口のものは北側の土器を左、南側の土器を右に並べてある。埋納された土器は151を除いて長胴の甕Cで、いずれも斉一性が強く、口縁部は強く外反し、端部はやや肥厚する。胴部外面に縦方向のハケ目を施し、胴部内面、口縁部内外面にはナデ調整を加える。151のみが甕Aで、胴部内面にもハケ目が残る。これらの甕は風化が著しいが、二次的に火を受けた痕跡は認めにくい。

長胴の甕C

こうした、条坊側溝に接して甕を埋納した例は平城京では初めて検出した。脂肪酸分析の結果から見ても、小児を埋葬した甕棺墓であった可能性が高い。その分布を見ると、坪の北辺の六条大路上に1ヶ所、東辺の東一坊大路付近に3ヶ所、南西隅の坪境小路の交差点に1ヶ所で、特にある地点に集中しているわけではない。坪の北辺、西辺はほとんど調査していないので、そこにも埋納遺構が存在する可能性もある。また、どれにも同じ様な土器を使用していることを考え合わせると、これらの土器は、十六坪の居住者がそれほど時間を置かずに埋納した可能性が高い。この点に関しては、後に考察する。

甕 棺 墓

## iii SX6428出土土器(153・414・503)

坪内の東北部にある木棺墓から、3点の土器が出土した。153は土師器杯Bで、e手法で調整したものを削ったc0手法で調整する。保存が極めて不良で、口縁端部や高台をほとんど欠失し、表面の剝落も著しい。平面形は楕円形を呈し、焼け歪んだとも考えられるが、高台も同様に平面楕円形になることから、本来楕円形に作った可能性がある。414は須恵器平瓶。胴径約13cmの小型品で、口縁部の一部を欠く他は完形。把手と高台を持つ。胴部下半にロクロ削りを施し、上面に降灰が見られる。水滴として使用したものであろう。503は黒色土器A類の甕。内面に密な磨きを施す。外面は風化が著しいため調整は不明であるが、胴部にハケ目らしい痕跡が見られる。これらの土器は、9世紀前半のものである。

平 安 時 代

## F 柱穴出土土器(Fig. 20, Ph. 36)

坪内の建物の柱穴から、少量の土器が出土した。ここでは、年代のわかるものや、完形に復せるものを紹介する。

415～417はSB6601の柱抜取穴から出土した須恵器。415はI群土器の杯B蓋、416はI群土器の杯B、417は甕Aで、杯B蓋は縁部が屈曲するA形態、杯Bは高台が底部外周に接して付くもので、ともに平城宮土器Vであろう。419はSB6425の柱抜取穴出土の須恵器杯B蓋で、つまみ部を欠失する。頂部外面をロクロ削りする。縁部が屈曲しないB形態で、端部は鋭く下方に突出し、平城宮土器IIに属する。418・154・155はSB6510出土のもの。418は柱掘形出土の須恵器I群土器の杯Bで、平城宮土器Vに属し、底部外面に「元」の墨書がある。154は土師器皿AIIで、風化が著しいが、c0手法で調整すると思われ、平城宮土器Vのものであろう。155は土師器甕で、風化が著しく、調整は不明。外面に黒斑があり、内面に茶褐色の付着物が残る。156は

墨 書 土 器

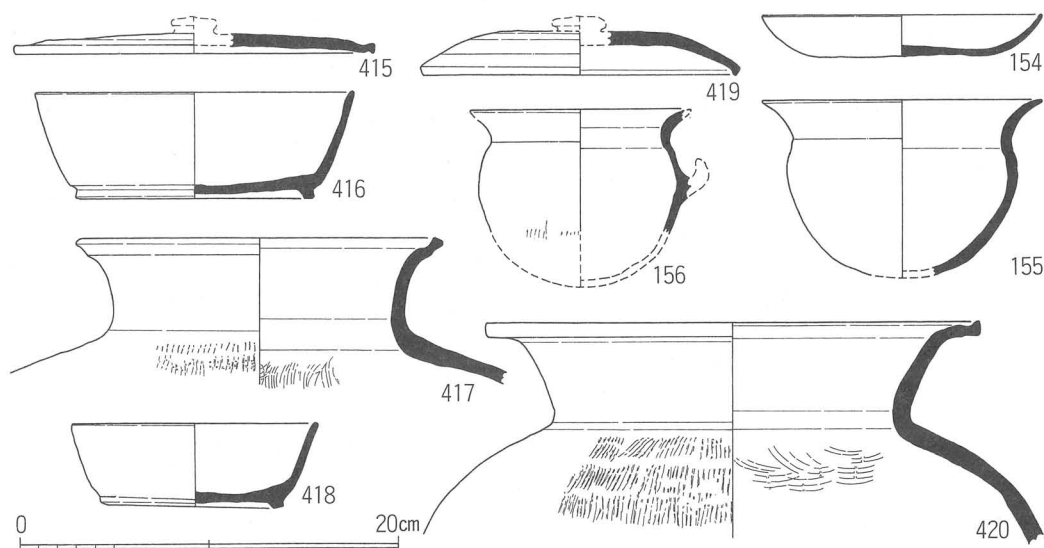


Fig. 20 柱穴出土土器 1 : 4

甕 B SB6663の柱抜取穴出土の土師器甕B。風化が著しいが、外面にハケ目がわずかに残る。把手が付くが、1個のみであろう。420はSB6651出土の須恵器甕A。胴部外面に平行叩き目、内面には当て具の痕跡が残る。灰白色に堅く焼け締まり、外面に降灰が見られる。156・420ともに所属時期は不詳であるが、SB6651からは土師器碗Aと思われる破片が出土しており、平城宮土器Ⅲ中段階以降である。

## G 平城京造営以前の土器・10世紀以降の土器

### i 平城京造営以前の土器 (Fig. 21, Ph. 43)

SD6400から縄文時代～古墳時代の土器が少量出土した。すべて二次的な堆積で風化も著しく、完形に復せるものはない。

縄文時代  
中 期 末

504～506は縄文土器で、中期末の北白川C式の深鉢形土器。胎土から見て、すべて別個体である。504～506は胴部の破片で、垂下沈線と蛇行沈線による文様を入れる。506は地文にLR縄文を持ち、505は沈線間にLRの充填縄文を施す。奈良盆地北部における該期の土器の出土は、左京三条四坊七坪と東紀寺遺跡に2例ある<sup>12)</sup>。

弥生土器

507～511は弥生土器で、507は口縁部、508～511は底部の破片。507は第Ⅲ様式の壺で、口縁端部は面をなし、そこに櫛描波状文を入れる。内面には同一工具による扇形の圧痕文を施す。508は大きな平底で、胴部は強く外反して立ち上がるもので、第Ⅰ様式の壺の可能性もある。509は底部外周をヘラ削りし、第Ⅲ様式の壺か。510は小さな平底で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ目を持ち、第Ⅰ様式の甕の底部であろう。511はごく小さな平底で、外面に叩きがあり、第Ⅴ様式の壺か甕と思われる。

古墳時代の  
土 器

その他、完形に復せなかったため図示はできなかったが、古墳時代の土器としては、布留式土器の高杯の脚部や、内面に炭化物を顕著に残し、脚台を持つ東海地方のS字状口縁甕の底部などが出土している。

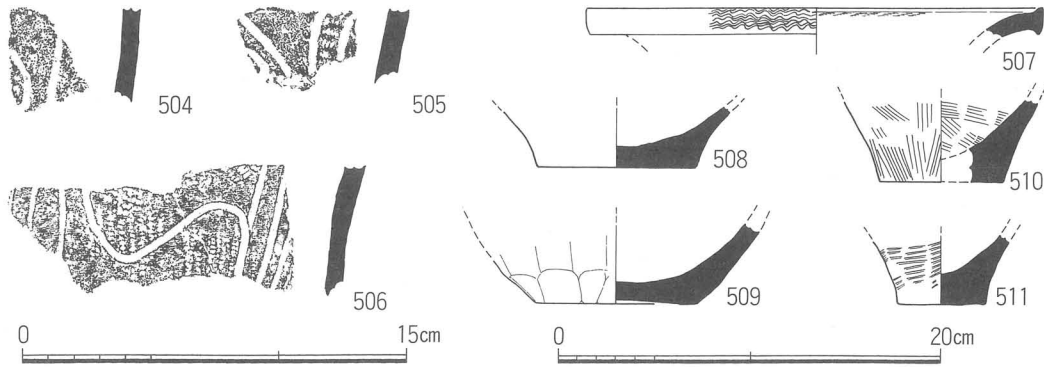


Fig. 21 縄文・弥生土器 504～506 1 : 3 507～511 1 : 4

## ii 平城京廃絶以降の土器 (Fig. 22, Ph. 43)

SD6400およびその後身のSD6414からは、平安時代の土器も少量出土している。これらは、SD6400の最終的な埋没年代を示すものとして注目される。

512～521は黒色土器A類。516～518は杯Aで、e手法を削ったと見られるc3手法で調整し、黒色土器内面には密な磨きを施す。516・517は内面に暗文を持つが、518は小破片のため、暗文の有無は不明。519は杯B。胴部が内弯しながらきつく立ち上がる、あまり例を見ない器形である。内面の口縁端部に、凹線状の強いナデを加える。c3手法で調整し、内面に密な磨きを施す。512～517は碗B。512・513はやや深い形態で、高台は細く、鋭く下方に突出する。514・515はやや浅い器形で、高台は断面三角形となる。全てe3手法で調整するが、514・515の磨きは512・513に比べて粗い。520は皿。底部は欠失するが、高台が付くものと思われる。e0手法で調整するが、部分的に削りを施している。内面は横方向に丁寧に磨き、6ヶ所に暗文風の縦方向の磨きを施す。外面は上半部も黒色化している。521は鉢A。雲母の目立つ胎土で、内外面ともに丁寧な磨きを施す。外面には、黒漆状の付着物が残る。これらの黒色土器は大きく3時期に分けられ、516～521は東三坊大路西側溝SD650A出土土器<sup>13)</sup>、512・513は西隆寺の井戸SE491出土土器<sup>14)</sup>、514・515は薬師寺西僧坊出土土器<sup>15)</sup>の直後に対応でき、それぞれ9世紀中葉、10世紀前半、10世紀後半の年代が与えられる。

522～524は瓦器。522・523は碗で、内外面に密な磨きを施し、外面の磨きは高台直上まで及瓦器んでいる。高台は断面三角形のしっかりとしたもので、鋭く下方に突出する。524は皿で、a1手法で調整する。内面は見込み部にのみ平行線状の暗文を施す。これらの瓦器は、11世紀後半のものであろう。

157～159は土師器。157は杯Aで、底部を欠失する。e0手法で調整し、SD650A出土土器に並土師器行するもの。158は皿で、完形で出土した。e0手法で調整し、口縁端部は小さく肥厚する。11世紀後半の年代が与えられる。159は羽釜。口縁部の破片で、口縁端部は外面に段を持って肥厚する。外面に煤が付着する。

421～423は須恵器。421は壺の胴部下半から底部にかけての破片で、胴部上半と口縁部は欠失須恵器する。外面にロクロ削りを施し、内面はロクロナデで調整する。底部外面は不調整で、外周部に植物繊維状の圧痕が残る。胎土は若干の石英粒を含む緻密なもので、赤褐色を呈する。これ

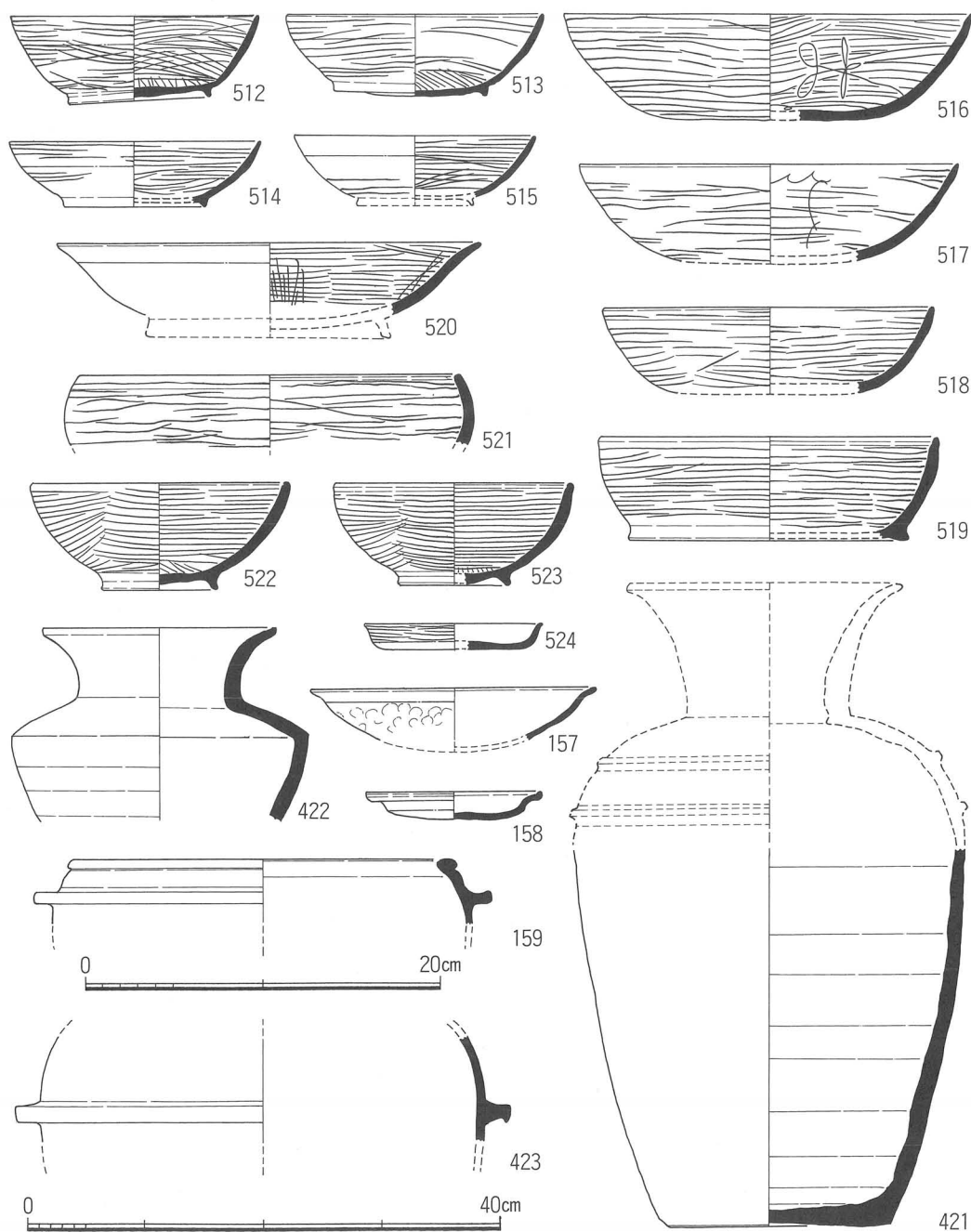


Fig. 22 平城京廃絶以降の土器 1 : 4 423のみ 1 : 6

播磨地方の  
製品

らの特徴から、薬師寺西僧坊で出土している様な、肩部に2条の突帯を持つ壺になると考えられ、兵庫県の西播磨地方、相生周辺の窯<sup>16)</sup>の製品である。10世紀後半のものであろう。422は壺で、口縁部から胴部上半の破片。口縁部はやや広口で曲線的に外反し、胴部は肩部で稜を持って屈曲する。胴部外面にはロクロ削りを施し、それ以外はロクロナデで調整する。胎土、焼成ともに421に類似し、西播磨地方の製品の可能性がある。423は胴部の破片で、全形は不明であるが、羽釜状のものになるか、あるいは421の様な肩部に突帯を持つ壺になるかと考えられる。直径40cm以上に復原できる大型品で、胎土は灰褐色を呈し、外面に降灰が見られる。

以上に図示したもの以外では、SD6414から12世紀に属する瓦器碗の小片が出土しており、そ

の上面の包含層として取り上げたものには、12世紀の越州窯の青磁碗を含んでいる。これらのことから、SD6414は11世紀前半にはほぼ埋没し、浅いくぼみとして残っていたが、それも12世紀代には埋まったものと考えられる。

## H 施釉陶器・特殊土製品 (Pl. 37, Fig. 23, Ph. 44)

### i 施 釉 陶 器 (Pl. 37—525～529)

525は奈良三彩の鉢A。底部を欠くが、全周の約三分の一が残存する。胴部下半をロクロ削り、それ以外はロクロナデで調整する。緑釉を鹿の子状にかけ、その上に褐釉を点状に配する。釉が銀化して黒色を呈する破片もある。これらは西側溝の QJ 区から RE 区にかけての約45 m の範囲にわたって散在し、また褐色粗砂、暗灰砂、暗灰粘土の複数の層位から出土しており、水流により流されていると考えられるが、それほど磨滅を受けた状況ではない。526は灰釉陶器の段皿。口縁部の破片で、内面に釉を薄く漬けがけする。猿投窯の製品で、黒笹90号窯期のものであろう。GJ49区遺物包含層出土。527・528は緑釉陶器。527は白色の胎土をした軟陶であるが、焼成は非常に堅緻である。底部外面には糸切り痕が残り、貼付け高台を持つ。釉は濃緑色で、底部内面に三叉トチンの痕跡がある。西側溝 QJ97区の最上層の出土。528は須恵質の胎土の硬陶である。高台は削り出して成形し、淡緑色の釉をかける。IG44区の遺物包含層出土。527・528ともに近江地方の製品で、527は10世紀後半、528は10世紀中頃のものであろう。529は青磁の壺。胴部上半の破片で、口縁端部は欠失する。肩部には半環状の耳を持つが、耳の上半は欠失する。耳は4ヶ所に付き、四耳壺となるものであろう。胎土は赤褐色で硬質に焼き上がり、濃緑色の釉を外面と口縁部内面に厚くかける。化粧土は施さず、素地の色が透けるため、釉調は褐色に近くなる。西側溝 IJ10区の暗灰砂層出土。

### ii 硯 (Pl. 37—530～537)

調査区の全域から29個体が出土した。そのうち、SD6400から出土したのは10個体ある。他は、SD6415から3個体、SD6472から1個体出土した以外は、ほとんどが坪内の遺物包含層から出土したものである。坪内での硯の分布を見ると、SB6575やSB6600周辺の坪の南西部のみに集中しており、ここに家政機関に類する施設が存在したことをうかがわせる。

坪内での  
分布

530は獣脚円面硯。獣脚は、硯部に貼り付けた後に削りで成形する。底面に降灰が見られ、硯面は使用により磨滅している。獣脚は1個のみの残存であるが、3単位に復原した。8世紀中頃のもので、HN14区の遺物包含層出土。531～533は圈足円面圈。531は脚部にヘラで刻みを入れ、透しとするが、内面までは貫通しない。同一個体の2片が、SD6415PM97区の暗灰粘土層とSD6472上層から出土した。532・533は脚部をほとんど欠失する。脚部の透しの数は、532は38個、533は21個に復原できる。532の陸部は海部から垂直に立ち上がり、外堤部と同じ高さに達する。外周には突帯を持たず、上部に1条、下部に2条の沈線を施す。外面と底面には濃緑色の自然釉が降着し、硯面は平滑に磨滅している。猿投窯の製品で、8世紀初頭のもの<sup>17)</sup>。GO40区の遺物包含層出土。533は海部が幅広で、陸部の立ち上がりも弱い。外周に1条の突帯を持ち、硯面は平滑に磨滅している。HD15区の遺物包含層出土。534は低圈足円面硯。硯面の周囲が突帯状

に立ち上がり、低い高台を持つ器形で、硯面の一部をくぼませて海部とする。硯面の中央部には布の圧痕が見られ、光沢を持つほどに磨滅する(Ph. 28)。少量の黒色粒子を含む灰白色の緻密な胎土で、底面には濃緑色の自然釉が降着する。猿投窯の製品で、8世紀後半のもの。HA37区宝珠硯の遺物包含層出土。535は宝珠硯。先端部の破片で、約三分の一が残存する。硯面の周囲に外堤部を立ち上げ、中央付近に突帯によって海部と陸部を区別する。外周部は削りにより丁寧に面取りをし、1ヶ所に割り込みが残る。割り込みは全体で4ヶ所にあったと推定され、底面には2個の脚がつくものと思われる。底面は粗い削りで調整し、先端部には稜を表出しており、重ね焼きをした痕跡がある。猿投窯の製品で、宝珠硯としては古い形態を示し、760年頃のものである。SD6609、SK6579、GS37区の遺物包含層から出土した3片が接合した。356は鳥形硯で、頸部から硯部の一部にかけてのみ残存する。頸部の断面形は偏平で、全面を削りにより調整する。内面下端には墨が付着する。微細な黒色粒子を含む胎土で2種類の陶土を用いており、それが縞状になる部分もある。焼成は堅緻で、降灰が見られる。猿投窯の製品と思われ、8世紀後半のものである。西側溝PR97区褐色粗砂層出土。537は形象硯の尾部の右半部で、鳥形硯か獣形硯であろう。側縁は垂直に近く立ち上がるが、末端部はゆるやかに立ち上がる。側縁には削りによる面取りを施す。残存している部分には脚の表現はない。硯面は使用により磨滅し、墨痕が見られる。砂粒をあまり含まない灰白色の精良な胎土で、堅く焼き締り、底面には降灰が見られる。十六坪の北面築地雨落溝SD6446出土。

### iii 特殊土製品(Fig. 23)

#### 灯火器の 専用品

538は須恵器の灯火器で、専用品として製作したもの。他に類例は京都府内里八丁遺跡<sup>18)</sup>で出土しているのみで、極めて珍しい器形である。胴部は垂直に立ち上がり、口縁部は幅広の面を持ち、内外両端が立ち上がる。底部外周は高台状に下方に突出する。口縁端部の外周に1条、胴部に2条の鋭い沈線を入れ、胴部外面を磨く。底部内外面と口縁部上端の面には螺旋暗文を施す。図では、上面の平面図で左側に口縁部、右側に底部内面の暗文を示してある。底部内面

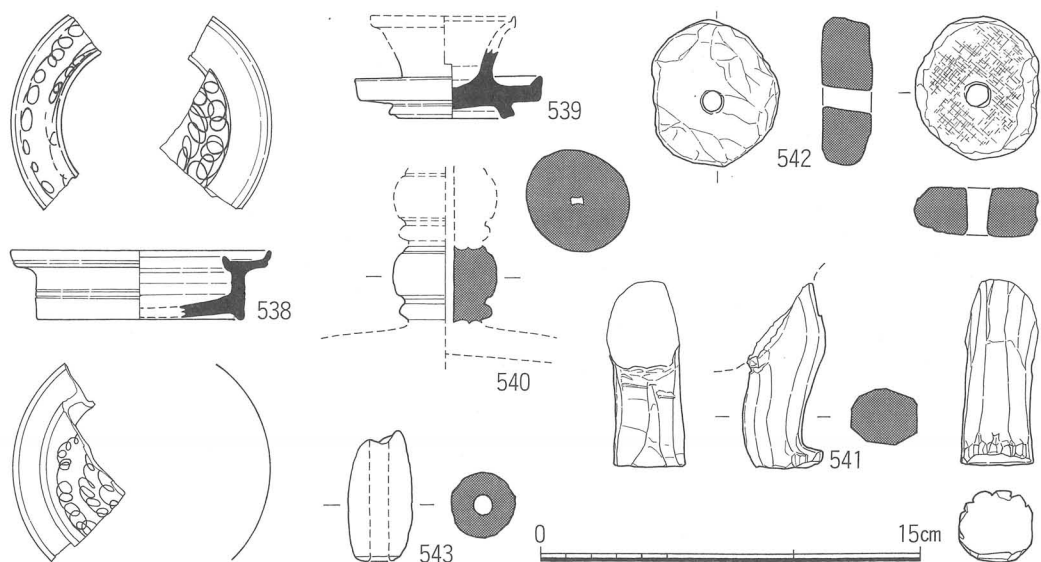


Fig. 23 特殊土製品 1 : 3

と口縁部には煤が付着する。西側溝 GM10区の暗灰砂層出土。539は須恵器托。口縁部を欠くが、他はほぼ完形。胎土は緻密で青灰色を呈し、底部に降灰が見られる。西側溝 GM10区の暗灰砂層出土。540は須恵器蓋のつまみ部。宝塔形になるものの第一段部だけ残存しており、中央部には小孔が上下に貫通している。灰白色の胎土で、焼成はやや不良。火舎の蓋になるものである。西側溝 IL10区の褐色粗砂層出土。541は須恵器の獣脚。やや長めのもので、全体を削りによって面取りし、削り込みによって4本の指を表現する。形状と器面との剝離角から見て、火舎の脚と考えられる。IF42区の遺物包含層出土。542は紡錘車。周縁は打ち欠いた後に粗く擦って整形し、中央部に穿孔を施す。平瓦を転用したもので、一面に布目がある。西側溝 QN97区の暗灰砂層出土。543は土錘。砲弾形の器形で、径約7mmの孔が貫通する。砂粒を多く含む胎土で土師質に焼き上がり、黒斑がある。西側溝 QO97区の褐色粗砂層出土。

火 舎

平瓦の転用

## I 祭祀用土器・土製品

西側溝 SD6400からは、墨書人面土器が427点、小型模造土器が233点、土馬が123点と、大量の祭祀用土器・土製品が出土し、その他七条条間北小路北側溝 SD6472や坪内の柱穴、包含層からも少量が出土している。平城京内でこれほど多くの祭祀関係の土器・土製品がまとまって出土したのは、右京八条一坊十一坪の西一坊坊間路西側溝<sup>19)</sup>、左京八条三坊九坪<sup>20)</sup>や左京六条三坊十四坪の東堀河<sup>21)</sup>などしかなく、京内における祭祀のありかたを示す重要な例であると言える。西側溝内でのこれらの出土状況は、西側溝出土土器の項でも述べた通り層位的なものではなく、混在した状況を示す。そのため、ここでも層位的に記述することはせず、類別ごとに記すこととしたい。また、西側溝内での平面的な分布では数ヶ所に集中する地点が認められるが、それについては後に考察する。なお、これらの祭祀用土器・土製品の分類は、基本的に西一坊坊間路西側溝の報告<sup>24)</sup>の分類に従うこととした。特記したもの以外は西側溝 SD6400出土のものであり、図示したものの出土地点、層位を別表3に記してある。

多量の祭祀  
関係遺物

### i 墨書人面土器(Pl. 38～41, Ph. 45～56)

人面を描くのに用いた土器は主として土師器壺B、壺Cであるが、土師器甕を用いた例もある。SD6400から419点出土し、それ以外の出土が8点ある。完形品に復せるものは少ないが、判明した限りでは、顔は2面に描くもののみで、4面に描く例はない。2面に描いたものは、両面の顔ともに同じ表情を示す。また、人面の他に墨線を組み合わせた文様を描くものもある。この様に、土器の形態、顔の表情などには様々な類型があるため、ここでは、破片についても墨書があるものは可能な限り写真図版に収録することとした。掲載にあたっては、実測図は類別ごと、写真図版で破片の集合のものは基本的に層位を優先させて配列した。また、図では黒斑上に描いた墨線や墨痕の不鮮明な部分については薄墨で表現してある。

器 種

類別の際は、全形を知ることのできるものは少ないので、主として口縁部の形態と頸部の屈曲の度合、および法量を基準とした。以下の類別は、A類～H類が壺B、I類が壺C、J類が甕である。壺B、壺Cの調整は口縁部と頸部をヨコナデし、胴部は不調整で、粘土紐の接合痕が残るものが多い。底部には、成形の際の台の痕跡を残すものもある。内面には粗いナデ調整を加えるが、ハケ目や整形の際のコテの痕跡が残るものも見られる。色調は、ほとんどのもの

分類の基準

が淡褐色を呈する。以下、類別ごとに主なものの記述を行なうこととする。

**A 類** (601～606・635・636) 大型で、頸部で強く屈曲し、外反する口縁部を持つ。口縁端部は小さく肥厚する。器壁は比較的薄いものが多い。

把 手 601はほぼ完形に復せるもので、2面に人面を描く。どちらも同じ表情を示し、山形の眉、2本の短線で瞳を表す目、鼻、耳と、歯の表現のある口、頬ヒゲ、顎ヒゲを描く。底部には成形の際の台の痕跡がある。602は顔の左半分の破片で、把手が1ヶ所に残る。頸部にはおそらく一周する墨線を入れ、半円形の眉、墨点で瞳を示し、1筆による目を描き、弧線で顔の輪郭や口を表現する。把手は顔の部分にはなく、耳に見立てたものか。口縁端部には強いナデを加え、外面が凹線状にややくぼむ。底部に成形の台の痕跡があり、内面には細かいハケ目が残る。603は円形の顔の輪郭の中に、目尻が下がり墨点で瞳を表した目と、鼻を描く。口の有無は不明であるが、眉、耳の表現はない。604は欠損部が多いが、数条の墨線で描く眉、墨点の瞳を持つ目、半円形の鼻、頬ヒゲが残る。他のA類に比べて器壁が厚く、暗褐色の色調を呈するやや特殊な土器を用いている。605は同一個体の2片から図上復原した。眉、瞳を墨点で表す目と、耳、頬ヒゲ、顎ヒゲの表現がある。606は完形で出土した唯一のもので、1面のみに描く。2筆で円形の顔の輪郭を描き、その中の中央やや右上に3本の短い横方向の墨線があり、これは左の眉と目を表現したものであろう。顔のその他の部分は描いておらず、省略したものか。底部に成形の台の痕跡があり、胴部内面には粗いハケ目を施す。底部内面には茶褐色の付着物が見られる。635・636は墨線により直線や弧状のモチーフを描いたもので、小破片のために全体の構成が不明であるが、顔の表現とは見られない。635は小さな把手を持つ。

完 形 品

**B 類** (607～614・637～644) A類に比べてやや小型で、頸部の屈曲も弱い。口縁端部にはナデによる凹みがある。

同 巧 の 土 器 607はほぼ完形に復せるもので、2面に人面を描く。眉はなく、目は2筆で輪郭を描くだけで、瞳の表現を欠く。鼻は長い縦線と短い横線を組み合わせて表し、口は2筆で目と同様な形で描いている。縦の墨線で、耳と頬ヒゲ、顎ヒゲを表現する。色調は赤褐色～灰白色を呈し、黒斑がある。608は607と同形、同表情のもので、出土地点、層位も同じである。破片であるが、607の例から見て、2面に顔を描くものであろう。Ph. 54-842も胎土や墨線の状況から見てこれらと同様のものであり、あるいは608と同一個体であるかも知れない。609は顔の右半分の破片で、弧線による眉、目と耳の表現がある。目は墨点による瞳を持つが、下のまぶたは描いていない。内面にはハケ目と工具痕が残る。610は口縁部を欠失するが、頸部の屈曲の度合からB類に含めた。水平に近い眉と2筆による目、瞳、鼻と口、口ヒゲ、頬ヒゲ、顎ヒゲを描く。耳の有無は不詳。底部に成形の台の痕跡がかすかに残る。611は小さな把手を鼻に見立て、その両側に太い墨線を2条ずつ入れる。眉と目を表現したものであろう。把手の下には3筆による口を描き、内部には墨線で歯を表す。612は2筆による円形の目と墨線の瞳を描くのみで、他の部分の表現はない。目と目の間には横方向のヘラによる沈線があり、鼻として意識したものか。613は黒斑があり、その上に描いているために、墨線が不鮮明な部分もある。鍵の手状に曲がる線で眉を表し、縦の長い墨線で鼻を描く。目は上まぶたを直線で引き、全体は丸い形となる。他に、耳かと思われる墨線が認められる。614は弧線で眉または上まぶたを表し、その下に墨点で目を表現する。鼻は、2本の墨線で描く。胴部内面にはハケ目がある。640は細い墨線で眉、目、鼻、

黒 斑



口を描き、瞳の表現はない。底部に製作の台の痕跡がある。637・639・641は眉と目の部分を描いた破片。637の目の内部には墨点と3本の墨線があり、瞳とまつ毛を表したもののか。639・641の内面には工具の末端の刺突痕がある。638は頸部に墨線を入れるもので、642は眉と鼻、643は眉と目を表現したものか。644の弧線は顔の輪郭であろうが、縦の墨線については不明。

**C 類**(615・616・646) 頸部の屈曲はやや強く、口縁端部は大きく肥厚する。

615は小さい把手を持ち、把手の周囲を丸く墨線で囲み、その脇に墨点で瞳を表現する目を描く。口縁端部は肥厚するが、肥厚の著しくない部分もある。胴部外面にはヘラによる数条の縦線を焼成前に入れており、口縁部は数ヶ所に圧痕があり、歪みが著しい。胴部内面は一部に細かいハケ目がある。同一個体の破片が3片あり、うち2片は接合する。616は顔の輪郭を丸く描き、眉、目、鼻、耳と2筆による口の表現がある。小さな把手を持つが、顔は把手を避けて描いている。646は眉と瞳を持つ丸い目、鼻、口、耳を描く。

**D 類**(617～619・647～649) 頸部の屈曲はやや弱く、口縁部の外反も弱い。口縁端部は外側に肥厚する。

617は同一個体の2片であるが、接合はしない。小さな突起を鼻とし、2筆により目を描き、墨点で瞳を入れる。口は大きく、2筆で描き、短い墨線で歯を入れて恐ろしげな表情となる。618は同一個体が4片あり、そのうち3片を図示した。全体の構図は不明な点があるが、顔の輪郭を丸く描き、墨線で目、鼻、口を描いているものと思われる。小さな把手を持つが、顔の部分にはこない。口縁部内面には縦や斜めの墨線を施す。内面に墨線を入れたものは、他に716・775の2点が出土している。619は突起を鼻と見立て、太い墨線で眉、目などを描くもので、全体の構成は611と似る。突起上には相対する2本の弧線で鼻の輪郭を描き、中央に垂下する太い墨線がある。647は眉と瞳を墨点で表す目の部分で、胴部内面にはハケ目がある。648は把手を持ち、把手の上方の頸部と把手の下端に短い縦の墨線を入れるのみで、顔の表現はない。口縁部内面にハケ目がある。649は眉、目、鼻を描くもの。眉と鼻は直線的で、鍵の手状に末端がつながる。

**E 類**(620・621・645) 頸部の屈曲がやや弱く、口縁端部が尖るもの。

620は眉と墨点で瞳を示す目、三角形の鼻、1筆による楕円形の口を描く。眉と目尻は若干垂れ気味である。頸部には強いナデを施す。621は顔の輪郭部に墨線を重ね合わせたモチーフを描き、眉、耳や頭髮、頬ヒゲを示すものと思われ、他とは異なる特殊な表現法をとる。目は2筆で楕円形に描き、内部に弧線による瞳を入れ、瞳内には縦の細い墨線がある。胴部内面には細かいハケ目がある。645は眉と墨点で瞳を示す目を描いており、鼻の墨線が一部残る。

**F 類**(650・651) 口縁部が水平に外反し、端部は丸い。

650は眉、目、鼻と顔の輪郭と思われる墨線を描く。眉は長い弧線で、顔の輪郭を兼ねるものであろう。目は1筆で丸く描き、瞳を入れる。口縁端部に1ヶ所圧痕がある。651は把手を持つもので、把手を中心に縦横の墨線を描き、把手の上方には、円弧状に対向する2本の短い墨線を入れる。色調は暗褐色を呈する。

**G 類**(652) 頸部のくびれが著しく、口縁端部は上方に突出する。口径に比べて器高が低い。

652は1本の横方向の墨線と、2本の縦方向の弧線が残る。眉と鼻の表現か。

**H 類**(622・623・653～656) 直線的に外反しながら立ち上がる胴部で、頸部の屈曲は弱く、口径

が胴径よりも大きい。口縁端部は内面がわずかに凹む。口径に比して器高が低い。

622は顔の残存部が少ないが、眉、目、頬ヒゲと見られる墨線を描く。623は眉、墨点で瞳を表す目を描き、鼻、口と見られる墨線もある。653は眉を短い墨線を連ねて表現し、目は円形で、墨点で大きな瞳を入れる。目の右の墨線は、鼻か耳であろう。654は長い眉と楕円形の目を持ち、目の内部には墨点で瞳を表現し、目の左側には弧状の墨線を描く。鼻、口、耳と見られる墨線も残る。665はボタン状の突起を鼻とし、その周囲に眉、墨点を瞳とする目、口を描き、短い墨線を連ねて顔の輪郭を表現する。内面の一部にハケ目が残る。656は眉と目の部分。目は円形で、丸い墨線の瞳を持つ。他に、鼻や頬ヒゲと見られる墨線もある。

小 型 品 **I 類**(624~629・657・658) 口径10 cm 程度の小型品で、丸みを持つ胴部と外反する短い口縁部からなる。口縁端部はわずかに肥厚するものが多いが、丸みを持つものもある。器高は口径の半分程度である。

624は弧状の眉、2筆による目、鼻と頬ヒゲを描く。左目だけに、顔の中央に著しく寄せて小さな墨点で瞳を入れる。625は同一個体の2片で、接合はしない。すべて1筆の墨線で眉、目、鼻、口を描く。626は頸部に一周しない墨線と縦の短い墨線を入れ、眉、目、鼻と見られる円形や弧状の墨線を描くが、顔を表現したものかは判然としない。627は直線的な墨線で眉、目、鼻、口、耳を描き、墨点で鼻孔を表現する。顔の横には長い縦方向の墨線を配し、顔の輪郭を示したものか。そうであれば、4面に顔を描いていた可能性もある。628は眉、目、鼻、口を描く。目は上まぶただけを描き、墨点で瞳を表現する。629は頸部に1条の墨線を施し、胴部には斜め方向の墨線を描いたもので、顔は表現しない。657は横方向の墨線のみを用い、眉、目、鼻、口を表現する。658は眉、目、鼻の表現であると思われるが、残存部が少なく、詳細は不明である。**J 類**(633・634・664~672) 一般の土師器甕に描いたもの。法量によりさらに細分できるが、ここでは一括した。

甕 **B** 633は口縁部から胴部上半の破片で、眉と墨点で瞳を表した目、鼻の付け根部が残る。眉間部には仏像の白毫の様な墨点を入れ、その上方には逆ハの字状の墨線がある。634は甕Bを用いたもの。口径約34 cm におよぶ大型品で、顔は2面に描く。同一個体の破片から図上復原した。把手を鼻として用い、把手上に鼻尖部を描き、胴部に2本の墨線を入れて鼻の付け根部を表す。目は2筆で描き、瞳を持つ。目の上に眉、把手の下に口を描き、口には歯の表現がある。顔の輪郭には短い墨線を連続的に施し、頭髮、頬ヒゲを表しており、胴部の破片に残る墨線から、顎ヒゲも描いていたと思われる。外面の一部には黒斑がある。本例の様に大型の甕Bを用い、把手を鼻に見立てる例は、極めて珍しい。664は中型の甕の胴部の破片。墨線で眉、目、鼻、口を描く。外面のハケ目はほとんどナゲ消され、内面には叩きの当て具痕がある。665は口縁部から胴部上半の破片で、復原口径は約15 cm。眉と墨点で瞳を表した目、鼻、口を描いている。口縁部外面には縦方向、内面には横方向のハケ目が残る。666は頸部から胴部にかけての破片で、眉と目を描く。口縁部内面にもハケ目がある。667は胴部上半の破片で、眉、墨線の瞳を持つ目が残る。668は胴部の破片で、目は瞳を墨点で表す。その上には弧状の墨線を連ねており、眉や頭髮を表しているものであろう。669は頸部から胴部の破片で、数本の墨線で眉を表現し、目の一部が残る。666~669は大型の甕であろう。670は中型の甕の胴部で、目、鼻、口、顎ヒゲと見られる墨線を描く。外面のハケ目はかなり粗く、擦痕状のものであり、特殊な原体を用いた可

能性がある。内面には叩きの当て具痕がある。671は大型の甕の胴部で、口と口ヒゲ、顎ヒゲを描いているものであろう。672も大型の甕の胴部で、墨点の瞳がある目を描き、目の右下には2本の斜方向の墨線がある。外面に黒斑があり、内面には圧痕とハケ目が一部にある。

その他、口縁部を欠失する等の理由で類別が不能なものがあるが、特徴的なものについて図示した。630は底部で、鼻、口、顎ヒゲ、顔の輪郭を描いていると判断できる。鼻は縦の長い墨線で表し、墨点で鼻孔を表現する。口は1筆で円形に描き、内部に歯かと思われる墨線を入れる。成形の台の痕跡がある。631は胴部の破片。眉、目、鼻と思われる墨線を描き、他にも意味不明な墨線がある。内面には漆が付着し、漆容器として使用していた土器を転用したもの。632は底部から胴部の一部にかけての破片。墨書は2ヶ所に残り、1ヶ所は鼻、口、顎ヒゲ、もう1ヶ所には耳、顔の輪郭と見られる線を描く。成形の台の痕跡がある。659は頸部から胴部の破片。眉、目、鼻、耳を描き、目は2筆の墨線で表現する。660は頸部から胴部の破片。眉、目、鼻、口、顎ヒゲを描き、目は2筆の墨線で表現し、墨点で瞳を入れる。661は胴部の破片で、眉、目、鼻が残る。目は2筆で描き、墨線、墨点による瞳を入れる。鼻には鼻孔を描いており、顔の表現は最も写実的である。662・663は底部。662には鼻の下端部、口、口ヒゲ、顎ヒゲが見られる。成形の台の痕跡がある。663は径約4mmの小孔を焼成前にあけている。

漆壺の転用

底部に小孔

## ii 小型模造土器 (Pl. 42, Ph. 57・58)

SD6400出土の233点を中心に、SD6471・6472、坪内の包含層などから計243点が出土した。特記したもの以外はSD6400の出土で、出土地点、層位は別表3に記してある。甕、甌、甗、高杯、蓋、壺の器種がある。ほとんどが土師器で、須恵器が少量見られ、甕、甌、甗は全て土師器である。土師器の色調は、墨書人面土器同様、淡褐色を呈するものが多い。以下、器種ごとに記述を行なう。

土 師 器

### a 甕 (926～931)

12点出土し、10点がSD6400から出土している。口縁部内外面をヨコナデ、胴部内面はナデで調整する。胴部外面は不調整で、粘土紐の継目や指頭圧痕を残す。やや大型で深いもの(926)、やや扁平な球形の体部に短い口縁部を付すもの(927～930)、小型のもの(931)の3つの類が認められるが、出土量が多くはないため、詳細な分類は保留しておく。926の口縁部内面にはハケ目がある。928～930は完形で出土した。931はSD6400の出土ではなく、SB6570の西側柱の北から2番目の柱穴から出土した。

甕の出土量は甌、甗に比べて著しく少なく、墨書人面土器のI類として使用する壺Cを、小型模造土器の甕として転用した例が多くあったと考えられる。

壺Cの転用

### b 甌 (901～925)

55点出土し、すべてSD6400のものである。内面と口縁部外面をヨコナデで調整し、胴部外面は不調整で、粘土紐の継目や指頭圧痕が見られる。口縁部外面のヨコナデを省略するものもある。大きく5つに分類でき、さらに法量によって細分できる。

**A類 (901～906)** 底部から口縁部に向かって直線的に外反して開く、実用の甌を模した器形で、

底部には穿孔がある。法量により、AI 類(901～903)、AII 類(904～906)に分かれる。破片のものが多いため把手の有無は不詳であるが、確実に把手が付く例はない。904は完形で出土し、906は半周以上が残存するが、いずれも把手を持たない。口縁部外面のヨコナデの範囲は幅広で、  
底 部 穿 孔 AI 類は胴部の半ばほどまで及ぶが、AII 類では若干幅が狭くなる。901の底部の穿孔は、焼成後に打ち欠いたものである。904・906には黒斑がある。

**B 類**(908～911) 口縁部がやや内湾しながら開く器形で、口縁端部は尖るものが多い。器高は口径の半分程度となる。確認できたものでは、底部に焼成前に穿孔する例はないが、908には焼成後の穿孔がある。911は口縁端部が内屈し、色調は暗褐色に近い。口縁の一部を欠く他は完形で出土した。

**C 類**(920～925) 小さな底部から胴部が大きく開く器形で、口縁端部は外反する。底部に穿孔するものがある。法量により、CI 類(920～924)、CII 類(925)に分けられる。920は胴部に痕跡的な小さな把手を貼付け、底部に焼成後に穿孔を行なう。底部の一部に黒斑がある。923の底部には、焼成前の穿孔がある。925は完形で出土し、胴部に小孔があるが、これは意図的なものかは不明。

**D 類**(912～915・917～919) 胴部がやや内湾しながら開く器形で、底部は丸底に近い。口縁端部は丸みを帯びる。法量により、DI 類(914・915)、DII 類(912・913)、DIII 類(917～919)に分けられる。914には底部に焼成前の穿孔があるが、他には穿孔した例はない。913・914はナデ調整を省略し、全面不調整のままである。913は完形品に復原できる。DIII 類は直径 4 cm 程度の小型品で、全面不調整であり、外面には指頭圧痕が顕著に残る。3 点ともに完形で出土し、918は歪みが著しい。

ヨコナデの  
省 略

**E 類**(907・916) A～D 類以外のものを一括した。907は半球形の胴部に水平に外反する口縁部を付す器形。底部に穿孔はない。916は墨書人面土器の I 類に似た器形だが、頸部へのナデ調整の加え方や、頸部の屈曲の度合がやや異なる。完形品で出土し、墨書はない。外面には指頭圧痕が顕著に残る。

### c 竈(941～944)

小型模造土器では最も多く、107点出土した。うち105点がSD6400出土である。941のみ完形で出土し、完形品に復せるものも図示した 4 点のみである。これらは、実用の竈を忠実に模したものである。口径約 8 cm、器高約 11 cm の大型品(942・944)と、口径約 7 cm、器高約 9 cm の中型品(941・943)、口径約 5 cm で器高約 4 cm の小型品がある。なお、口径約 20 cm のものも出土しているが、これには煤が付着しており、小型模造土器というよりは、実用品の小型のものであろう。胴部外面は不調整で、粘土紐の継目を残し、口縁部は幅の狭いヨコナデで調整し、胴部内面に粗いヨコナデを加える。廂はすべて貼付けで、丁寧なナデ調整を行なう。廂部の断面は曲率を持つが、941では右側面と左側面では曲率が逆となる。基部下端と焚口は削りで調整する。941の焚口は 2 回に分けて削り取ったもので、右上隅部は直角の面をなし、左上隅部は丸みを帯びる。また、944の基部左下隅部には墨書人面土器と同様な成形の際の台  
製 作 技 法 の痕跡がわずかに残る。これらのことから、竈の製作技法が復原でき、その点に関しては後に考察する。

## d 食器・壺(932～940)

9点出土し、土師器(932・933)と須恵器(934～940)がある。須恵器は、SD6400から出土したものは938の1点のみで、他は西側溝以外の出土である。

西側溝以外  
の出土

932～934は高杯。932・933は土師器で、脚部から杯部の一部にかけての破片。脚柱部は面取りをせず、裾はあまり開かない。脚柱部は心棒成形で、裾部内面との境に稜を持つ。杯部内面のみをヨコナデし、他は不調整である。934は須恵器で、脚部のみ残存する。杯部と脚部は別に成形したものを接合しており、脚柱部にロクロ目が残る。SD6471上層出土。

935は蓋で、完形品で出土した。短い口縁部が鋭く下方に突出し、宝珠形のつまみを持つ。壺A蓋を模したものであろう。頂部には軽いロクロ削りを施し、全面に降灰が見られる。SD6472出土。936・937はIL42区の遺物包含層出土の壺K。936は底部と胴部が半分程度残存する。全面ロクロナデで調整し、内外面の一部に自然釉が降着する。937は口頸部を欠く他は完形で、頸部は意識的に打ち割った可能性がある。胴部外面をロクロ削りで調整する。肩部には緑色の自然釉が降着する。938は壺D。底部はヘラ切り不調整で、胴部外面にロクロ削りを施し、他はロクロナデで調整する。肩部に降灰が見られる。939はSD6472出土の壺H。口縁の一部を欠く他は、完形で出土した。胴部外面のみにロクロ削りを施す。高台は貼付けによるもので、全面にわずかに降灰が見られる。940はIL44区の遺物包含層出土の壺M。全面ロクロナデで調整し、肩部には降灰が見られる。頸部は意識的に打ち割ったものであろう。

頸部打欠き

## iii 土馬(Pl. 43・44, Ph. 59～61)

164点出土した。そのうち123点がSD6400の出土であり、次いでSD6471・6472にやや多く認められる。それ以外では坪内の土坑、溝、柱穴、包含層などで、SE6657の枠内からも1点出土している。ほとんどが破片で出土し、全形がわかる資料は少ない。完形品で出土したものは、小型のものに3点あるだけである。SD6400出土のもの以外は、保存状況が不良である。土馬の類別と層位は対応しないため、類別ごとに説明することとし、出土地点、層位は別表3に記した。

出土遺構

I類(945) 頸部に比べ頭部が小さく、背に粘土をつまみ出して表現する鞍を持つ。尾は下方に垂れ下がる。前肢、後肢の側面への開きは小さく、正面形が逆U字形を呈する。

945は他の例に比べて長胴で、顔、脚を欠くが、類例から、顔が小さく、脚も短いと思われる。7世紀末から8世紀初頭のものであろう。

II類(946・947・959) 顔の側面形が大きく彎曲し、下顎と頸部を明瞭に区別する。頸部はやや短く、尾は下降する。背には強いナデにより鞍を表現する。前肢、後肢の開きが大きくなり、正面形は逆V字形となる。製作手法は、まず棒状の粘土で胴部と尾部を作り、それに別に成形した四肢と頸部を接合する。その後、たずなと顔を貼付け、全面にナデ調整を加えるとともに鞍を表現し、竹管の刺突で目を表す。この手法は、基本的にI類～IV類にかけて採用される。

定型化

946は頭部から頸部、胴部にかけての破片。背にナデにより鞍を表現する。口は平坦な面をなすが、刻みはない。947は左後脚と尾の一部の破片。959は頭部と頸部の破片。顔、頸部の形態から、II類に含めた。

III類(948~955) II類に近い形態を取るが、全体に大型になり、頸部と四肢も長くなる。尾はほぼ水平に延びて先端部が上を向く。背にはナデにより鞍を表現するものとし、ないものがある。土馬としては、最も発達し、洗練された形態である。

SD6400からは、III類の土馬が最も多く出土した。完形品に復せるものはないが、全体の形状を比較的良く知ることができる。949~952は背にナデによる鞍の表現を持つが、953~955にはない。955はヘラ状の工具による刻みで口を表現する。

双子の土馬 953・954は最も残りの良いもので、953は左後脚と尾部先端、954は左前脚と胴部の一部を欠く他は完形である。この2点の土馬は、双子とでも称せるほど、形態と大きさが酷似している。製作手法の点でも、顔の側面に強い指頭圧痕が残ることや、顔の前面は型を当てながらのナデによって整形したために同じ断面形をし、工具痕が筋になって付いていること(Ph. 28)、両前脚の分岐部を縦にナデることなど細部にわたっても一致しており、おそらく同一工人が同じ時に作ったものと考えられる。出土地点、層位もIN10区の暗灰砂層と同一であり、ここからは同形、同大の土馬の破片がもう1個体分出土しており、計3個体あったことが知られる。これらの土馬は、一括して入手した人物が同時に投棄した可能性が高い。

IV類(956) III類に比べて小型化し、頸部、四肢が短くなる。背に鞍は表現なくなり、尾は斜め上方に反り上がる。

956の手綱は、頭部の粘土板と一体にして貼付けている。この土馬の製作手法はやや特殊で、頭部、頸部、前脚部の前半部と胴部、後脚部、尾部の後半部とに分け、それぞれ脚部を1本の棒状にしたものを折り曲げて2本の脚部を成形し、それを貼合わせるという手順をとる。

製作手法の變化 V類(957・958) 製作手法がIV類までとは大きく変化する。粘土板から直接頸部、尾部、四肢をつまみ出した後に中央で折り返し、腹部から尾部にかけて折り返した面をナデ調整する。そのため、胴部の断面形は腹部の下面がへこむ形となる。尾は上方に反り上がるが、偏平で平面が三角形となり、側面形で前肢、後肢のなす角は、IV類までの逆U字形から逆V字形に変わる。

957は右前脚、左後脚を欠く他は完形。頭頂部が上方に長く立ち上がる。958は全面に比較的丁寧なナデ調整を施す。そのため、頸部や尾部は稜を持つ形でやや角張る。

VI類(960・961・988) V類よりさらに小型化し、全体の調整も粗雑になる。尾は上方に反り上がるが、横断面形はV類とは異なり、円形である。

960は左後脚を欠く以外は完形、961は完形品で出土した。この2点も、大きさを除けばIII類の953・954と同様に形態、製作手法ともに酷似しており、出土地点もほぼ同じである。988は七条条間北小路南側溝SD6471出土。顔と右の前・後脚を欠き、保存も不良であるが、たずなの表現が認められる。

平安時代 VII類(962~964) 最も小型化し、退化した形態を示すもの。四肢、尾は短くつまみ出すのみで、顔は粘土を貼付けて作り、竹管で目を表現する。全体にナデ調整は省略する。

963は右前脚の先端を欠く以外は完形、964は完形品で出土した。ともに顔は粘土板を貼付けて成形し、顔の前面は平坦な面をなす。たずなの表現はない。962は胴後半部を欠く。頭部は小さな粘土板を貼付けて成形し、大ききの割には太い竹管の刺突により目を表現する。脚は偏平で、おそらく前脚、後脚一体に成形したものを貼付けたと思われる。土馬としては、最も退化した形態である。数ヶ所に、爪の痕跡がある。

## J 墨書・刻書土器(Pl. 45～47, Ph.62～64)

西側溝 SD6400を中心に、坪内の井戸、包含層などから約100点が出土した。記載方法は墨書が主体であるが、刻書も少量あり、両者を組み合わせたものも見られる。記載内容は、人名、記載内容土器の内容物、習書など多岐にわたるが、坪の性格を示すような内容は見受けられない。これらの器種、釈文、出土遺構、地点、層位などについては別表4に記した。

160～180・424～432・434～447はSD6400出土のもの。160は土師器杯AIで、底部内面に習書があり、一部を硯として使用している。底部外面には記号を記す。425は人名、427は土器の用途を記したものである。163は土師器皿AIで、内面に「夜」を刻書で記す。434は須恵器杯BII蓋。頂部外面に「神明膏」と墨書し、内容物を示している。神明膏とは薬の名前で、『医心方』によると数種類の薬草や苦酒と猪の脂肪を調合するものという。眼病や中風に効果があるとされている<sup>22)</sup>。180は実用品の甕。437は須恵器甕の胴部破片を用いたもので、内面に数字を習書した後、猿面硯として使用している。

116はSE6657出土の土師器杯CIで、底部外面に「大」を墨書し、その周囲を刻書で囲む。411・418・433は「元」を墨書したもの。SD6400からも「元」と記した土器(170・171)が出土しており、全て同筆ではないものの、出土点数が多いことが一つの特徴である。

- 1) 奈文研『平城宮報告VII』1976、『平城宮報告XI』1982、『平城宮報告XIII』1991
- 2) 奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘報告』1995
- 3) 京都市『史料京都の歴史2 考古』1983
- 4) 富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』1987
- 5) 五泉市教育委員会『山崎須恵窯跡緊急発掘調査報告書』1981
- 6) 岐阜市教育委員会『老洞古窯址群発掘調査報告書』1981
- 7) 秋本真澄「伊豆長岡町花坂島橘窯址発掘調査報告」『駿豆の遺跡研究(2)』1976など。
- 8) 西弘海「丸底の土器・平底の土器」『土器様式の成立とその背景』1987
- 9) 後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』1989
- 10) 奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
- 11) 奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984
- 12) 奈文研『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980、奈文研『東紀寺遺跡』1994
- 13) 奈文研『平城宮報告VI』1975
- 14) 奈文研『西隆寺発掘調査報告』1993
- 15) 奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987
- 16) 森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究2』1993
- 17) 硯の産地や年代に関しては、檜崎彰一氏のご教示を得た。
- 18) 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第56冊 1994
- 19) 奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984
- 20) 奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976
- 21) 奈良市教委『奈良市概要 昭和59年度』1985
- 22) 立木修氏の教示による(丹波康頼『医心方』巻3、巻5 984)。

### 3 木製品・漆塗製品

今回の調査では、道路側溝、井戸、木棺墓から計1,142点にのぼる木製品・漆塗製品が出土した。それらの遺構別集計は別表2に示した。以下遺構別に代表的な遺物について報告する。木製品の分類・型式は原則として『木器集成図録 近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所『史料』第27冊 1985）に準じる。また、樹種の記載のないものはヒノキであり、樹種が不明のものはすべて広葉樹である。

#### A 東一坊大路西側溝出土木製品(Pl. 48～52, Ph. 65～68)

東一坊大路西側溝からは、1,130点の木製品が出土したが、その大半は板状品・棒状品である。ここでは遺存状態の良い農工具、祭祀具等の71点について報告する。

##### i 農工具(Pl. 48—13, Ph. 67—3・4・6～8・10～13)

**楔(1・2)** 材を斧頭状に加工した楔は4点出土した。1は横幅が広く、全面を削りで丁寧に加工する。縦長5.7 cm、横幅7.1 cm、厚1.7 cm。ツゲ。褐色粗砂層出土。2は割材の先端を削り、斧頭状に作る。長さ10.2 cm、幅2.3 cm。厚1.1 cm。暗灰砂層出土。

**工具柄(3～5)** 工具柄は、装着孔断面が方形あるいは杏仁形で鑿などに用いられたと思われるものが2点、刀子の柄が3点出土した。3は心持材を断面楕円形の筒状に成形し、木口に断面杏仁形の装着孔をあける。工具の茎を一回り大きな木製の中子に挿入し、さらにそれごと柄の装着孔に挿入する。長さ8.4 cm、断面径3.2×2.8 cm。アカガシ亜属。暗灰砂層出土。4・5は刀子柄。4は鉄製刀子を装着した状態で出土した。細い心持材を利用した断面円形の円筒状の柄で、焼込みにより装着する。柄は柄頭から約6 cm分が残る。刀子は全体が屈曲するが、全長約19 cmに復原できる。柄径1.3 cm。刀子身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm。樹種不明。灰色砂質粘土層出土。5は断面楕円形。焼込みで装着する。現存長7.1 cm、径1.3×1.1 cm。樹種不明。灰色粗砂層出土。

**篋(6～8)** 身と柄から成る匙状を呈するが、身が狭く食事用とは考えられないものを工具の篋とした。6は身が長く、先端は剣先状。長さ13.7 cm、身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。7は全体が細長いS字状を呈し、細長い身の先端は剣先状にする。長さ14.6 cm、幅1.3 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。8は身を刀身状に作る。長さ19.7 cm、幅1.3 cm、厚0.6 cm。暗灰粘土層出土。

**木釘(9)** 角棒の先端を尖らせた木釘。頭部は特に加工してはいない。長さ8.6 cm、幅0.9 cm、厚さ0.7 cm。褐色粗砂層出土。

**漆刷毛(10・11)** 板状の柄元に漆が付着した平刷毛が2点出土した。10は板目材から棒状の握りと板状の柄元を作り出し、柄元に木口面の長辺と平行する割目を入れる。そこに毛をはさみ、糸を巻いて留める。柄元の先端に漆が付着し、毛と糸が一部遺存する。握り端を欠損する。現存長17.9 cm、幅1.8 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。11は柾目材から板状の握りと柄元を作り出す。柄元から割りさいて同形品を2枚作り、その間に毛をはさみ、紐などで巻いて留めたら



しい。柄元の両側に2ヶ所ずつV字状の切り欠きをいれる。握りは先端に向け徐々に細く作る。内面は割面のままだが、握り端部のみ内面にも削りを施す。柄元内面に毛が遺存する。長さ22.0 cm、幅1.9 cm、厚さ0.5 cm。褐色粗砂層出土。

**木槌**(12) 組合せ式木槌の頭部。心持材を円筒形に成形し、側面に柄を挿入する方形孔をあける。孔には柄の一部が遺存する。長さ13.6 cm、径7.7×6.8 cm。ヤブツバキ。暗灰砂層出土。

**横槌**(13) 円柱状の身と棒状の柄から成る横槌は2点出土した。13は心持材から削り出す。長さ33.7 cm、径4.4×3.8 cm。サカキ。褐色粗砂層出土。

## ii 紡織具(Pl. 48, Ph. 67—15・16)

**糸巻杵木**(14) 棒を断面蒲鉾状に整形し、両端は腹側を斜めに削り細くする。腹面は中央を浅く削り込み、横木を挿し込む円形の柄孔を2ヶ所あける。長さ26.9 cm、幅1.3 cm、厚さ1.7 cm。褐色粗砂層出土。

**糸巻横木**(15・16) 杵木を4本持つA形式の糸巻の横木が3点出土した。板材の両端を棒状に削り、幅広の中央部に相欠きの仕口を施し、軸孔をあける。15は完形。2ヶ所に鼠刃錐でつけた円形の痕跡が残る。製作中に穿孔位置を変えたものか。長さ9.2 cm、幅1.7 cm、厚さ0.8 cm。褐色粗砂層出土。16は仕口の裏の平坦面に「大二両一分」の墨書がある。仕口部分で折損する。墨書  
長さ10.1 cm、幅2.3 cm、厚さ0.9 cm。暗灰砂層出土。

## iii 食事具(Pl. 49, Ph. 65—17~19)

**匙**(17~20) 棒状の柄を持つ匙が3点、板状の柄を持つ匙が6点出土した。17・18は棒状の柄を持つ。17は狭小の身の先縁を直線に作る。先縁の両面は、片面を大きく、逆面を小さく斜めに面取りをする。柄頭は四角錐状に面取りをする。長さ17.0 cm、幅1.4 cm、厚さ0.8 cm。褐色粗砂層出土。18は身の先縁が半円状。柄頭はやや幅広になり山形を呈する。加工は荒く、部分的に割面が残る。身の片側縁を欠損する。長さ17.8 cm、現存身幅2.6 cm、厚さ0.4 cm。19・20は板状の柄をもつ。19は身の先縁が直線状を呈する。柄頭を欠損する。現存長14.0 cm、幅2.4 cm、厚さ0.3 cm。ツガ。木屑層出土。20は身の先縁が半円状を呈し、柄を短く作る。加工は荒く、割面が残る。身の片側縁を欠損する。長さ7.0 cm、厚さ0.4 cm。現存身幅2.6 cm。暗灰砂層出土。

この他に、板状の匙を大型にした形状の杓子の破片2点が出土した。

## iv 容器(Pl. 49, Ph. 65—21・23・27)

**挽物蓋**(21) 黒漆塗りの半球状蓋小片1点、白木蓋が1点出土した。21はロクロ整形の白木で、小型容器の蓋。平坦な頂部と直立する低い口縁部からなる。内・外面ともにロクロ目が残るが、外面のロクロ目は荒い。約1/4が残る。縦木取り。推定径8.3 cm、器高1.3 cm。木屑層出土。

**挽物皿**(22) 白木の高台を持たない浅い皿が2点出土した。22は内面と口縁部外面にロクロ目が残る。底面には割面が残る、ロクロ整形していない。ロクロ爪痕が3ヶ所残る。約1/3が残存する。横木取り。径16.0 cm。器高0.8 cm。暗灰粘土層出土。

**曲物容器**(23~26) 円形の柁目の底板に、薄い柁目板を円筒状に丸めた側板を結合した曲物容

器は、完形品が1点、側板片が9点(別個体)、底板が10点出土した。23は側板内面には不均等に、縦・斜平行線のケビキを施す。側板の綴じは1列。綴じの上部を欠損するが、おそらく4段綴じであろう。底部に、1列外2段綴じのたがをはめ、あわせて木釘で底板に結合する。木釘は6ヶ所に打っている。径18.5 cm、器高11.2 cm。青灰砂質土層出土。24～26は、いずれも柂目材を用いた円形底板。24は片面が加工が荒い。周縁を若干欠損する。側面に木釘孔が2ヶ所残る。釘孔の位置から見て、さらに1ヶ所存在したと思われる。径12.6 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。25は周縁の約1/4を欠損する。釘孔は2ヶ所残り、24と同様に3ヶ所で結合したらしい。径15.5 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。26は約半分を欠損する。木釘孔は現状で2ヶ所に残る。片面に放射状の刃傷が残り、中心に穿孔がある。蓋として使用されたものか。復原径10.4 cm、厚さ0.4 cm。褐色粗砂層出土。

転用蓋板 蓋板(27) 円形の蓋板。中央に2ヶ所、つまみ用の紐孔をあける。周縁は削りで斜めに面取りをする。周縁部に2つ1組の穿孔が数ヶ所あり、一部には樺皮も遺存しているので、樺皮結合曲物の底板を転用したことがわかる。周縁を若干欠損する。径17.9 cm、厚さ0.9 cm。褐色粗砂層出土。

v 祭祀具(Pl. 50・51—48・49, Ph. 65—31～33・36・38・43・46, 66—34・35・39・40・48・49)

正面全身人形(28～35) 板材を切り取り人の正面全身を表したもの。腕・足の表現を持つA型式と足を表現しないC型式がある。頸部の型式には、両側縁の二等辺三角形の切り欠きで表現するIと上辺の長い三角形の切り欠きで表現するIIがある。足の型式には長三角形の切り込みによるa、コ字形に切り込みを入れ折り取るbがある。全体がわかるものではAIa型式が2点、AIb型式が2点、AIIa型式が3点、C型式が2点ある。顔や胴に墨描きのあるものは9点ある。28は比較的大型のもの。浅い切り込みで手を作り、両側縁の二等辺三角形の切り欠きで頸部を表現するAI型式。頭部は三角形。下半身を欠損する。現存長17.1 cm、幅4.0 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。29はAIb型式。頭部は三角形に作る。顔の半分と片足を欠損する。長さ20.5 cm、幅2.5 cm、厚さ0.4 cm。木屑層出土。30・31は両側縁の斜めの切り込みで手を表現し、足は長三角形に切り込んで作るAIa型式。30は頭部が台形。両足の端部を欠損する。現存長10.8 cm、幅1.8 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。31は顔全体が楕円形を呈する。顔を墨描きする。右肩部を欠損する。長さ12.9 cm、幅2.7 cm、厚さ0.2 cm。褐色粗砂層出土。32はAIIb型式。頭部が三角形。片足の端部を欠損する。長さ15.8 cm、幅2.2 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。33はAIIa型式。頭部は半円形。片側縁・足を欠損する。長さ17.4 cm、現存幅2.1 cm、厚さ0.3 cm。34・35は足を表現しないC型式。下端はともに剣先状に作る。34は頸部の切り欠きは二等辺三角形形状。頭部は三角形。下端を若干欠損する。顔を墨描きする。現存長8.8 cm、幅2.0 cm、厚さ0.3 cm。スギ。暗灰砂層出土。35は頸部の切り欠きが上側が長い。両側縁に斜めに切り込みを入れ、手を表現する。頭部は台形。右肩を欠損する。顔を墨描きする。長さ8.4 cm、幅1.9 cm、厚さ0.3 cm。スギ。暗灰砂層出土。この34・35は共伴して出土しており、形態・表現も類似するので、同じ製作者によるものである可能性が高い。

立体人形(36) 断面楕円形の棒状の材に人の表現を施したもの。材の端部近くに、周囲から刻みを入れ頸部を表現し、頭部に顔を刻む。頭頂部は正面から斜めに削り、細くする。被りものの

表現か。手足の表現は無い。長さ19.0 cm、径1.1×0.9 cm。木屑層出土。

**弓形**(37) 心持材の端部を細くして弭を表現し、中央部分は断面蒲鉾形に削る。片端は欠損しているが、形状からみて弓の形代と考える。現存長21.9 cm、幅1.2 cm、厚さ1.2 cm。マユミ。暗灰粘土層出土。

**刀形**(38) 柄と刀身を表現したA型式の刀形が1点、切先のみ遺存したものが3点出土した。切先部分だけでは刀子形との区別が難しいが、比較的大型のものを刀形とした。38は割面を残す板材を切って、刀の柄と刀身を表現する。柄頭は円頭状。切先部を欠損する。現存長20.5 cm、幅2.6 cm、厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。

**矛形**(39・40) 同形品2点が共伴して出土した。割面を残す板を切り、矛先を削りで尖らせ、片面に直線・波状線を墨描きする。39は長23.5 cm、幅1.6 cm、厚さ0.3 cm。スギ。40は長さ24.8 cm、幅1.6 cm、厚さ0.4 cm。スギ。ともに暗灰砂層出土。 墨 描 文 様

**刀子形**(41・42) 4点出土した。41は棒状の割材を用い、切先と刃・背の一部を削りで整形する。長さ16.6 cm、幅1.9 cm、厚さ1.2 cm。暗灰砂層出土。42は板材から成形する。切先部分は片面を削って刃状に作る。長さ16.9 cm、幅1.3 cm、厚さ0.5 cm。スギ。褐色粗砂層出土。

**斎串**(43・44) 型式の判明するものはすべて、細板の上端を圭頭状、下端を剣先状に作るC型式。側縁に切り込みを持たないCI型式が1点。両側縁に1ヶ所ずつ切り込みを持つCIII型式が5点出土した。43はCIII型式。長さ17.7 cm、幅2.1 cm、厚さ0.2 cm。暗灰砂層出土。44はCI型式。側縁下部を浅く削り込んでいる。片側縁を欠損する。長さ15.3 cm、現存幅1.5 cm、厚さ0.3 cm。褐色粗砂層出土。

**陽物**(45) 2点出土した。45は断面偏円形の棒材の片端部を削りで亀頭状に加工する。他端部付近には、溝をめぐらせる。長さ10.2 cm、幅1.5 cm、厚さ1.2 cm。褐色粗砂層出土。

**不明形代**(46) 薄板を切り形代にしたと思われるものが4点出土した。46は薄板の両端を花卉状に成形し、一端に方形孔をあける。一方の端部付近を欠損する。長さ13.7 cm、幅2.9 cm、厚さ0.3 cm。

**琴柱形**(47) 薄板を切り取り、琴柱形に作る。片側の脚部を欠損する。縦高2.4 cm、現存幅6.4 cm、厚さ0.2 cm。

**琴形**(48・49) 共鳴槽を持つ琴の形代。同形品2点が近接して出土した。このような形状をした 対 の 琴 形 琴は、従来知られていなかったものである。共鳴槽は底板と側板を組み合わせで作る。底板の両端付近で槽の内面に横に切れ目を入れ折り曲げ、細長い台形の側板を側縁に木釘で留め、舟形にする。底部には2ヶ所穿孔を施す。表板は、細板の一方の端部に5ヶ所の切り込みを入れ琴尾を作り、琴頭付近に弦孔を5個あける。48は厚さ0.4 cm、1枚の習書木簡から底板と表板を切り出す。表・底板ともに墨書が残り、表板右長側縁の墨付きが底板の「道」字につながる。槽の外面には、前面に円文を横に2つ、両側板に鋸歯状文を墨描きする。長さ25.0 cm、幅3.7 cm、高さ1.6 cm。表・底板の厚さ0.4 cm、両側板の厚さ0.3 cm。スギ。49も表板・底板に習書木簡を利用する。48と共通する文字が見られ、やはり同筆・同一材を用いた可能性が高い。48と同様に、槽前面に円文、側板に鋸歯状文を墨描きする。側板・底板の破損が大きい。復原長25.4 cm、幅3.8 cm、復原高1.7 cm。表板の厚さ0.4 cm、底板・両側板の厚さ0.3 cm。スギ。ともに褐色粗砂層出土。

vi 服飾具(Pl. 51—50~56, Ph. 66—52・55・57~59, 68—50・51)

一本歯の  
下駄

**下駄**(50・51) 50は一本歯の下駄。小判形の台と扇形に大きく開く歯を一本で作る。鼻緒孔は焼火箸であける。前壺は中央やや左よりに位置する。木取りは台上面が木表になる。歯の下部と台の後部を欠損し、部分的に火を受けている。台が小型で使用の痕跡も無いので、実用品とは考えにくい。現存長9.0 cm、台幅5.5 cm、現存高11.1 cm、歯現存幅11.9 cm。ムクロジ。灰色粘土層出土。51は、台は細長く前後縁が半円状を呈し、2本の歯を削り出す。木取りは、材の木表を台上面にする。鼻緒孔は刃物であける。前壺は中央やや左よりに位置し、前歯を若干彫り込む。後壺は後歯の前にあく。両歯ともよくすり減り、後歯は若干痕跡が残るのみである。右前部を欠損する。現存長19.5 cm、幅7.2 cm、高1.8 cm。ケヤキ。暗灰砂層出土。

**留針**(52~56) 被り物を留める木針。52は頭部を板状、身部を棒状に作るB型式。身の先端を斜めに削って尖らせる。部分的に割り面が残る。長さ16.3 cm、幅1.5 cm、厚さ0.8 cm。暗灰砂層出土。53~55は頭部に加工を加えず、先端が剣先状のC1型式。53は全体が細板状。長さ13.5 cm、幅1.1 cm、厚さ0.3 cm。54は角棒状の材を用い全体がやや湾曲する。長さ12.8 cm、幅0.8 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。55は、頭部付近がS字状に湾曲する。長さ20.1 cm、幅1.0 cm、厚さ0.6 cm。暗灰砂層出土。56は両端を尖らせるD型式。片端を若干欠損する。長さ17.0 cm、幅1.1 cm、厚さ0.8 cm。暗灰砂層出土。

**横櫛**(57~59) 出土した19点は、いずれも全体が長方形を呈するA型式。肩部が残るものは、肩の角張るAI型式が1点、肩に丸味のあるAII型式が6点ある。57はAI型式。断片であるが、1 cm中に9枚の歯を挽きだしている。現存幅3.9 cm、高さ5.0 cm、厚さ0.9 cm。イスノキ。褐色粗砂層出土。58・59はAII型式。58は小型品。2 cm中に20枚の歯を挽きだす。現存幅3.3 cm、高さ2.7 cm、厚さ0.4 cm。イスノキ。褐色粗砂層出土。59は大型品。3 cm中に26枚の歯を挽きだす。現存幅13.5 cm、高さ5.0 cm、厚さ1.0 cm。モッコク。褐色粗砂層出土。

この他に檜扇の小片2点が出土した。

vii その他(Pl. 51—60, 52, Ph. 68—60)

**木印**(60) 印面は方形で、「道」字を反転させずに陽刻する。捺印すると左文字となる。鈕は四角錐状で端部付近に円孔が貫通する。印面の一 corner が欠ける。印面幅3.7×3.5 cm、高さ3.8 cm。ツゲ。暗灰砂層出土。

**組継ぎ部材**(61・62) 長方形板の両短辺に、別材と直角に交互に組み合うように方形の切り欠きを入れ枘を作り出した組継ぎの部材が2点出土した。いずれも片長側縁を欠損しており、何枚継ぎであったかは不明。61は長辺に別材と上下にちきり留めするための台形の切り欠きが3ヶ所にある。また、長辺に沿って7ヶ所に径約0.3 cmの穿孔があるが、その用途は不明。長さ80.8 cm、現存幅12.4 cm、厚さ1.6 cm。スギ。暗灰粘土層出土。62は片側の木口に木釘が残り、組み合わせた後、組手の外側から木釘留めにしたらしい。長辺に沿って3ヶ所に身部径約0.5 cmの木釘が残り、長辺側面にも釘孔が2ヶ所ある。周縁に段を作り出した底板にはめ、外・下面から木釘で留めたものか。それとは別に4ヶ所に身部径約0.3 cmの木釘が残り、うち3つは長辺に直交する形で並ぶ。用途は不明。横幅46.8 cm、現存高8.2 cm、厚さ1.3 cm。スギ。暗灰粘

土層出土。

**不明品** (63～66) 63は長方形の板目材の隅を斜めに落とし、中央に方形孔をあける。周縁は荒く削る。部材の一部か。長さ14.2 cm、幅7.0 cm、厚さ3.2 cm。アカガシ亜属。褐色粗砂層出土。64は長方形の板材の一方の端部付近に、刀子状の工具で荒く方形孔をあける。側縁を若干欠損する。長さ32.2 cm、幅4.4 cm、厚さ0.6 cm。褐色粗砂層出土。65は断面蒲鉾状の棒材の両端を圭頭状に作り、平坦面を3ヶ所浅く削りこむ。長さ23.3 cm、幅1.3 cm、厚さ0.8 cm。カヤ。褐色粗砂層出土。66は平たい棒材の片側端部付近に両側縁からV字状の切り欠きをいれ、さらに両側縁を対称に浅く削り込む。形状から人形の一種の可能性もある。切り欠き付近を若干欠損する。長さ19.0 cm、幅1.7 cm、厚さ1.2 cm。

**樺巻棒** (67) 粗く加工した棒数本を樺皮で束ねたものが3点出土した。67は径0.5～0.6 cmの棒を3本、樺皮で束ねる。樺皮の一方の端部は1本の棒に切れ目をいれ差し留めている。綴じ部分の周辺のみが残存する。現存長12.8 cm。褐色粗砂層出土。

**細板** (68～71) 板状品は大量に出土したが、小片・破損品がほとんどである。ここでは完形の小型品を報告する。68～70は削りで整形した長方形の細板。部分的に割面が残る。68は若干湾曲する。長さ17.0 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm。暗灰粘土層出土。69は片端の隅を1ヶ所切り落とす。径19.4 cm、幅1.0 cm、厚さ0.4 cm。暗灰砂層出土。70は両側縁を斜めに面取りし、断面八角形にする。長さ25.0 cm、幅1.8 cm、厚さ0.6 cm。木屑層出土。71は細板の両端を側縁から斜めに切り落とし圭頭状にする。加工は比較的丁寧。1ヶ所に割目がはいる。長さ22.6 cm、幅0.8 cm、厚さ0.4 cm。スズ。暗灰砂層出土。

**棒** (72) 棒状品も大量に出土したが大半は破損品である。ここでは完形の1点を報告する。削りで整形した断面方形の棒。両端を両面から斜めに面取りする。全体が若干反る。長さ25.1 cm、幅1.0 cm、厚さ0.9 cm。暗灰砂層出土。

## B 六条大路北側溝出土木製品 (Pl. 53—73～75)

木製品は4点のみの出土である。ここでは、曲物底板小片を除く3点について報告する。

**留針** (73) 全体が扁平で身部を剣先状に作るC I型式。加工は丁寧である。全体が若干湾曲する。身部端を欠損する。現存長16.4 cm、幅1.3 cm、厚さ0.6 cm。

**尖端棒** (74) 角棒の一端を削りで尖らせたもの。縦に割れている。長さ17.2 cm、幅0.7 cm、厚さ0.4 cm。

**正面全身人形** (75) 頭部のみ残存。頭頂部は三角形。頸部の切り欠きは上側が長いII型式。髭を持つ人面を墨描きしている。現存長5.4 cm、現存幅1.8 cm、厚さ0.3 cm。

## C 井戸 SE6657出土木製品 (Pl. 53—76～79, Ph. 67—76, 68—79)

不明品を含め木製品は7点出土した。ここでは、保存状態が良好な4点について報告する。

**錐柄** (76) 細い心持材を円筒形に加工し、刀子状の工具で一方の端部に装着孔をあけ、そこに鉄製の錐身を挿入する。錐身は先端を欠くが装着した状態で出土した。柄は中央付近で2つに折れている。長さ15.8 cm、径1.4 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

**栓** (77) 細い心持材を円筒形に削り、さらに一方の端部を周囲から削って細くする。先端部を欠

損する。現存長7.6 cm、径1.6 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

**斎串**(78) 上端が圭頭状で、上端付近の両側縁に1ヶ所ずつ切り込みを入れるCⅢ型式。長さ11.5 cm、幅1.3 cm、厚さ0.2 cm。井戸枠内出土。

**立体鳥形**(79) 鳥がとまっている姿を削りだした小型品。腹部に下からあけられた小孔があり、細い棒を挿入して用いたと思われる。長さ4.6 cm、幅1.2 cm、厚さ1.4 cm。樹種不明。井戸枠内最下層出土。

棒に挿した  
立体鳥形

## D 遺構に関連する木製品 (Pl. 53—80・81, Ph. 68—80・81)

曲物埋設遺構 SX6422と井戸 SE6657では、木製品を転用している。SX6422では径50 cm と径35 cm の曲物を上下に重ね、SE6657では曲物と組合わせの箱を井戸枠に転用していた。ここでは遺存状態の良い SE6657の2点について報告する。

**曲物**(80) 曲物の底板を取り、井戸の下から2段目に用いていた。側板には厚さ約0.8 cm の板目材を用い、内面全体に約1 cm 間隔で、刀子により縦のケビキを施す。部分的に斜行のケビキもおこなう。側板の綴合わせは2ヶ所。外側端部で2列前内6段後内7段綴じ、内側の端部付近で1列内6段綴じにする。下部外側に、厚さ約0.3 cm の細い柾目材を1列外3段綴じにしたたがをはめ、ともに底板に木釘で留める。木釘孔は26ヶ所あり、うち2つ近接するものが6ヶ所ある。側板の下端から23~24 cm の高さに木釘孔らしい7ヶ所の穿孔が均等に配され、部分的にたがの痕跡があり、本来側板中央にも、たがをはめていたらしい。側板の内面下端に厚さ約3 cm の底板の痕跡が残る。底径57.6 cm、高さ38.4 cm。

**箱**(81) 井戸最下段に置かれていた、組合せの箱。4枚の同規模の長方形板の両短辺に方形の切り欠きを入れ枘を作りだし、組み合わせて5枚組継の側板とする。組み合わせた後、枘の部分に組手の外側から鉄釘を打って留める。向かい合う2面の側板内側に、水平に3ヶ所ずつ方形の座金をおいて釘を打っており、本来は外側の向かい合う位置に持ち手がつけられていたらしい。側板の上面には、向かい合う側板のほぼ同じ位置に、方形の座金を置いて鉄釘を打っている。座金の機能は不明。下面にも同様に釘を打っているが、座金是用いていない。内・外面には各側板の両短辺の中心を通るように打った割付用の墨線が部分的に残る。一辺53.0 cm、高さ36.3 cm。

## E 木棺墓 SX6428出土品 (Pl. 53—82・83)

平安時代前期の木棺墓 SX6428には、土器、水晶玉、銭貨とともに2点の漆塗製品が副葬されていた。

**挽物椀**(82) 最大径12.4 cm、高さ3.6 cm で、口縁はやや外反する。素地が腐食・消失しているため、現状の最大厚は2 mm。漆膜裏面に木目の痕跡と粗い布が残っており、広葉樹を素材とした挽物を素地とし、布着せして黒漆を塗っていたことがわかる。

**漆皮箱**(83) 一辺16.5 cm、高さ1.5 cm の方形の漆皮箱。皮に粗い布を被せた後、黒漆を塗っている。口縁外面には幅0.5 cm の紐をつける。口縁内面は平坦である。器胎の皮が腐食・消失したため、現状の最大厚は3 mm 程度である。

## 4 金 属 製 品

本調査出土の金属製品は、計169点にのぼる。内訳は、銅製品20点、鉄製品88点、鉛素材2点、銅銭59点である。小片等で原形不明なものを除いた集計は Tab. 5 のとおりで、大半が東一坊大路西側溝 SD6400からの出土である。以下では、遺存状態の良い銅・鉄製品37点と銅銭20点について報告する。文中に出土遺構の記載がない場合は SD6400からの出土であり、SD6400出土品については、不明のものを除き出土層位を記してある。また、木柄の残存している SD6400出土の刀子1点と SE6657出土の錐1点については、第IV章3で報告した。

### A 銅 製 品 (Pl. 54—1~16, Ph. 69—1~5・7~13, 70—14)

**鍔帯金具** (1~5) SD6400から鉸具、丸柄・巡方、鉈尾合わせて6点が出土した。1は鉸具板金具。本来は板金を2つに折り曲げ革帯端部をはさみ2ヶ所で鉋留にしたものであるが、折り曲げ部分で折れて約半分を欠損する。表裏両面に鑢目が残し、周縁は斜めに面取りする。折り曲げ部には、外枠・刺金を固定するための切り込みがある。表面に漆の痕跡が残る。幅2.7 cm、

黒漆塗りの  
帯金具

厚さ0.1 cm、重量3.7 g。2は巡方の表金具。表面と透し孔を鑢で整形する。裏面4隅に鉋足を鑢出す。表面には黒漆が部分的に残る。縦3.2 cm、横3.4 cm、厚さ0.2 cm、重量14.6 g。3は丸柄裏金具。外面を鑢で整形し、周縁は鑢で面取り。鉋受けの小孔は3ヶ所と思われる。約半分を欠損する。縦幅2.2 cm、厚さ0.1 cm、重量0.8 g。表面にわずかに漆の痕跡が残る。4は丸柄裏金具。表面と透し孔を鑢で整形、周縁は面取りする。鉋受けの小孔は3ヶ所あり、1ヶ所に鉋軸が残る。縦1.4 cm、横2.3 cm、厚さ0.1 cm、重量1.1 g。5は鉈尾表金具。先端の縁部を甲高につくる。裏面に3ヶ所、高さ約0.3 cmの鉋足を鑢出す。外面は鑢で整形し、周縁は面取りする。長さ2.3 cm、幅2.5 cm、厚さ0.2 cm、重量5.2 g。

**釘状金具** (6) 片側に2孔をあけ

Tab. 5 遺構別出土金属製品集計表

| 遺 構       | SD6400 | SE6657 | SK6528 | SX6428 | その他 |
|-----------|--------|--------|--------|--------|-----|
| 銅 鍔 帯 金 具 | 6      |        |        |        |     |
| 銅 釘 状 金 具 | 1      |        |        |        |     |
| 銅 責 金 具   |        |        | 1      |        |     |
| 素 文 銅 鏡   | 3      |        |        |        |     |
| 佐 波 理 容 器 | 1      |        |        |        |     |
| 佐 波 理 瓔 珞 | 2      |        |        |        |     |
| 銅 鈴       | 2      | 1      |        |        |     |
| 銅 人 形     | 2      |        |        |        |     |
| 鉄 人 形     | 15     |        |        |        |     |
| 鉄 鏃       | 2      |        |        |        |     |
| 鉄 刀 子     | 17     | 1      |        |        | 1   |
| 鉄 鑿       | 4      |        |        |        |     |
| 鉄 錐       |        | 1      |        |        |     |
| 鉄 鍬・鋤 先   | 1      |        |        |        |     |
| 鉄 釘       | 32     |        |        |        | 4   |
| 海老鉋牡金具    | 1      |        |        |        |     |
| 鉄 不 明 金 具 | 2      |        |        |        |     |
| 和 同 開 珎   | 27     |        |        |        |     |
| 萬 年 通 寶   | 6      |        |        |        |     |
| 神 功 開 寶   | 20     |        |        |        |     |
| 承 和 昌 寶   | 1      |        |        | 1      |     |
| 貞 観 永 寶   | 1      |        |        |        |     |
| 不 明 銭     | 1      |        |        | 2      |     |

端部を曲げる。他端を尖らせる。当初曲げていたものを延ばしており、中央付近がやや波状に湾曲する。金具を再利用した釘の一種か。長4.9 cm、厚さ0.1 cm、重量1.7 g。褐色粗砂層出土。

**素文小鏡**（7～9） SD6400から鑄造品2点、板金を用いたもの1点が出土した。7・8は鑄造の小鏡で、鏡縁をつくらない形式。いずれも鏡面を鑄造後に鑢で整形する。7は鏡背面を細いたがねで整形する。周縁は鑢で面取りする。径3.2 cm、鈕部高0.6 cm、厚さ0.1 cm、重量3.5 g。褐色粗砂層出土。8は鏡面・周縁を鑄造後に鑢で整形する。背面は湯だれの痕があり、全体をたがねで整形した後、鑢がけをしている。そのため、部分的にたがねの削痕も残る。径3.6 cm、鈕部高0.9 cm、厚さ0.1 cm、重量8.4 g。暗灰砂層出土。9は薄い板金を円形に切り取り、中央に小孔をあける。「凸」字状の金具を別に作り、突出部を小孔に通して留める。破損が激しく、全体が屈曲する。復原径4.2 cm、鈕部高0.4 cm、厚さ0.02 cm、重量3.7 g。

**瓔珞**（10・11） 佐波理容器の破片を切断し小孔を穿ち、垂飾としたもの。全体は緩やかに湾曲する。10は周縁を切断後に鑢で整形する。長さ3.2 cm、幅2.5 cm、厚さ0.1 cm、重量4.7 g。暗灰砂層出土。11は周縁に切断痕が残る。長さ3.2 cm、幅3.1 cm、厚さ0.1 cm、重量3.0 g。褐色粗砂層出土。

佐波理製  
垂飾

**銅鈴**（12・13） SD6400から完形品2点、SE6657から破片が1点出土した。12・13はSD6400出土品。いずれも半球状の上半部と下半部からなる。上半部の下縁を若干外反させ、そこに下半部上縁を若干内湾させて被せ接合する。板状の鈕を上半部頂部の小孔に差し込み固定する。下半部には一文字の切り口を施す。ともに鉄製の丸が残る。12は高さ2.9 cm、径2.5 cm、重量9.3 g。褐色粗砂層出土。13は高さ3.8 cm、径3.1 cm、重量20.1 g。暗灰砂層出土。

**銅製人形**（14・15） SD6400から2点出土した。いずれも銅の薄板を細長く切り、浅いV字形の切り込みにより、頸部・腰・足を表現する。14はほぼ完形。V字形の切り込みを両側縁に2ヶ所ずつ、下端に1ヶ所入れる。長さ14.2 cm、幅0.9 cm、厚さ0.03 cm、重量1.4 g。木屑層出土。15は腰の部分のみ残る。両側縁に下辺が長い三角形の切り込みを入れ腰を表現する。現存長6.4 cm、幅0.4 cm、厚さ0.04 cm、重量0.9 g。褐色粗砂層出土。

**責金具**（16） 全体が倒卵形を呈する鑄造の鞆責金具。外側面に螺旋状に溝を刻む。長径4.2 cm、短径2.6 cm、幅0.9 cm、厚さ0.1 cm、重量8.4 g。SK6278出土。

この他に注目すべき遺物としてSD6400出土の佐波理容器小片が1点ある。また、遺物包含層から江戸時代の小柄が1点出土した。

## B 鉄製品（Pl.54—17～55—37, Ph.69—34, 70—17～33）

**鉄製人形**（17～21） SD6400から15点出土した。いずれも短冊状の鉄の細板を用いる。顔面が残るものは9点あり、目・鼻・口をたがねで刻んでいる。体の表現は、浅いV字形の切り欠きで頸部・足を表現するものが1点、たがねの刻み・切り込みで腕・足を表現するものが14点ある。後者には足の残るものが8点ある。いずれも下端から縦にたがねで切り込みを入れ、左右に広げて足とする。また、後者には、縦にほぼ均等に4ヶ所穿孔したものが2点ある。17は、銅人形と同様な作りのもの。しかし腰部には明確な切り込みはない。たがねで目・鼻・口を表現する。裏面には長さ約1 mmの短い刻みが両側縁に2ヶ所ずつ、中央に1ヶ所施されており、あるいは表現の異なる顔面なのかもしれない。長さ12.0 cm、幅1.0 cm、厚0.2 cm、重量7.0 g。



18～21はたがねの刻みで顔・腕を表現するもの。18は側縁下部から現状で斜めに左右4回ずつの連続したたがね彫りで、腕を表現する。頭端部、足を欠損する。現存長7.8 cm、幅1.4 cm、厚0.2 cm、重量3.7 g。褐色粗砂層出土。19は腕を斜め方向の刻みで表現する。足を広げた結果、左右の足が若干前後する。頭部を欠損する。現存長17.5 cm、胴部幅1.5 cm、厚0.2 cm。重量20.9 g。暗灰砂層出土。20は短い刻みで腕を表現する。足は欠損する。現存長7.0 cm、幅1.4 cm、厚0.1 cm、重量3.9 g。褐色粗砂層出土。21は穿孔を持つもの。4ヶ所に円形の小孔をあけた短冊形の鉄板に顔・腕をたがねで表現し、下端はたがねで切り開き足を作る。全体がやや湾曲する。長さ10.8 cm、胴部幅1.5 cm、厚0.2 cm、重量9.4 g。褐色粗砂層出土。

**鉄鏃** (22・23) SD6400から雁又式1点、方頭斧箭式2点、鏃身を欠損した長頸鏃が1点出土した。22は有茎で関篋被を持つ雁又式鉄鏃。身の股部に刃を研ぎだす。錆ぶくれが激しい。長さ13.1 cm、茎長6.8 cm、幅3.5 cm、重量22.5 g。灰色粘土層出土。23は有茎で関篋被の方頭斧箭式鉄鏃。茎端は斜めに切断している。長さ7.2 cm、茎長2.2 cm、幅2.5 cm、厚さ0.2 cm、重量7.2 g。暗灰砂層出土。

**刀子** (24～26) SD6400から17点、SE6657から1点、遺物包含層から1点出土した。24は刀身の関付近には刃を研ぎださず、断面方形の鑢座を作る。刃には研ぎ減りがある。切先を欠損する。現存長12.4 cm、茎長6.9 cm、身幅1.2 cm、厚さ0.4 cm、重量15.5 g。褐色粗砂層出土。25は茎の刃側に段がつく。刃には研ぎ減りがある。全体に錆化が激しい。長さ17.5 cm、茎長7.5 cm、身幅1.3 cm、厚さ0.4 cm、重量16.5 g。褐色粗砂層出土。26は茎が背側に反る。造りが全体に薄い。刃には研ぎ減りがある。全長17.1 cm、茎長7.3 cm、身幅1.9 cm、厚さ0.2 cm、重量12.4 g。暗灰砂層出土。

**鑿** (27) 全体は角棒状を呈し、先端の片面を斜めに面取りし刃をつけ、他端は柄への挿入のために細くする。木柄に挿入した部分は錆化の様子が異なる。長さ9.0 cm、幅0.8 cm、厚さ0.4 cm、重量9.6 g。褐色粗砂層出土。

**釘** (28～33) SD6400から32点、遺構外の包含層から4点出土した。頭部の形状で分類すると、環頭1点、円頭2点、方頭3点、折頭13点、半円頭2点があり、その他は頭部を欠損している。28は環頭釘。円環部・脚断面は偏円形を呈する。長さ4.2 cm。円環部径1.7 cm。脚部径0.5 cm、重量6.9 g。遺物包含層出土。29は円頭釘。断面方形の脚に円形の頭部がつく。脚はS字状に屈曲する。長さ6.2 cm、頭部径1.4 cm、脚部厚0.4 cm、重量3.2 g。褐色粗砂層出土。30は方頭釘。断面方形の脚に方形の頭部を鍛接する。長さ6.8 cm、頭部幅1.4×1.5 cm、脚部厚0.7 cm、重量8.8 g。褐色粗砂層出土。31は折頭釘。脚の上端を折り曲げ、そのまま釘頭とする。先端を若干欠損する。現存長7.4 cm、頭部幅0.8 cm、脚部厚0.5 cm。重量5.0 g。褐色粗砂層出土。32は折頭釘。脚の上端を薄くたたきのばし、折り曲げて頭部とする。脚端部は屈曲し、先端を欠損する。現存長11.0 cm、頭部幅1.6 cm、脚部厚0.7 cm、重量25.1 g。褐色粗砂層出土。33は半円頭釘。半月形の板状の頭部を脚に被せるように鍛接する。長さ9.7 cm、頭部幅2.4 cm、脚部厚0.8 cm、重量17.9 g。褐色粗砂層出土。

**海老鉸牡金具** (34) バネ軸を3本持つ形式で、縦に開くバネを上段に2ヶ所、横に開くバネを下段に1ヶ所配する。弦受け部の端部をL字に折り曲げそこに弦通しの孔をあける。下段のバネは、区の下部の切り込みにはめ込み、L字状の端部を弦受け部平坦面の円孔に差し込んで留

3本の軸  
バネ

める。弦受部全体に漆塗り(生漆?)の痕跡が残る。長さ9.5 cm、幅1.5 cm、高さ3.2 cm、重量31.3 g。褐色粗砂層出土。

**不明金具** (35・36) 用途不明の金具が2点出土している。35は扇状をした鉄板の長辺の両端部の2ヶ所に小孔をあけ、両側縁を折り曲げたもの。横幅4.3 cm、縦幅3.1 cm、厚0.1 cm。重量8.9 g。暗灰砂層出土。36は鉄板を円錐形に巻いて鍛接し、石突状にしたもの。端部を若干欠損する。現存長5.7 cm、径1.3 cm、厚0.1 cm。重量8.4 g。褐色粗砂層出土。

**鋤鋏先** (37) 木製の身にはめ込むための溝を持つ鍛造のU字形鋤鋏先。刃部を若干欠損し、片側側縁部が折れているが、本来の形状をよくとどめている。長さ24.5 cm、幅18.1 cm、刃部厚0.5 cm、溝部高1.4 cm、重量387.3 g。暗灰砂層出土。

## C 銅 銭(Ph. 71)

遺構別出土枚数は Tab. 5、計測値と型式は銭種別に別表5にまとめた。型式は『平城宮報告 VI』の分類に依拠している。以下では、銭種別に、SD6400出土品の中から代表的な20点について報告する。

**和同開珎** (1～9) 今回出土した和同開珎は、すべて「開」字の門構え上部が隸書風に開く。

新 和 同 1～3はもっとも通有なA型式。銭文は全体に角ばり、細字。4・5は「珎」字が他より小振りなC型式。6は背面の内郭縁が幅広いD型式。7は背面内郭縁の四隅が丸いE型式。全体に薄く、内郭穴のバリ取りも荒い。8・9は「和」字の第3画が短く全体が内郭よりになるF型式。8は表面に荒い鑄目が残る。

**萬年通寶** (10～12) 今回出土した萬年通寶はすべて「萬」字下部を「内」につくる。10は通有のA型式。11は背面の内郭の四隅が丸いC型式。この部分に荒い鑄目が残る。12は内郭穴にたがね痕を明瞭に残すD型式。全体に厚手で、重量も他より圧倒的に大きい。

**神功開寶** (13～18) 今回出土の神功開寶はすべて「功」字の旁が「刀」で、「開」字は隸書風。13は「寶」字の「貝」が小振りなD型式。14～16は「功」字の「刀」第2画が長く伸びるE型式。17・18は銭文はE型式と同様だが外郭が広めのF型式。

小 様 **承和昌寶** (19) 銭径により「大様」と「小様」があるが、今回の出土銭は「小様」。19は表面の劣化が激しく、銭文は肉眼では判然としないが、X線写真により承和昌寶と判別できた。全体がやや屈曲し、ひびが2ヶ所に入る。なお、この他に木棺墓 SX6428から出土した3枚の銅銭のうち1枚が承和昌寶(小様)であることを確認した。残り2枚は銭文が判読不能だが、銭径から見て承和昌寶の可能性が高い。

**貞観永寶** (20) 表面の劣化が激しく、銭文はX線写真でも判然としないが、第3字がかろうじて「永」と読み、貞観永寶と判断した。

## 5 ガラス製品・鑄造関連遺物・石製品他

### A ガラス製品・鑄造関連遺物

#### i ガラス製品関連遺物(Pl. 56—1~9, Ph. 72)

今回の調査では、東一坊大路西側溝 SD6400の奈良時代の各層から、ガラス小玉1点、ガラス小玉鑄型片5点、ガラス埴塼片6点が出土した。これらの多くはSD6400と六条大路南側溝SD6449が合流する地点から出土したものである。なお、出土層位を記しているものは、SD6400からの出土品である。

**ガラス小玉(5)** 全面が風化、白濁している。直径5mm、高さ3mm、孔径2mm。褐色粗砂層出土。

**ガラス小玉鑄型(1~4)** 土師質の粘土板に多数の小孔を穿ったもので、小孔の底面中央には、ガラス小玉の紐通し孔のために鉄芯を立てたと考えられる直径約1mm、深さ2mmの孔がみられる。胎土はいずれも長石粒を含み緻密である。小孔の大きさや表面の調整、形状などに差異が認められることから、複数個体のものであることがわかる。1は緩やかに弧を描く縁をもつ破片。小孔は直径3mmで他よりも小さく、現状で21個確認できる。配列は比較的雑然としている。裏面は布目圧痕。暗灰砂層出土。2は1とは異なり、隅丸の角部をもつ破片。表面には直径4mmの小孔13個を確認できる。表・裏面ともナデ調整を施すが、裏面はナデ調整の前に格子タタキ目を施している。褐色粗砂層出土。3・4は縁辺部の破片。3の表面には直径4mmの小孔22個を整然と配列している。隅の1個の小孔には黒色炭化物が詰まっている。裏面には布目圧痕が残る。褐色粗砂層出土。4は表面をヘラ削りした後、直径4mmの小孔をあける。小孔は11個確認できる。また、縁辺に並行して浅い沈線が入る。側面はヘラで切って形を整えている。裏面には布目圧痕が残る。褐色粗砂層出土。

**ガラス埴塼片(6~9)** これまでの出土例と同様、胴部から口縁にかけてわずかに内傾し、平坦な口縁端部をもつ砲弾形のものであったと推定できる。いずれも胎土は灰色を呈し、長石粒を含む。また、器壁外面には格子タタキ目がみられる。黒ないし緑色をした薄いガラス膜が内面全面と外面の一部を覆っている。底部の形や器壁の厚さの違いから、出土した埴塼片は複数の個体であることがわかる。6は口縁部の破片で厚さ1.0cm、青灰色砂質土層出土。7も口縁部の破片で厚さ0.9cm、褐色粗砂層出土。8は丸味をもつ底部の破片で、約40mmにわたって分散して出土した5片が接合した。厚さ1.5cm、胴部径9.2cm、暗灰砂層・褐色粗砂層出土。9は

尖り気味の底部の破片で厚さ2.0cm、褐色粗砂層出土。

SD6400から出土したガラス工芸に関連する遺物は、一連の作業を示すような埴塼・鑄型・小玉といった遺物がまとまって出土した点や使用

Tab. 6 西側溝土層別出土ガラス関連遺物

|         | ガラス小玉 | ガラス小玉鑄型 | ガラス埴塼 |
|---------|-------|---------|-------|
| 暗 灰 砂   |       | 1       | 3     |
| 青灰色砂質土  |       |         | 1     |
| 褐 色 粗 砂 | 1     | 4       | 2     |
| 計       | 1     | 5       | 6     |

済みの複数個体の遺物であるなどの特徴を持っている。こうした点から、これらは付近にあったガラス工房で使用されていたものが、一括して SD6400 に投棄され、埋没過程で分散したと考えられよう。

ii 鑄造関連遺物 (Pl. 56—10～57—15, Ph. 73)

鑄造関連遺物は、調査区南西隅などからも出土しているが、大半は SD6400 から出土している。SD6400 では、奈良時代前半～平安時代末の各層から、坩堝片 10 点、鞆羽口片 32 点、炉壁・壁体片 109 点、鉾滓 69 点が出土した。

**坩堝** (10) 椀形をした坩堝である。胎土は緻密で灰褐色を呈し、長石粒を若干含む。外面は凹凸があり、下半部には、指頭圧痕が認められる。手捏ねによるものであろう。内面から口縁外面にかけて厚く黒色の鉾滓が付着するとともに、口縁外面に付着する鉾滓の下が約 1.5 cm 幅で暗灰褐色に変色している。高さ 4.6 cm、口縁部厚 0.5 cm、底部厚 0.8 cm で、復原口径は 12.5 cm。暗灰砂層出土。

**鞆羽口** (11・12・14・15) 11 は彎曲羽口。通風孔先端がやや内彎しながら、緩やかに下へ屈曲する。

彎曲羽口 長石を多く含む多孔質の胎土で、通風孔の周囲が淡橙色、周縁部が灰褐色を呈する。外表面全体に赤褐色から青紫色の鉾滓が付着し、通風孔先端では鉾滓が垂下して固まっている。鉾滓表面には粒状の銅が多数みられる。直径 5.0 cm、通風孔径 2.2 cm。装着角は 20° 前後。褐色粗砂層

直線羽口 出土。12 は直線羽口。通風孔先端と胴部の径はほとんどかわらない。胴部は面取りされて、断面が多角形を呈している。胎土は長石を多く含んでいる。通風孔先端は黒褐色に変色し、所々溶融ガラス化している。直径 6.0 cm、通風孔 2.5 cm、装着角はほぼ水平である。暗灰砂層出土。

大形の鞆羽口 14・15 は大形の鞆羽口。14 は断片のため、直径は復原できないが、胎土には細かな砂粒を含む緻密な粘土を用い、通風孔周辺は灰褐色、外面は黄褐色を呈する。外面には厚さ 4 cm に及ぶ灰褐色の鉾滓が付着する。最大厚 4.9 cm。SD6400 上の遺物包含層出土。15 は鞆羽口の先端部。外面は表面が溶融ガラス化した暗褐色の鉾滓に覆われ、内面先端は暗灰色に変色している。胎土は緻密で、比較的多量のスサを混入する。最大厚 1.3 cm、通風孔径 8.0 cm。暗灰砂層出土。

**炉壁** (13) 円筒形をした炉の側壁の破片。残存部が少ないため、大きさなどは判明しないが、極めて緩い円弧を描いて内彎することから大形の炉であったと推定される。3.0 cm 前後の粘土帯を積んで構築したようで、現状では、4

段の粘土帯を確認できる。胎土には長石を含む比較的緻密な粘土を用いており、スサを混入している。破面の色調は、内壁側から暗灰色、赤褐色、灰白色と変化する。内壁側には、木炭片が混じった鉾滓が一面に付着し、下に向け厚さを増し、下辺では厚さ 3 cm に達する。鞆羽口を装着するため炉壁の一部を削り抜いた痕跡とみられる部分が残っており、内壁側は溶融ガラス化が他より進んでいる。こ

Tab. 7 西側溝鑄造関連遺物土層別出土量 (g)

|          | 羽 口    | 鉾 滓    | 炉 壁     | 坩 堝   |
|----------|--------|--------|---------|-------|
| 灰 黄 土    | 79.4   | 49.6   | 626.6   |       |
| 灰 色 粘 土  |        |        | 223.2   |       |
| 褐 色 粘 土  |        | 110.0  |         |       |
| 青 灰 細 砂  | 200.9  | 1745.9 |         |       |
| 暗 灰 粘 土  | 648.4  | 1199.3 | 9630.7  |       |
| 暗 灰 砂    | 1632.9 | 520.4  | 4879.5  | 204.3 |
| 木 屑 層    | 32.5   | 108.0  |         |       |
| 褐 色 粗 砂  | 401.0  | 718.2  | 810.3   | 38.7  |
| S X 6422 | 14.0   |        |         |       |
| 不 明      |        | 3.3    |         |       |
| 計        | 3009.1 | 4454.7 | 16170.3 | 243.0 |

の場合、鞆羽口はほぼ水平の角度で装着されたと復原できる。暗灰砂層出土。

鑄造関連遺物も、ガラス工芸関連遺物と同様、一連の作業工程を示す遺物がまとまって出土した。SD6400から出土した炉壁の破片には、数条の粘土帯からなるものがあるほか、形状・胎土・厚さなどが類似するものが多い。さらに、針金状の鉄片を器壁表面・内部に残すものもある。これらのことから、炉は幅3～5cm前後の粘土帯を積み上げて構築したもので、補強のため、鉄線を巻き込んだり、外から巻くことを行っているようである。また、炉壁に比較的大形の羽口を水平に近い角度で装着したことも推測でき、こうした構造や外見は、いわゆる甗炉と類似する。第252次調査で出土した鉾津33点中23点をランダムに採取して蛍光X線分析で成分分析したところ、おおむね鉄を主成分としており、15点が95～100重量%の割合で鉄が含まれていた。また、7点には鉄に次いで19～66重量%の銅が含まれていることが判明した。これからすれば、甗炉は鉄素材や不要になった鉄製品を中心とした金属製品を溶解し、鑄造に用いたものであろう。さらに、別項で取り上げたSD6400出土の砥石や鉄製品などの一部も、あるいはこうした生産活動と関連するものかもしれない。鑄造に関連していえば、銅を溶解した際に用いたと考えられる鞆羽口(11)も出土している。これは上記の甗炉に装着されたと推定される大形の直線羽口とは異なり、比較的小形の彎曲羽口である。鉄製品の鑄造とは別に、銅製品の鑄造を行う施設の存在を示している。

甗炉と類似

鉾津の分析

銅製品の  
鑄造

このようにSD6400出土の鑄造やガラス製品と関連する遺物は、多種の生産活動を示している。このSD6400例と同様、ガラス関連遺物と鑄造関連遺物が共伴して出土した平城京右京八条一坊十三・十四坪間の条間小路側溝SD1499に面した十四坪内では、これらの作業を行った工房群が検出されている<sup>9)</sup>。SD6400出土の遺物もこうした複合的な工房群の存在を示す可能性はある。このことは、出土地点にもっとも近接する七条一坊十六坪内の建物群の性格を考える上でも参考になろう。しかし、道路側溝からの出土という点で、廃棄位置からの二次的移動や混入の可能性も考慮する必要もある。したがって、SD6400出土のガラス工芸・鑄造関連遺物の性格の詳細解明については、周辺地区の調査の進行を待つ必要がある。

## B 奈良・平安時代の石製品(Pl. 58, Ph. 74)

今回の調査で出土した奈良・平安時代の石製品には、砥石16点、石銚・玉・穿孔石製品各1点がある。これらのうち、砥石10点は東一坊大路西側溝SD6400から出土したが、六条大路南側溝や七条条間北小路との交差部に比較的集中している。それ以外の砥石は十六坪内外各所から出土したものである。このほか、穿孔石製品は井戸SE6561から出土し、玉は木棺墓SX6428に副葬されていたものである。

**石銚(1)** 黒色粘板岩製の鉈尾で、一辺を破損している。表面は平滑で光沢をもつとともに、多数の線状の研磨痕を観察できる。裏面には多くの二次的な剝離痕とやすりによる溝状の傷が残る。また、四隅には2孔一組の潜り穴があげられているが、そのうちの1組は、本来の潜り穴が破損した結果、横に新たに設けている。大形であることから平安時代のものと考えられる。長さ4.5cm、現存幅6.0cm、厚さ0.8cm。重さ41.1g。遺物包含層出土。

鉈尾

**穿孔石製品(2)** 滑石製で、半分を欠損する。ソラマメ形をした偏平な小礫に片側から直径約6mmの孔を穿ったもの。側面を研磨により仕上げている。長さ3.3cm、現存幅2.8cm、厚さ1.4

cm。重さ19.9 g。

**玉(3)** 水晶製。中央に直径1.5 mm、深さ3.5 mmの小孔があげられているが、貫通していない。細い棒状のものを挿入して、何らかの装飾品としたのであろうか。直径1.1 cm、重さ1.9 g。平安時代前半。

**砥石(4～8)** 4は方柱状のもので、小口面以外の狭長な4面がバチ形をした研磨面となっている。研磨面・小口面には深い線状痕を残している。表面には長石風化による細孔が多数認められる。長さ12 cm、幅4.3 cm、厚さ4.2 cm、重さ264 g。流紋岩製。暗灰砂層出土。5は扁平なもので、表裏両面の研磨面は幅の広い分銅形を呈す。表裏両面・小口面に多数の線状研磨痕がみられる。両側面も平滑であるが、線状の研磨痕はみられない。表面には長石風化による細孔が認められる。長さ11 cm、幅10 cm、厚さ4 cm、重さ548 g。流紋岩製。SK6507出土。6は扁平な直方体で、端部を欠損している。研磨面は1面で、研磨により緩やかに凹む。長石風化による細孔があく。長さ7.2 cm、幅4.2 cm、厚さ1.3 cm。重さ67 g。流紋岩製。六条大路出土。7は不整形な大形岩片を素材としたもので、研磨面は1面のみ。やや凹んだ研磨面には、研磨によると考えられる平行する深い線状痕跡が多数みられる。裏面は剥落が進んでいる。側面には、数ヶ所、火を受けた時のような黒変部がみられる。長さ14 cm、幅15 cm、厚さ8 cm、重さ1,932 g。砂岩製。暗灰砂層出土。8は不整形な角礫を利用したもので、内彎した研磨面をもつ。研磨面は平滑で、極めて細かい線状の研磨痕が多数みられる。裏面は節理面であるが、一部に研磨痕が観察できる。長さ15.5 cm、幅8.8 cm、厚さ5.2 cm、重さ996 g。ホルンフェルス製。暗灰砂層出土。

奈良・平安時代の石製品では、石鏝が注目されるであろう。石鏝の存在は、平安時代にこの付近で律令官人が活動していた可能性が考えられ、長岡京遷都後の平城京の状況を知る手がかりとなるものである。比較的多数出土した砥石は、素材・形状とも平城京内でしばしば出土するものと同じである。また、その調査区内での分布も、SD6400を除くと散在した状況であり、SD6400からの出土も、他の遺物が多く出土した範囲からのものであり、特定の作業との関連等を検討するにはいたらなかった。

## C 弥生時代以前の石器(Pl. 59)

調査区からは、計88点の旧石器時代から弥生時代までの石器が出土した。これらはいずれも後代の遺物包含層もしくは遺構埋土から出土した。特に記述するもの以外は、いずれもサヌカイトを素材とするものである。

**角錐状石器(1)** 分厚い横長剝片を素材とし、全周から粗い急角度の二次加工を施している。左側縁がやや肩を張る。旧石器時代。長さ3.5 cm、幅0.9 cm、厚さ0.7 cm、重さ2.5 g。

**石鏝(2～7)** 2は縄文時代晩期のいわゆる飛行機鏝。粗い加工で特徴的な形状を作り出している。長さ3.3 cm、幅1.8 cm、厚さ0.5 cm、重さ1.9 g。3は無茎凹基の小形の石鏝。縄文時代もしくは弥生時代。長さ2.5 cm、幅2.1 cm、厚さ0.3 cm、重さ1.1 g。4～7は有茎凸基の石鏝。茎部や側縁の形状に差異が見られるものの、いずれも弥生時代。4～6は上下端を欠損する。4は残存長4.5 cm、幅2.4 cm、厚さ0.9 cm、重さ6.8 g。5は残存長4.3 cm、幅2.4 cm、厚さ0.8 cm、重さ6.4 g。6は残存長5.4 cm、幅2.9 cm、厚さ0.6 cm、重さ6.7 g。7は長さ7.3 cm、幅

2.1 cm、厚さ0.5 cm、重さ6.5 g。

**石錐**(8・9) 2点とも分厚い剝片を素材とし、両面からの加工で突出した刃部を作り出している。いずれも刃部先端を欠損する。弥生時代。8は残存長2.9 cm、幅2.1 cm、厚さ0.7 cm、重さ4.4 g。9は残存長2.7 cm、幅2.8 cm、厚さ1.0 cm、重さ7.8 g。

**石匙**(10) 薄い剝片を素材としている。ノッチ状を呈する緩い角度の両面加工で作られた摘み部のみが残存する。縄文時代もしくは弥生時代。残存長3.9 cm、幅5.2 cm、厚さ1.0 cm、重さ11.0 g。

**楔形石器**(11) 両極打法で剝離された薄い偏平な剝片を素材とし、その上下両端を緩い角度の剝離で二次加工している。弥生時代。長4.1 cm、幅5.1 cm、厚さ0.5 cm、重さ11.2 g。

**スクレイパー**(12~15) いずれも弥生時代。12・13は直刃のもの。12は石刃状の縦長剝片を素材とし、両側縁に二次加工を施して直刃を形成している。13は横長剝片の下縁に緩い角度のインバースリタッチを施し、刃部を形成している。14・15は凸刃のもの。14は薄い横長剝片の下縁両面に緩い角度の二次加工を施している。15は握り拳大の礫を半裁した礫片の周縁に急角度の二次加工で刃部を形成している。12は長さ8.0 cm、幅3.7 cm、厚さ0.9 cm、重さ30.4 g。13は長さ4.8 cm、幅7.6 cm、厚さ1.3 cm、重さ39.7 g。14は長さ4.0 cm、幅6.6 cm、厚さ0.8 cm、重さ26.8 g。15は長さ4.5 cm、幅5.5 cm、厚さ2.1 cm、重さ61.7 g。

**石庖丁**(16・17) いずれも弥生時代。16は板状の流紋岩を素材とした大形のもの。半分を欠損する。刃部縁に細かな剝離が連続している。背側に穿孔が施されていたが、大きく破損する。長さ5.8 cm、残存幅9.7 cm、厚さ0.9 cm、重さ69.9 g。17は板状の緑色片岩を素材とし小形のもの。16よりも磨滅が進む。片面の刃部縁に細かい線状の使用痕が認められる。背側に2ヶ所穿孔していたが、1ヶ所は破損する。長さ4.3 cm、残存幅4.5 cm、厚さ0.6 cm、重さ19.8 g。

**石斧**(18) 砂岩製の磨製石斧。弥生時代。両面から刃部を研ぎ出している。刃部にみられる欠損には再研磨が施されている。基部には打撃による潰れが目立つ。一方の面には、斜方向の線状痕が多数みられるとともに、柄との摩擦のためであろうか、中央が緩やかに窪む。長さ14.9 cm、幅6.3 cm、厚さ2.6 cm、重さ447.3 g。

今回の調査地では、遺構を検出することはなかったが、各種の石器が出土し、付近に弥生時代以前各期の遺跡があったことを想定できる。石器の中でも相対的に出土量の多かった弥生時代についていえば、本調査地の北約1 kmにある左京五条一坊十六坪の下層では、方形周溝墓を検出している<sup>2)</sup>。また、旧石器時代の遺物が出土したことは、いわゆる「地山」に旧石器の包含層があることを示唆するものであり、平城京城における今後の調査においても、注意していく必要があろう。

旧石器包含層の存在

1) 奈文研『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989

2) 奈良市教育委員会の御教示による。

## 6 木 簡

出土状況 木簡は、六条大路北側溝と東一坊大路西側溝から出土した。このうち六条大路北側溝からは3点が出土したのみであるが、同溝の堆積は6層に分かれ、最下層(灰褐砂層)から1点、その上の層(灰黒粘土層)から2点出土した。

一方、東一坊大路西側溝からは総計864点(うち削屑506点)と大量に出土した。同溝の堆積層は大きくは7層に分けられ、下3層が奈良時代、上4層が奈良時代末以降に属す。木簡は奈良時代に属する下から第一層(褐色粗砂層)・第二層(木屑層)と、奈良時代後半から12世紀までの遺物を含む第四層(暗灰砂層)から出土した。各地点・土層ごとの出土点数は別表8のとおりである。これによれば、木簡の出土状況は他の遺物と同様な傾向を示していることがわかる。すなわち六条大路南側溝との合流点付近、橋 SX6420付近、十六坪の南北2分点付近、七条条間北小路との交差点付近に分布の山がある。

次に木簡に記された年紀には、天平2年(76・85)、天平20年(35)、天平勝宝5年(69)、天平宝字7年(8)、天平宝字(67)、宝亀3年(75)、(宝)亀7年(112)があり、奈良時代を通じてこの溝が機能し、また木簡が廃棄されていたことがわかる(各土層と紀年木簡の関係については、第III章2A参照)。

釈文については巻末に掲載した。以下、主なものについて解説を加える。

2は上下を欠損しているが、讃岐国寒川郡からの荷札であろう。3は短冊形ではなく、左辺は文字のある部分を斜めに切り、下半部も左右両側から斜めに切って細くするという二次的整形を受けている。しかし文章は1行目から2行目へとそのまま続いており、内容は解の事書き部分だけが書かれているものである。したがって長さは本来の法量を留めているとみられるが、文書木簡としては長さは12 cm 強と極端に短いから、正文ではなく習書ないしは落書であろう。

7の「松本宅」については、天平勝宝4年4月の「写経所請経文」(『大日本古文書(編年)』12巻264頁)、および、かつて平城宮南面西門(若犬養門)前の二条大路北側溝から出土した木簡<sup>1)</sup>に見える「松本宮」との関連の有無が注意されよう。前者は造東大寺司写経所が花厳経1部80巻を松本宮から奉請したというもので、經典を所蔵していたことがわかる。

題籤軸 8は軸の頭部を板状に作りだした題籤軸である。表裏ともおそらく同じ内容の記載で、裏面1行目下端は損傷によって文字の有無が不明だが、「月」が書かれていたであろう。「諸司」から文書が届けられ、それらを貼り継いで保管するような部署で用いられたものである。11の日下はおそらく「案主」であろう。13は下端は折れ、左辺は割れている。右辺も上半部のみ原形をとどめ、下半部は割れているが、その境目の側面から孔が横に貫通している。これは考課・考課・成選 成選に関わる木簡に特有の型式(6015型式)である。そうした木簡には官職・位階・姓名・年齢・本貫地が記されており、いわば官人の個人カードとなっているが、この木簡も表は位階と姓名部分が残し、裏は天地逆方向に叙位に関する記載がされているようである。考課のために上日等を記した6015型式木簡は、家令・帳内・資人等についても作成されたため、宮内で見つかるだけでなく、長屋王家木簡中に含まれる<sup>2)</sup>ように、京内でも出土している。

革 簡 18「革簡」の類例としては、『延喜式』に「納位記料革簡」(内記式)、鎮魂祭の日に用い「御



服案」に盛る「革筥一合」(中宮式)、5月5日の節会で宴会に文人を召す際に用いた「内宴儲料革筥」(内蔵式)、「諸司年料供進」の品目中の内匠寮が進める「革筥廿合」(同前)などがある。なお内匠寮が出す年料革筥20合の内訳は衾筥4合・衣筥6合・剣緒筥1合・巾筥2合・唾巾筥2合・櫛筥4合・刀子筥1合で、その作製に牛皮10張と鹿皮10張を用いる(内匠式)。

21は門の警備にあたる「列」の歴名を記したものである。これだけではどの門かは不明であるが、それを探る手がかりとして、「中大伴門」の門号は注目される。弘仁陰陽寮式土牛条逸文(『年中行事秘抄』所引)には、大寒の日の前夜、宮城諸門に立てる土牛童子像の色を規定しているが、その中に大伴門の名が見える。そして『延喜式』の同条文と比較するとき、それが朱雀門に相当することは明白である。『続日本紀』天平6年2月癸巳朔条や平城宮跡出土木簡<sup>3)</sup>などから、朱雀門の名が既に平城宮で用いられていたことは明らかであるが、一方で大伴門の名も使われていたことは、宮内出土の木簡にその名が見えることからわかる<sup>4)</sup>。恐らく公的には朱雀門と呼んだが、古来の大伴門という呼称も並行して用いられていたであろう。

したがって「中大伴門」は朱雀門に関連のある門号であり、平城宮内にあった門と考えるのがもっとも穏当であろう。そうすると「中」から想起されるのが、『続日本紀』天平神護2年5月戊午条に見える「中壬生門」である。それは大納言吉備真備が柱を中壬生門の西に立て、官司に抑屈された百姓にその下で訴えさせるようにしたという記事である。壬生門は先の『弘仁式』『延喜式』等によれば、二条大路に面する宮の南面東門である。それに対し「中壬生門」については、大きく2つに説が分かれている。すなわち「中」は宮内の門のランクである中門の意であるというのが1つ。宮内の門は内裏に近い方から、内裏の門である内門(養老令では閤門。宮衛令集解宮閤門条所引古記説参照)、その1つ外側の中門(宮門)、最外郭で宮の外回りの門である外門(宮城門)という3つのランクに分かれる。そこで中壬生門は壬生門の1つ内側の中門、すなわち第二次朝堂院の南にある朝集殿院南門にあてる<sup>5)</sup>というものである。もう一つは、「訴えを直接聞くという本条の政策の趣旨からいえば、宮内よりはむしろ人々の往来の多い壬生門の前のほうが穏当であろう」として、中壬生門は壬生門と同じであると解する説<sup>6)</sup>である。この場合は「中」の意味は、奈良時代後半には壬生門の北に朝堂院・大極殿院・内裏が並ぶことから、平城宮の中でいわば中心軸的な位置を占めるということになるだろう。

しかしここでもう1つ「中+宮城門」というタイプの門号の存在が明らかになると、それを宮城門と同じ門と解するよりは、その1つ内側の門にあてるほうが妥当ではなかろうか。そうであるなら「中大伴門」は朱雀門の北側の門ということになる。平城宮ではそこにはいわゆる第一次朝堂院があり、それには朝集殿院が付属しないから、朝堂院の南門が「中大伴門」であろう。このように朱雀門の北に「中大伴門」があったとすると、平安宮では朱雀門の北側にあたる朝集殿院南門が、「応天門」と呼ばれるようになることも、理解しやすいと思われる。この理解に大過なければ、中門(宮門)の警護にあたったのは、衛門府と衛士府であったから(宮衛令集解宮閤門条所引古記説)、「中大伴門」を守る「三龍列」は門部ないしは衛士であろう。もう1つ同じ木簡に見える「曾雅門」については、門号からは蘇我氏との関連が想起されるかもしれないが、他に所見なくその位置は不詳である。しかし「中大伴門」と並記されているから、やはり中門(宮門)にあたるのであろう。

25「府生」は衛府の官人で、神亀5年8月に設置された中衛府に6人置かれた(『続日本紀』同 衛 府

月甲午(子の誤りか)条)のを初見に、同年11月には「衛府府生者兵部省補」との制が出されている(『同上』同月壬寅条)。26の「佐」は衛府の次官に使われる用字である。官位令によると、衛門佐と左右衛士佐は従5位下相当、左右兵衛佐は正6位下相当で、木簡の「正六位上」とはいずれも1階ずれる。その他令外の授刀衛では正5位上(『同上』天平宝字3年12月甲午条)であり、やはり合わない。また『続日本紀』(宮内庁書陵部所蔵谷森本)天平宝字3年7月丁丑条には「内薬佐」とある。これは内薬司の次官であり、木簡で「佐」の前が「司」とあるのに適合的であるかのようであるが、これは職員令によれば「内薬佑」とすべきもので、かつ相当位階は従7位下であるから、この木簡と関わらない。したがっていずれの官司に属するのかは不明である。

32と33とは同一木簡から生じた削屑の可能性が高い。35木簡の日付である天平20年12月18日は、『続日本紀』では同月で唯一記事のある日(甲寅条)で、それは「遣使鎮祭佐保山陵。度僧尼各一千」というものである。ただし木簡との関係は不明。48(紀伊国)名草郡上神郷は『和名抄』に見えない。51「取松」とは松明用の松の準備にかかわるのであろうか。54は盤・大盤の数量を記し、合点を付けてチェックしている。裏はそれとは関係なく、この木簡が不要になった段階で九九を書いたものである。57河内国大県郡の「家原」は、『和名抄』にはない。しかし旧紀伊医王寺所蔵「大般若経」の奥書に「家原邑」「家原里」と出てくる(『大日本古文書(編年文書)』25巻172~174頁)。そこには家原寺があり、天平勝宝8歳2月に孝謙天皇が行幸し、同寺をはじめ近辺にあった6寺で礼仏したことで知られる(『続日本紀』同月己酉条)。

61は銭の付札であるが、600文という額から判断すると、衛士ないし仕丁の養銭であろう。養銭は68にも見える。63三衆郷は上総国畔蒜郡に属する。『延喜式』主計上によれば、上総国の中男作物の品目中に熟麻が含まれる。66(越前国)敦賀郡返駅は、『延喜式』兵部省では鹿蒜駅と表記され、松原駅と淑羅駅の間、現在の福井県今庄町帰付近に比定される。同駅については、かつて平城宮第104次調査で東院地区西辺の南北溝SD3236から、「返駅子戸主大神部宿奈戸同菰太調三斗」という荷札が出土している<sup>7)</sup>。なお平安時代には鹿蒜山は歌枕となり、「ゆきめぐりたれもみやこにかへる山いつはたときくほどのはるけさ」(『紫式部集』)のように、「帰る」と掛けた歌が多く詠まれた。

70は『和名抄』に見える讃岐国大内郡引田郷であろう。72伊与国浮穴郡井門郷も『和名抄』に見える。73の同国伊与郡桜井村は他に所見ないが、「伊与国越智郡朝倉村物部家公戸白米伍斗」(『長岡京木簡2』872号木簡)のように、『和名抄』に郷として見えるものを、村と表記する例が伊与にはある。74同国宇和郡海部郷も『和名抄』に見えない。75に見える大宰府の「交易油」に関連しては、『延喜式』民部下の交易雑物条に大宰府の貢納品の一つとして「雑油卅石」が見える。86「貽鮓」の「貽」は「貽貝」のことであろうか。それなら二条大路木簡中に「・若狭国遠敷郡木津郷御贄貽貝鮓一堀／・「木津里」」という類例<sup>8)</sup>がある。

琴 形 88から91までは、ほぼ同じ大きさの2点分の琴形に書かれたものである。88と90が上板で、上端に5つの小孔、下端には5カ所の切り込みがあり、糸をかけるようになっているが、実際にかけた痕跡はない。89と91は底板である。ともに下端に目玉状の丸を墨で描いた部分があるが(91は左半部が欠損)、上端のその部分は残存していない。本来の形は、底板の上下両端の部分が横に切れ目を入れて折り曲げ、前後の側板として斜めに立ち上げていたとみられる。また、これらとは別に逆台形の左右の側板があり、鋸歯状模様を墨線で描いている。それらを組み合

わせると、ちょうど船のような形になる。そうすると89・91下端の2つの丸は、船の舳先部分に描かれていることになるが、『吉備大臣入唐絵巻』に見える吉備真備の乗る遣唐使船の舳先には、眼が描かれている。この2つの丸がそうしたものであるとすると、底板の文字も外側に書かれたことになるが、上板の文字が外側になっていたのかどうかはわからない。なお89の墨円を描いた部分の裏側下端には、墨が塗られている。また底板の89には2ヶ所、91には1ヶ所、小さい孔がある。そこに棒を刺すというように、琴形の使用法に関わるものである可能性もあろう。

89・90・91の墨書は習書であるが、「道」「郡」「隠」などの共通する字があるから、もとは同材であったとみてよい。また88は大和国忍海郡の名を書き、他の習書とは趣を異にするが、その「郡」字の右、材の右端にある墨付きは、89の3字目の「道」のしんによりの左下に続くものとみられる。したがってすべて一括史料とみてよい。88を含めていずれの文字も、琴形の板の中に上下はおさまっている。左右もほぼおさまっているが、先ほど指摘したことからすると、少なくとも88・89は字を書いた後から板を切ったとみられる。しかしその場合も、板の中での文字の位置からすると、切ることを意識して字を書いたのではなかろうか。あるいは既に切り整えた板を並べて、文字を書いたという可能性もないことはないが、その理由は考えにくい。また祭祀に用いる琴形に文字、それも多くの習書を記した意味はわからない。あるいは使用後に板を並べて書いた可能性も考えられようが、祭祀に用いた物の扱いとしては疑問が残る。なお88の郡名の意味ともども、今後の課題である。

92は下半部の左右を削って羽子板の柄状に細くはしていないが、上下に切り込みがあり、かつ「封」字はちょうど上の切り込みの位置に書かれ、字の中間に墨が横に途切れている部分があることから判断して、これが封緘木簡であることは明らかである。裏面を調整していないのは、他の封緘木簡と共通している。

93異筆部分は「千字文 勅員外散騎侍郎周興嗣次韻」の習書。108「寒来暑往秋」はやはり『千字文』の一節「寒来暑往、秋收冬蔵」部分を記したものであろう。112は「宝亀七年」であろう。また116から121までは材を横向きに置いて書いているが、同一木簡から生じた削屑とみられる。3桁の数字と「夕」字が見えることからすると、上日数を書き上げたものであろう。こうした上日数は考課のためのものであろうが、113「六考中」は成選にかかわるものである。13の叙位に関する木簡との関連で注目されるところである。

- 1) 奈文研『平城木簡概報』15 1982
- 2) 奈文研『平城京木簡一』1995、同『平城宮木簡五』1996
- 3) 奈文研『平城木簡概報』29 1994
- 4) 奈文研 註3)前掲書
- 5) 直木孝次郎「平城宮諸門の一考察」『日本書紀研究』15 1987
- 6) 岩波新日本古典文学大系『続日本紀』4 1995の本条に対する補注
- 7) 奈文研『平城木簡概報』12 1978
- 8) 奈文研『平城木簡概報』22 1990

## 7 動物遺存体

### A 出土した動物遺存体

出土した動物遺存体の大部分は、東一坊大路西側溝 SD6400から出土したものである。その他に、七条条間北小路の北側溝 SD6472の底にさらに土坑を穿ち、ウマを複数頭収めた遺構 SX6530や、SE6432、SE6657などの井戸枠内埋土からの出土例が存在する。

動物種 同定できた動物遺存体はすべて哺乳類のもので、破片数734点を数え、種類と部位の判明した内訳はウマ202点、ウシ54点、ヒト9点、イヌ7点、イノシシ6点、ニホンジカ3点、原形はうかがうことが出来るが哺乳類として以外に判別のつかない破片400点の、6種、計681点で、その他は原形の判明しない細片であった。SD6400からの出土例のように、それぞれの個体が原形を保って出土する例が少ない場合は、古生物学、考古学で一般に用いられる最小個体数推定法<sup>1)</sup>は有効でないため、破片数を持ってそれぞれの種類ごとの量比とする。

SD6400から出土した動物遺存体は、1個体がまとまって出土した例は無く、総て散乱状態であった。ただし同一個体のものと思われる複数部位が同じ小地区、層位から出土する例はある。これは今回出土した動物遺存体が散乱状態ながらも、さほど移動することなくこの溝に堆積したことを示している。また、細片となったものも含めて、骨に含まれるリン分が地下水に含まれる鉄分と化合して藍鉄鉱(ピビアナイト)を析出しているものが多い。これは、溝の堆積状態が常に水漬けの状態にあったことを示している。一般に平城京の溝の堆積土壌は、地下水を含んだ粒度の粗い砂層、礫層と粘土層が互層になり酸化状態になっていることが多い。そのような堆積環境では、リン酸とカルシウムを主成分とする骨のような有機遺物の保存に適さないため、大きく残りやす

Tab. 8 遺構別出土動物遺存体

| 遺構番号   | 層 位    | 種 名  | 出土点数 |
|--------|--------|------|------|
| SD6400 | 各層     | イノシシ | 5    |
|        |        | ウシ   | 53   |
|        |        | ウマ   | 187  |
|        |        | シカ   | 3    |
|        |        | イヌ   | 7    |
|        |        | ヒト   | 9    |
|        |        | 不明   | 380  |
| SD6411 | 青灰粘質土  | 不明   | 1    |
| SD6449 | 暗灰砂    | ウシ   | 1    |
|        |        | ウマ   | 3    |
|        |        | 不明   | 4    |
|        | 暗灰粘土   | 不明   | 1    |
|        |        | ウマ   | 4    |
|        | 灰黄シルト  | 不明   | 3    |
| SD6451 | 灰黒粘土   | 不明   | 2    |
| SD6471 | 暗灰粘土   | イノシシ | 1    |
|        |        | ウマ   | 4    |
|        |        | 不明   | 2    |
|        | 底凹み    | ウマ   | 2    |
|        |        | 不明   | 2    |
| SD6472 | 上層     | ウマ   | 1    |
| SE6432 | 井戸枠内   | 不明   | 1    |
| SE6657 | 井戸枠内埋土 | 不明   | 1    |
| SX6530 |        | ウマ   | 1*   |
|        |        | 不明   | 3    |
| 総点数    |        |      | 681  |

※他に一括して取り上げた頭部を含む資料があり、現在保存処理中である。

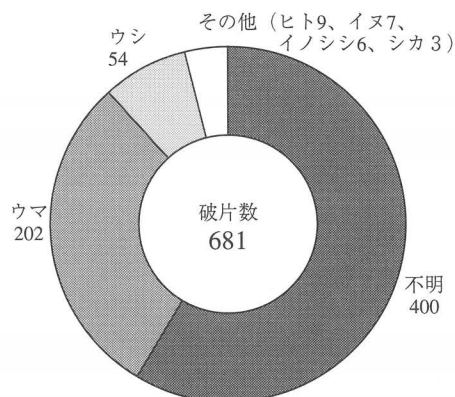


Fig. 24 動物遺存体破片割合

いウシやウマなどの大型哺乳類の骨だけが残って、その他の小型哺乳類、魚類、両生類などは腐朽して残らないことが従来からの傾向としてうかがえる。例外的に井戸枠内に堆積した肌理の細かな暗灰粘土(還元状態にある粘土)層などでは、小さなカエルの骨まで残る場合がある<sup>2)</sup>。このような傾向は、平城京全体でうかがうことができる。ただし、平城京内でも平城宮付近や京の北方や西方の標高が高く地下水位の低い場所では、埋没している溝も埋土は乾燥していたことが多いようで、そうした地域の大路の側溝や土坑などでは、骨の痕跡すら残されないことが多い<sup>3)</sup>。

Tab. 9 出土種名表

|                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 霊長目 PRIMATES               | 偶蹄目 ARTIODACTYLA           |
| ヒト科 HOMONIDAE              | イノシシ科 SUIDAE               |
| ヒト <i>Homo sapiens</i>     | イノシシ <i>Sus scrofa</i>     |
| 食肉目 CARNIVORA              | シカ科 CERVIDAE               |
| イヌ科 CANIDAE                | ニホンジカ <i>Cervus nippon</i> |
| イヌ <i>Canis familiaris</i> | ウシ科 BOVIDAE                |
| 奇蹄目 PERISSODACTYLA         | ウシ <i>Bos taurus</i>       |
| ウマ科 EQUIDAE                |                            |
| ウマ <i>Equus caballus</i>   |                            |

## B 種ごとの概要

**ヒト** 上腕骨が1点、大腿骨が7点、脛骨が1点で、大きく頑丈な骨に限られる。いずれも成人のものであろう。従来より平城京の東堀河でも他の動物骨に混じって人骨が出土している 成人の骨が<sup>4)</sup>、平城京でも、このような牛馬骨の中に人骨が含まれるような光景がごく普通にあったようである。いずれも表面の腐食が著しく、刃物傷や犬のかじり痕は観察できなかった。

**イヌ** 下顎骨3点、後臼歯2点、上腕骨2点が出土している。いずれも成獣の大きさである。平城京右京八条一坊十三・十四坪の調査<sup>5)</sup>でも、イヌの下顎骨が3点出土していたように、ウシ

Tab. 10 種類・部位別動物遺存体出土量

|      | 頭蓋骨 |   | 上顎骨 |   | 上顎臼歯 |    | 下顎骨 |   | 下顎臼歯 |    | 犬 歯 |   | 椎 骨 |   | 肩甲骨 |   | 上腕骨 |   | 橈 骨 |   |
|------|-----|---|-----|---|------|----|-----|---|------|----|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
|      | 左   | 右 | 左   | 右 | 左    | 右  | 左   | 右 | 左    | 右  | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 |
| イ ヌ  |     |   |     |   |      |    | 2   | 1 | 2    |    |     |   |     |   |     |   | 1   | 1 |     |   |
| イノシシ |     |   |     |   |      |    |     | 2 |      |    |     |   |     |   |     |   | 3   | 1 |     |   |
| ウ シ  |     |   |     | 1 | 5    | 3  | 2   |   | 4    |    |     |   |     |   |     |   | 2   | 3 | 3   | 1 |
| ウ マ  |     |   | 2   |   | 28   | 37 | 4   | 5 | 26   | 30 |     | 1 |     |   | 1   |   | 6   | 4 | 2   | 2 |
| シ カ  |     |   |     |   |      |    |     |   |      |    |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |
| ヒ ト  |     |   |     |   |      |    |     |   |      |    |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |

|      | 尺 骨 |   | 中手骨 |   | 寛 骨 |   | 大腿骨 |   | 脛 骨 |   | 中足骨 |   | 踵 骨 |   | 距 骨 |   | 足根骨 |   | 基節骨 |   |
|------|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
|      | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 | 左   | 右 |
| イ ヌ  |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |
| イノシシ |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |
| ウ シ  |     | 1 | 4   | 2 |     | 2 | 4   | 1 | 2   | 3 | 3   | 1 | 1   |   | 1   |   |     |   |     |   |
| ウ マ  |     |   | 1   | 3 | 2   | 3 |     | 2 | 3   | 4 | 3   | 3 |     |   |     |   |     |   |     | 4 |
| シ カ  |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   | 1   |   |     |   |     |   | 1   | 1 |     |   |
| ヒ ト  |     |   |     |   |     |   | 2   | 3 |     | 1 |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |

やウマの骨に混ざって、イヌの骨の中でも特に頑丈な下顎骨とその臼歯が少数出土する。イヌの骨はウシやウマに比べてたいへん小さく薄いため、平城京のような土壌では残らない場合が多いと考えられ、実際にはかなりのイヌの骨が存在したであろう<sup>6)</sup>。

**イノシシ** 下顎骨2点、上腕骨4点が出土している。これが野生のイノシシか、家畜化されたブタかは、本資料からはいずれとも判別しがたい。『続日本紀』天平4(732)年の「放生」の記事に、「詔して畿内の百姓の私に畜いたる猪四十頭を和買いて、山野に放ち、性命を遂げ令む。」とあり、畿内には飼われていた猪がいたことがわかる。豚という漢字は近世に使われだした国字であるので、「猪」という1字では野猪とも家猪とも決しがたいが、弥生時代のブタの存在が明らかになるにつれて、この猪もブタであった可能性はある。

**ウマ** 本資料中、最多の出土を示す。ウマの部分骨のなかでも、上下の臼歯の出土がもっとも多い。これは、歯のエナメル質が骨の中でももっとも残りやすいからである。出土した臼歯にはエナメル高のほとんどなくなった老齢のものは少なく、牡齢のものが多く見られる。

**ウシ** 平安時代の絵巻物に描かれているように、古代では、貴族の乗り物として牛車が普及しており、貴族の屋敷内でウシが飼われていたようであるが(『左京記』の長和5(1016)年の記事ほか)、これまでの調査でも、平城京からのウシの出土は多くない。本地域からは主として臼歯の出土が多かった。本出土例も、古代都城ではウマが多く、ウシが少ないという、これまでの平城京や長岡京などでの所見と合致する。これが京内で使役されていたウマとウシの比率をそのまま示すものか、あるいは、斃牛馬処理の過程の違いでこのような差を生じたのかという2つの可能性を挙げることができるが、現時点では前者の可能性のほうが高いと考えられる。

## C 考 察

### i 平城京における斃牛馬処理

今回の調査で出土した動物遺存体は、大部分がSD6400の埋土から出土したもので、埋土の地下水位が高いことが動物遺存体の保存を助けた。しかし、平城京でも、宮の周辺から五条あたりまでの側溝では、地下水位の高いところでも、動物遺存体の出土例が比較的少ないという傾向がある。ところが、平城京の東市、西市より下の条坊大路、条坊間路の側溝からは、地下水位の高いこともあって動物遺存体が出土する例が多い。特に、平城京左京九条三坊の東堀河<sup>7)</sup>や、西市の東にあたる平城京右京八条一坊の西一坊坊間路の西側溝SD920<sup>8)</sup>からは大量の動物遺存体が出土している。さらに西一坊坊間路西側溝からは、動物遺存体とともに金属製品、鋳造関連遺物が多く出土し、律令的生産体制のもとでさまざまな生産にかかわる工房が集まっていたと考えられる。

生きている間は乗用、牽引、負荷などに供されたウマ、ウシも、死して後もさらに無駄なく斃牛馬処理 利用されたことが『養老令』『厩牧令』の規定からわかる。そこには、「凡そ官の馬牛死なば、各皮、脳、角、膽を収れ。若し牛黄を得ば、別に進れ。」とあり、『令義解』には「脳とは、馬の脳也。膽とは牛の膽也。」と注釈がふられる。さらに「凡そ公事に因りて、官私の馬牛に乗りて理を以て死を致せしむ。証見分者。並に徴ること免せ。其れ皮肉は、所在官司出し売れ。価を送りて本司に納れよ。若し、非理に死失せば、微り陪てしめよ。」ともある。このことから、

牛馬が死んだ場合、牛馬ともその皮と穴をとり、馬については脳、牛については膽(胆嚢)、角をとって納め、地方においては、牛馬とも皮と穴を売りさばき、代金を国庫に納めたことがわかる。このような史料から、古代の斃牛馬の利用法として、最後に解体した残滓(骨)の廃棄を伴ったことがわかり、本調査において出土した牛馬骨は、その結果生じた廃材であったこともわかる。このように斃牛馬、および屠殺された牛馬の再利用の資源として、牛馬の皮、肉、馬の脳、牛の角と胆嚢、牛黄があげられるが、それぞれの製品としての用途についての考察は十分にはなされておらず<sup>9)</sup>、今後の研究を必要とする。

肉の利用については、『日本書紀』天武4(675)年には、四月朔日より九月卅日まで「牛馬犬猿鶏の穴を食らうこと莫れ」という詔が出され、続けてわざわざその期間以外は禁止しないと断っていることから、人間の食用としての肉の利用が考えられる。また、『続日本紀』天平13(741)年には、「馬・牛は人に代わり勤勞して人を養う。ここに因して先に明制有りて屠殺を許さず。今聞くに、國郡は未だ禁止すること能はず。百姓は猶屠殺すること有り。」とあり、地方においても牛馬の屠殺が行われていたことを示している。この屠殺は、後に述べるように農業、干害に対処するための牛馬を犠牲にする可能性もあるが、儀式の一環としての肉食も含めて、古代には、現在、われわれが考えられている以上に肉食が広く行われていたことを充分想定できるであろう。

イヌの骨が散乱状態で出土することについては、前述の『日本書紀』天武4(676)年の記事に犬が含まれ、イヌの肉も食べられていた可能性が高いと考える。縄文時代のイヌは埋葬されている例が少なくないうえ、散乱状態で出土例も刃物傷を持つものは少なく、原則的に食べられていなかったのであろう。ところが弥生時代になるとイヌの埋葬例は激減し、溝に投げ捨てられたり、食べられたりした例が増加する。これまで古墳時代から平安時代末までの良好な動物遺存体を出土する遺跡が少なかったが、広島県福山市草戸千軒町遺跡の鎌倉時代から室町時代にかけての層からは、明らかに食用とされたイヌの骨が多数出土している<sup>10)</sup>。また、イヌの毛皮は防寒着にもよく、近年まで東北地方でも利用されていたという<sup>11)</sup>。SD6400から出土したイヌも、皮を剥がれて肉もまた賞味された可能性が高い。

皮の利用については、『延喜式』に牛、馬、鹿についての別々の利用法が記されている。それは、牛や馬の皮は適度な堅さと耐久性を要求され、単純なみ洗いと乾燥や油なめしで履き物や腰帯に加工され、さらに鹿皮はしなやかな手触り、弾力が要求されるため、馬の脳漿を使った脳漿なめしによってなめされるという。原皮のそれぞれの特性と用途に応じた加工法が確立されていたことがわかる。

## ii 土坑 SX6530出土のウマ

七条条間北小路の南側溝 SD6471の底に、さらに長さ6 m、幅1.5 m、深さ0.5 mの長円形土坑 SX6530を掘り、中に最少個体数3頭のウマの頭蓋骨および四肢骨の骨を収めた遺構がある。土坑の深さ、大きさからみて3頭の全身を収めるには規模が小さすぎるため、首を切った頭部と胴部の一部を収めた可能性が高い。骨質の大部分は腐朽し、頭蓋骨の骨質部は完全に消失して上下顎骨のエナメル質のみが土中に原位置で直立して残る。大きさはいずれも成獣のようである。四肢骨は腐食が著しく、部位のはっきりするものもほとんどなかった。

『日本書紀』『皇極紀』における殺牛馬の記事が干害への対処法として見られる。『続日本紀』延暦10年、『日本紀略』延暦20年にも、各地で牛を殺して神を祭ることを禁止すると見られる記事が存在する。また、『日本霊異記』の中巻第五説話、「漢の神の祟りに依り、牛七頭を殺し祭り、また放生の善を修して、もちて現に善惡の報いを得し縁。」にも見られるように、民間を基盤とした漢神信仰に対して、国家が仏教を拠り所に宗教の統制を行おうとする意図がうかがえる。また、前述の『続日本紀』天平13年には、国家として馬牛の屠殺を禁止している。このような度重なる禁止令にもかかわらず、古代、中世を通じて実際にさまざまな機会に殺牛殺馬が行われたことが発掘の成果からわかりつつある<sup>12)</sup>。本例もこうした動物祭祀の遺構の一つとして捉えることができよう。長岡京でも左京二条二坊、二条条間大路・東二坊大路交差点付近での不明遺構 SX16207では、雌のウマ1体の首を切断して、頭部を胴部の傍らに配置し、横たえた跡が検出されている。その周辺からは墨書人面土器が11点が出土し、そのウマの直下からは木製の鳴鏑が出土している<sup>13)</sup>。このような例は、地方だけでなく古代都城の中心に近い場所においても、国家が禁止する殺牛馬信仰にともなう儀礼が執り行われたことを示しているだろう。

- 1) 部位別、左右別に出土頻度を数えて、最大の出土頻度を示す数値を最少個体数とする。たとえば、下顎骨右2、左4、上腕骨右3、左1であれば、下顎骨左の4点を最少個体数と数えて、残りは、その4個体の中に含まれると仮定する方法。
- 2) 松井 章「動物遺存体」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989 pp. 135—137
- 3) たとえば松井 章「平城京左京三条二坊・二条二坊出土の動物遺存体」『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘報告』1995 pp. 573—576
- 4) 松井 章「動物遺存体」『平城京東堀河一左京九条三坊の発掘調査』1983 p. 32
- 5) 松井 章 註2)前掲書
- 6) 松井 章 註2)前掲書 pp. 54—56
- 7) 松井 章 註4)前掲書 p. 32
- 8) 松井 章「動物遺存体」『平城京右京九条一坊十一坪発掘調査報告書』1984 pp. 54—56
- 9) 松井 章「養老厩牧令の考古学的考察—斃れ馬牛の処理をめぐって—」『信濃』Vol. 39、No. 4 1987 pp. 231—256
- 10) 松井 章「草戸干軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」『草戸干軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ—北部地域南半部の調査』1994 pp. 343—364
- 11) 大林太良「日本における狩猟の系譜」『狩猟と漁労』1992 p. 267
- 12) 松井 章「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集 1995 pp. 55—71
- 13) 清水みき・渡辺 博「長岡京左京第162次(7 ANEKD 地区)～左京二条二坊、二条条間大路・東二坊大路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 1989 pp. 187—233